

公表時間
3月15日(火)14時00分

2011年3月15日
日 本 銀 行

金 融 経 済 月 報

(2011年3月)

本稿は、3月14日に開催された政策委員会・金融政策決定会合の時点で利用可能であった情報をもとに記述されている。

本稿の内容について、商用目的で転載・複製を行う場合（引用は含まれません）は、予め日本銀行政策委員会室までご相談ください。

引用・転載・複製を行う場合は、出所を明記してください。

【概 要】

わが国の景気は、改善テンポの鈍化した状態から脱しつつある。

輸出や生産は、増加基調に復する動きがみられる。設備投資は持ち直している。雇用・所得環境は引き続き厳しい状況にあるものの、その程度は幾分和らいでおり、個人消費には、持ち直しの動きがみられている。住宅投資は持ち直しつつある。一方、公共投資は減少している。

先行きについては、緩やかな回復経路に復していくと考えられる。もっとも、今回の地震によって、わが国は、地理的にも広範囲な被害を受けており、当面、生産活動の低下が見込まれるほか、企業や家計のマインドの悪化も懸念される。

輸出は、海外経済の改善を背景に、基調的には緩やかに増加していくとみられる。個人消費は、持ち直していくとみられる。この間、設備投資は、企業収益が改善基調にあるもとで、持ち直しの動きを続けるとみられる。もっとも、設備過剰感が残ることなどから、そのペースは緩やかなものにとどまる可能性が高い。こうしたもとで、生産は、基調的にみると、緩やかに増加していくと考えられる。

物価の現状について、国内企業物価の3か月前比をみると、国際商品市況高の影響などから、上昇している。消費者物価（除く生鮮食品）の前年比は、マクロ的な需給バランスが緩和状態にあるもとで、下落幅は縮小を続けている。

物価の先行きについてみると、国内企業物価は、国際商品市況の動きを反映して、当面、上昇を続けるとみられる。消費者物価の前年比は、当面、小幅のプラスに転じていくとみられる¹。

¹ 消費者物価指数については、本年8月に2010年基準の指数に切り替わり、前年比計数が2011年1月分に遡って改定される予定である。その際には、前年比変化率が下方改定される可能性が高い。

金融面をみると、短期金融市場では、オーバーナイト物コールレート（加重平均値）は概ね0.1%を幾分下回る水準で推移しており、ターム物金利も横ばい圏内の動きとなっている。前月と比べ、長期金利は低下し、株価は下落している。この間、円の為ドル相場は前月と概ね同じ水準となっている。

わが国の金融環境は、引き続き、緩和の動きが強まっている。

コールレートがきわめて低い水準で推移する中、企業の資金調達コストは、低下傾向が続いている。実体経済活動や物価との関係でみると、低金利の緩和効果はなお減殺されている面があるが、企業収益との対比では、その効果は強まっている。資金供給面では、企業からみた金融機関の貸出態度は、改善が続いている。C P・社債市場では、社債の発行体の裾野が広がるなど、発行環境は一段と良好になっている。資金需要面では、企業の運転資金需要、設備資金需要とも後退しているほか、一部に、これまで積み上げてきた手許資金取り崩しの動きもみられている。以上のような環境のもとで、企業の資金調達動向をみると、銀行貸出は減少している。一方、社債の残高は前年を上回っているほか、C Pの残高は減少幅が縮小傾向にある。こうした中、企業の資金繰りをみると、総じてみれば、改善している。この間、マネーストックは、前年比2%台半ばの伸びとなっている。

1. 実体経済

公共投資は減少している。月次の指標をみると（図表5）、発注の動きを示す公共工事請負金額は2四半期連続で減少したあと、1月の10～12月対比は小幅増加となった。工事進捗を反映する公共工事出来高については、10～12月は前期比減少した。

先行きの公共投資については、減少が続けるとみられる。

実質輸出は、増加基調に復する動きがみられる（図表6(1)、7）。実質輸出の1月は、中国の春節の影響などにより、前月比－5.8%の減少となった。

1月の前月比を地域別にみると（図表7(1)）、東アジア向けについては、中国向けと香港向けが減少となったが、これは春節の影響が大きいとみられる。中国における春節に伴う休暇は、毎年時期が異なるため、季節調整値でみても、1～2月の輸出は毎年大きく変動する。本年の春節休暇は2月2～8日となっており、前年（2月13～19日）よりも早めとなっている。このため、わが国からの中国や香港への輸出は、1月終わり頃には事実上ストップしたとみられる。香港以外のN I E s 向けやA S E A N向けについては、中間財、資本財・部品を中心に増加した。米国向けは減少したが、これは自動車関連の船待ちなどによる振れとみられる。ちなみに、米国の自動車販売そのものは、順調に回復している。EU向けについても、自動車関連を中心に弱めの動きとなった。その他地域向けは、自動車関連や資本財・部品を中心に、持ち直しの動きがみられる。

財別にみると（図表7(2)）、1月の10～12月対比は、すべての財で減少しているが、そのうち資本財・部品や中間財は横ばい圏内まで持ち直してきている。

実質輸入は、横ばい圏内で推移している（図表 6 (1)、9）。実質輸入の1月の10～12月対比は+2.4%となった。

1月の10～12月対比を財別にみると（図表 9 (2)）、すべての財が増加した。素原料や中間財は、生産の増加を反映した動きとみられる。消費財は、薄型テレビの輸入は一服したものの、繊維製品の増加を主因に全体でも増加した。情報関連も、タブレット型端末などを中心に底堅く推移している。

純輸出の動きを表す実質貿易収支をみると（図表 6 (2)）、上記輸出入の動きを反映して、持ち直しの動きがみられる。名目貿易・サービス収支や経常収支は、1月にやや大きめの減少となった。これは、実質貿易収支が春節の影響により一時的に減少したことに加え、国際商品市況上昇に伴い、輸入価格が上昇したことが影響している。

先行きの輸出については、新興国を中心とした海外経済の改善を背景に、基調的には緩やかに増加していくとみられる。

先行きの輸入については、国内景気の回復傾向などを背景に、基調的にみると、緩やかな増加傾向を続けると予想される。

ただし、今回の地震による生産活動の低下を受けて、輸出入ともに、当面、弱めの動きとなる可能性がある。

設備投資は持ち直している。法人企業統計で名目ベースの設備投資をみると（図表 10(1)）、10～12月は前期比で小幅の増加となり、3四半期連続の増加となった。業種別・規模別にみると（図表 11）、製造業は、大企業で増加が続いたものの、中堅中小企業は横ばい圏内の動きとなった。非製造業は、大企業で増加した一方、中堅中小企業で減少した。機械投資の一致指標である資本財総供給をみると（図表 12(1)）、このところ横ばい圏内の動きとなっている。先

行指標についてみると、機械投資の先行指標である機械受注（船舶・電力・携帯電話を除く民需）は、10～12月に前期比で減少したが、1月は10～12月対比で増加した（図表13(1)）。業種別にみると、製造業は、10～12月に前期比で減少したあと、1月は10～12月対比で増加した。一方、非製造業（船舶・電力・携帯電話を除く）は、10～12月に前期比で減少したあと、1月の10～12月対比も減少となった。建設投資の先行指標である建築着工床面積（民間非居住用）をみると、1月は10～12月対比で大幅に増加した（図表13(2)）。業種別にみると、鉱工業は、前期の反動から減少した。一方、非製造業は、医療・福祉関連や流通関連を中心に、大幅に増加した。

設備投資を取り巻く環境をみると、企業収益は改善基調にある。法人企業統計をみると（図表10(2)）、売上高経常利益率は、10～12月は、7～9月対比で上昇した。業種別・規模別にみると、いずれの業種・規模についても、売上高経常利益率は上昇した。ただし、季節調整の問題や非製造業の振れなどにより、10～12月の動きは実勢よりも強めに出ている可能性が高い。

先行きの設備投資は、企業収益が改善基調にあるもとで、持ち直しの動きを続けるとみられる。もっとも、設備過剰感が残ることなどから、そのペースは緩やかなものにとどまる可能性が高い（図表12(2)）。また、今回の地震による企業マインドへの影響にも注意が必要である。

個人消費には、持ち直しの動きがみられている。まず、財の消費動向を小売業販売額（実質）でみると（図表15(1)）、1月は10～12月対比で増加した。耐久財の消費動向をみると、乗用車の新車登録台数（除く軽自動車）は、エコカー補助終了後の反動により11月まで減少が続いたが、12月以降は新車投入の効果もあって、改善傾向にある（図表15(2)）。家電販売額（実質）も、12月

は駆け込み需要の反動が大きくでたものの、1月は増加に転じた²。コンビニエンスストア売上高の1月の10～12月対比は、食品やたばこを中心に、増加している（図表16(1)）。全国百貨店売上高も、身の回り品などが堅調に推移していることなどから、1月は10～12月対比で小幅の増加となった。一方、全国スーパー売上高は、飲食料品や家電を中心に、1月は10～12月対比で減少した。サービスの消費動向をみると（図表16(2)）、旅行取扱額や外食産業売上高は、横ばい圏内の動きが続いている。

需要側の統計について、家計調査の消費水準指数（実質ベース）を、GDPの推計に利用される品目にほぼ限定した「除く住居等」のベースでみると（図表15(1)）、1月は10～12月対比で減少となった³。家計消費状況調査の支出総額（二人以上の世帯、実質ベース）も、1月は10～12月対比で減少した。

消費者コンフィデンス関連指標は、このところやや改善してきている（図表17）。

先行きの個人消費は、持ち直していくとみられる。ただし、今回の地震による家計マインドへの影響には注意が必要である。

住宅投資は持ち直しつつある。先行指標である新設住宅着工戸数をみると（図表18(1)）、1月の10～12月対比は小幅の増加となった。在庫や価格の調整が進んだことや、借入金利の低下、政府の住宅購入促進策などの影響から、持家、

² 家電エコポイント制度は、「円高・デフレ対応のための緊急総合経済対策」等において見直しが行われ、①2010年12月1日以降に購入した分のポイント発行数は約半分とされたほか、②2011年1～3月の購入分については、対象商品を絞り込んだ上で、リサイクルを行った場合にのみポイントを付与することになった。

³ 消費水準指数（除く住居等）は、消費支出合計から、住居や自動車等購入、贈与金、仕送り金を除いている。それでもなお、GDP推計に用いられない項目が残存している（例えば教育費）。

分譲を中心に持ち直し傾向にある。

先行きの住宅投資については、着工戸数の動きなどからみて、徐々に持ち直していくと予想される。もっとも、雇用・所得環境の改善が当面限定的とみられることなどから、回復の明確化には時間がかかる可能性が高い。

鉱工業生産は、増加基調に復する動きがみられる。1月の生産は、前月比+2.4%と3か月連続でプラスとなった（図表19）。内訳をみると、国内新車販売や輸出の回復により輸送機械が増加しているほか、一般機械も輸出向けを中心に増加している。四半期ベースでみると、1月の10～12月対比は、季節調整の歪みもあって、+5.0%と高めの伸びとなっているが、実勢ベースでみても増加しているとみられる⁴。

出荷も、1月の10～12月対比は+2.8%の増加となった。財別にみると（図表20）、生産財は、鉄鋼、電子部品・デバイス、自動車部品を中心に増加した。耐久消費財は、乗用車が増加したものの、薄型テレビが減少したことから、全体でも減少となった。また、建設財は、月々の振れを均してみれば、このところ緩やかな増加傾向にある。非耐久消費財は、たばこを中心に、持ち直している。資本財（除く輸送機械）は、振れを均してみれば、緩やかな増加基調が続いている。

在庫についてみると、1月は、薄型テレビや乗用車を中心に、増加した。出荷・在庫バランスを前年比でみると（図表21）、薄型テレビや乗用車の動きを反映して、在庫の伸びが出荷の伸びを上回った。なお、電子部品・デバイスで

⁴ 2010年4月に行われた季節調整替えにより、2008年10～12月と2009年1～3月の生産の大幅な落ち込みの一部が、実勢ではなく「季節性」によるもの、と認識されている可能性が高い。こうした季節調整法は、その後の10～12月、1～3月の伸び率を押し上げ、4～6月、7～9月の伸び率を押し下げる方向に働くことになる。

は、在庫の伸びの方が高い状態が続いており、前年比では在庫調整途上の形となっている。

先行きの生産については、基調的にみると、緩やかに増加していくと考えられる。ただし、今回の地震によって、地理的にも広範囲な被害を受けており、当面は、生産活動の低下が見込まれる。

雇用・所得環境は引き続き厳しい状況にあるものの、その程度は幾分和らいでいる。

労働需給面をみると、有効求人倍率は緩やかな改善傾向にある（図表 22(1)）。完全失業率は、なお高い水準にあり、横ばい圏内の動きとなっている。

雇用面についてみると（図表 23(1)）、労働力調査の雇用者数の前年比は、このところ小幅のプラスとなっている。毎月勤労統計の常用労働者数は、前年比プラスで推移している。雇用調整助成金等にかかる休業等実施計画届の受理状況をみると、申請者数はなお高水準であるが、緩やかな減少傾向にある⁵。この間、所定外労働時間をみると、季節調整済みの水準が横ばい圏内で推移しているため、前年比の上昇幅は低下傾向にある（図表 23(3)）。

一人当たり名目賃金をみると（図表 24(1)）、1 月は前年比で小幅増加となった。内訳をみると、所定内給与は、出勤日数が前年対比で少なかったことなどから、前年比で小幅のマイナスとなった。所定外給与は、前年比で増加を続けているが、その伸びは鈍化している。冬季賞与（特別給与の 11～1 月分）は、

⁵ 厚生労働省は、急激な円高の影響により、生産量の回復が遅れている事業主の雇用維持を支援するため、2010 年 12 月には要件緩和が終了する予定であった雇用調整助成金の要件を再び緩和し、以下の条件全てに該当する場合についても、2010 年 12 月から 1 年間に限り、支給対象とすることとなった。①円高の影響により生産量が減少、②直近 3 か月の生産量が 3 年前の同時期に比べ 15%以上減少、③直近の決算等の経常損益が赤字。

ほぼ前年並みとなった。製造業がプラスとなった一方、非製造業はマイナスとなった。非製造業では、地方公務員の弱さを反映して、教育・学習支援、医療・福祉が大きく減少した。

雇用者所得は、以上のような雇用・賃金動向を反映し、このところ前年比で小幅のプラスとなっている（図表 24(3)）。

先行きの雇用者所得については、概ね下げ止まった状態で推移していくとみられるが、雇用の過剰感が残ることなどから、当面、はっきりした増加には至らない可能性が高い。

2. 物価

輸入物価（円ベース）を3か月前比でみると（図表 26）、国際商品市況の動向を受けて、上昇している。国際商品市況について、最近の動きをやや詳しくみると、原油価格は、新興国の需要拡大が予想される中、世界的に緩和的な金融環境や中東・北アフリカ情勢の不透明感もあって、上昇している。非鉄金属は、新興国におけるインフラ需要などを背景に、銅などを中心に上昇している。また、穀物も新興国の食料・飼料需要の高まりや天候不順を背景に、上昇を続けている。

国内企業物価（夏季電力料金調整後、以下同じ）を3か月前比でみると（図表 27）⁶、国際商品市況高の影響などから、上昇している。内訳をみると、国際商品市況の上昇を背景に、「為替・海外市況連動型」が高い伸びを続けている

⁶ 「夏季電力料金調整後」とは、国内企業物価の基調的な動きをみるために、7～9月期における電力料金の季節的上昇を取り除いた系列である。電力使用量が膨らむ7～9月期については、産業用・業務用の電力料金が通常の時期に比べ高めに設定されている。

ほか、「鉄鋼・建材関連」、「素材（その他）」のプラス幅が拡大している。

企業向けサービス価格（除く国際運輸、以下同じ）の前年比は、企業の経費節減の動きなどを受けて下落が続いている（図表 28）。1月の動きについて内訳をみると、販売管理費関連については、広告で新聞、テレビとも需要回復の動きがみられ、前年比マイナス幅が縮小した。設備投資関連では、土木建築サービスで、需要の低迷からやや大きめの下落が続いている。また、不動産関連では、このところ、前年比下落幅が横ばいとなってきた。

消費者物価（除く生鮮食品、以下同じ）の前年比は、マクロ的な需給バランスが緩和状態にあるもとで、下落幅は縮小を続けている（図表 29、30）。1月の消費者物価の前年比は、下落幅が前月から 0.2%ポイント縮小し、-0.2%となった（高校授業料も除くと+0.3%）^{7,8}。除く食料・エネルギーの前年比は、下落幅が前月から 0.1%ポイント縮小し-0.6%となった（高校授業料も除くと+0.2%）。また、基調的な変動を捉えるひとつの方法として、品目別価格変動分布の両端の一定割合を機械的に控除した、刈込平均値（いわば大きな相対価格変動を除去した値）をみると、前年比下落幅は緩やかな縮小傾向にある。

最近の動きについて、高校授業料、たばこ、傷害保険料以外の内訳をみると、財については、石油製品（ガソリン等）の上昇幅が拡大しているほか、被服が上昇に転じた。また、食料工業製品、耐久消費財などの下落幅は縮小傾向にある。一般サービスについては、家賃の下落幅がやや拡大したものの、他のサー

⁷ ただし、10月以降、全国の消費者物価（除く生鮮食品）の前年比は、たばこ税増税の影響により+0.3%ポイント程度、傷害保険料の引き上げの影響により+0.1%ポイント程度、それぞれ押し上げられている。

⁸ 高校授業料においては、公立高校生のいる世帯に対して授業料（年額約12万円）を不徴収としているほか、私立高校生のいる世帯に対して就学支援金として公立高校の授業料相当額を支給している。

ビスは、外国パック旅行の上昇を主因に、下落幅が縮小傾向にある。公共料金については、航空運賃は上昇を続けているが、電気代では既往の原油価格下落の影響がタイムラグをもって現れてきているため、全体では、下落幅がやや拡大した。

物価の先行きについてみると、国内企業物価は、国際商品市況の動きを反映して、当面、上昇を続けるとみられる。消費者物価の前年比は、当面、小幅のプラスに転じていくとみられる⁹。

3. 金融

(1) 金融市況

わが国の短期金融市場をみると、日本銀行による潤沢な資金供給のもとで、総じて落ち着いた展開となっている。無担保コールレート（オーバーナイト物）は、概ね 0.1% を幾分下回る水準で推移している。ターム物金利の動向をみると、3 か月物国庫短期証券利回りは、0.1% を小幅に上回る水準で推移している。3 か月物ユーロ円金利は、政策金利見通し（O I S レート）に対してやや高め的水準で、横ばい圏内で推移している。なお、引き続き取引の低調な市場もみられている。ユーロ円金利先物レートをみると、期先物を中心に、低下している（図表 31）。米ドルの調達環境に関して、L I B O R－O I S スプレッドをみると、低い水準で推移している（図表 32）。

長期国債の流通利回り（10 年新発債）は、株価が弱含んで推移するなか、低下し、足もとでは 1.2% 台で推移している（図表 33）。

⁹ 消費者物価指数については、本年 8 月に 2010 年基準の指数に切り替わり、前年比計数が 2011 年 1 月分に遡って改定される予定である。その際には、前年比変化率が下方改定される可能性が高い。

社債と国債との流通利回りスプレッドは、引き続き投資家の底堅い需要がみられるほか、日本銀行による社債買入れの効果もあって、縮小した水準で推移している（図表 34）。

株価（日経平均株価）は、米国株価がやや弱含んで推移しているほか、為替が幾分円高方向の推移となったことから、弱含んで推移した。ごく足もとでは、下げ幅を拡大しており、9 千円台半ばで推移している（図表 35）。

為替相場をみると、円の対米ドル相場は、北アフリカ、中東の政情不安などを背景に、リスク回避的な動きがみられたほか、米国金利が低下したこともあって、やや円高方向の動きとなった。足もとでは、82 円台で推移している（図表 36）。

（２）企業金融と量的金融指標

資金調達コストは、コールレートがきわめて低い水準で推移する中、低下傾向が続いている。この間、ＣＰ発行金利、社債発行金利とも、低水準で推移している。また、新規貸出約定平均金利は、振れを伴いつつも低下傾向にある（図表 38）。

資金供給面では、企業からみた金融機関の貸出態度は、改善が続いている（図表 37）。ＣＰ・社債市場では、社債の発行体の裾野が広がるなど、発行環境は一段と良好になっている。こうしたもとで、民間部門の資金調達は、企業の運転資金需要や設備資金需要の後退などから、前年比でみると減少している。民間銀行貸出は減少している（図表 39）。一方、社債発行残高は、前年水準を上回って推移しているほか、ＣＰ発行残高は、減少幅が縮小傾向にある（図表 40）。

こうした中、自社の資金繰りについては、総じてみれば、改善している（図

表 37)。企業倒産件数は、引き続き減少している(1月-2.1%→2月-9.4%、
図表 42)。

この間、マネーストック(M2)は、前年比でみると、足許では、2%台半
ばの伸びとなっている(1月+2.3%→2月+2.4%、図表 41)¹⁰。

以 上

¹⁰ 因みに、ゆうちょ銀行等を含んだM3のベースは、足許では、前年比1%台後半の伸び
となっている(1月+1.8%→2月+1.8%)。また、広義流動性は、足許では、前年比ゼ
ロ%前後の伸びとなっている(1月-0.1%→2月-0.0%)。

金融経済月報（2011 年 3 月） 参考計表

(図表 1) 国内主要経済指標 (1)	(図表 25) 物価
(図表 2) 国内主要経済指標 (2)	(図表 26) 輸入物価と国際商品市況
(図表 3) 実質 GDP と景気動向指数	(図表 27) 国内企業物価
(図表 4) GDP デフレーターと所得形成	(図表 28) 企業向けサービス価格
(図表 5) 公共投資	(図表 29) 消費者物価
(図表 6) 輸出入	(図表 30) 消費者物価の基調的な変動
(図表 7) 実質輸出の内訳	(図表 31) 短期金利
(図表 8) 実質実効為替レート・海外経済	(図表 32) 主要通貨の短期金融市場
(図表 9) 実質輸入の内訳	(図表 33) 長期金利
(図表 10) 設備投資と収益 (法人季報)	(図表 34) 社債流通利回り
(図表 11) 業種別・規模別の設備投資	(図表 35) 株価
(図表 12) 設備投資一致指標	(図表 36) 為替レート
(図表 13) 設備投資先行指標	(図表 37) 企業金融
(図表 14) 個人消費 (1)	(図表 38) 貸出金利
(図表 15) 個人消費 (2)	(図表 39) 金融機関貸出
(図表 16) 個人消費 (3)	(図表 40) 資本市場調達
(図表 17) 消費者コンフィデンス	(図表 41) マネーストック
(図表 18) 住宅投資関連指標	(図表 42) 企業倒産
(図表 19) 鉱工業生産・出荷・在庫	
(図表 20) 財別出荷	
(図表 21) 在庫循環	
(図表 22) 労働需給 (1)	
(図表 23) 労働需給 (2)	
(図表 24) 雇用者所得	

国内主要経済指標 (1)

(指標名欄の〈 〉内に指示されている場合を除き、季調済前期 (月) 比、%)

	2010/4-6月	7-9月	10-12月	2010/11月	12月	2011/1月	2月
消費水準指数(二人以上の世帯)	-1.7	1.6	-1.4	0.5	-2.8	2.1	n. a.
全国百貨店売上高	-1.5	-0.7	0.4	0.1	-1.1	p 1.2	n. a.
全国スーパー売上高	0.1	1.2	-1.4	1.6	-3.2	p 0.8	n. a.
乗用車新車登録台数(除軽) 〈季調済年率換算、万台〉	〈 311〉	〈 337〉	〈 217〉	〈 213〉	〈 217〉	〈 246〉	〈 266〉
家電販売額 (実質、商業販売統計)	1.7	8.5	14.5	25.0	-39.5	p 9.2	n. a.
旅行取扱額	3.1	-1.0	0.4	-0.0	-3.1	n. a.	n. a.
新設住宅着工戸数 〈季調済年率換算、万戸〉	〈 77〉	〈 82〉	〈 84〉	〈 85〉	〈 86〉	〈 85〉	〈n. a.〉
機械受注 民需(除く船舶・電力)	0.3	9.6	-6.9	-3.0	1.7	4.2	n. a.
(除く船舶・電力・携帯電話)	-0.1	7.7	-5.8	0.8	-0.9	6.6	n. a.
建築着工床面積 (民間、非居住用)	-19.4	17.6	-9.7	-5.5	-9.3	31.1	n. a.
鉱工業	-11.2	7.7	9.0	-8.0	-14.1	3.8	n. a.
非製造業	-20.1	21.1	-12.1	-6.8	-3.2	30.2	n. a.
公共工事請負金額	5.2	-7.9	-5.5	0.4	-5.2	7.5	n. a.
実質輸出	9.6	-0.4	-1.6	-1.8	7.0	-5.8	n. a.
実質輸入	6.2	1.1	-1.0	1.1	-2.1	3.5	n. a.
生産	1.5	-1.8	-1.6	1.0	3.3	p 2.4	n. a.
出荷	1.6	-1.2	-1.6	2.6	1.2	p 1.1	n. a.
在庫	3.4	0.4	-1.2	-1.8	1.6	p 4.7	n. a.
在庫率 〈季調済、2005年=100〉	〈 106.7〉	〈 108.8〉	〈 108.5〉	〈 108.1〉	〈 108.5〉	〈p 109.3〉	〈n. a.〉
実質GDP	0.5	0.8	-0.3	n. a.	n. a.	n. a.	n. a.
全産業活動指数	0.8	0.7	-1.1	-0.2	-0.2	n. a.	n. a.

国内主要経済指標 (2)

(指標名欄の〈 〉内に指示されている場合を除き、前年比、%)

	2010/4-6月	7-9月	10-12月	2010/11月	12月	2011/1月	2月
有効求人倍率 〈季調済、倍〉	〈 0.50〉	〈 0.54〉	〈 0.57〉	〈 0.57〉	〈 0.58〉	〈 0.61〉	〈n. a.〉
完全失業率 〈季調済、%〉	〈 5.1〉	〈 5.0〉	〈 5.0〉	〈 5.1〉	〈 4.9〉	〈 4.9〉	〈n. a.〉
所定外労働時間 (事業所規模5人以上)	10.8	9.6	5.7	6.1	5.1	p 2.1	n. a.
雇用者数 (労働力調査)	-0.3	0.3	0.4	0.3	0.2	0.3	n. a.
常用労働者数 (毎勤統計) (事業所規模5人以上)	0.2	0.5	0.7	0.7	0.6	p 0.8	n. a.
一人当たり名目賃金 (事業所規模5人以上)	1.3	0.9	0.2	0.2	0.1	p 0.2	n. a.
国内企業物価 〈夏季電力料金調整後、 前期(3か月前)比、%〉	0.2 〈 0.6〉	-0.1 〈-0.4〉	1.0 〈 0.5〉	0.9 〈 0.4〉	1.2 〈 0.8〉	1.6 〈 1.0〉	p 1.7 〈p 1.1〉
全国消費者物価 (除く生鮮食品)	-1.2	-1.0	-0.5	-0.5	-0.4	-0.2	n. a.
企業向けサービス価格 (除く国際運輸)	-1.2	-1.1	-1.3	-1.2	-1.3	p -1.0	n. a.
マネースtock (M2) (平 残)	3.0	2.8	2.6	2.6	2.3	2.3	p 2.4
企業倒産件数 〈件/月〉	〈1,108〉	〈1,077〉	〈1,100〉	〈1,061〉	〈1,102〉	〈1,041〉	〈 987〉

(注) 1. p は速報値。

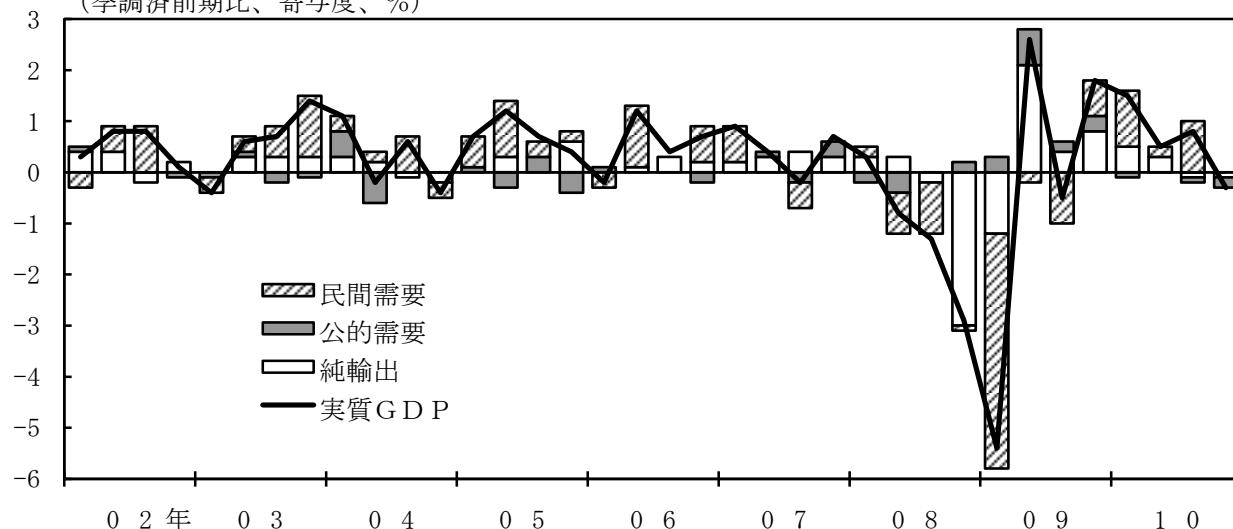
2. 日本銀行が季節調整を施している指標の季節調整方法及び、日本銀行が作成・加工している指標の算出方法については、該当図表の脚注を参照。

(資料) 総務省「家計調査報告」「労働力調査」「消費者物価指数」、
 経済産業省「商業販売統計」「鉱工業指数統計」「全産業活動指数」、
 日本自動車販売協会連合会「自動車国内販売」、観光庁「旅行業者取扱額」、
 国土交通省「建築着工統計」、内閣府「機械受注統計」「国民経済計算」、
 東日本建設業保証株式会社他「公共工事前払金保証統計」、財務省「貿易統計」、
 厚生労働省「職業安定業務統計」「毎月勤労統計」、
 日本銀行「企業物価指数」「企業向けサービス価格指数」「マネースtock」、
 東京商工リサーチ「倒産月報」

実質GDPと景気動向指数

(1) 実質GDP

(季調済前期比、寄与度、%)



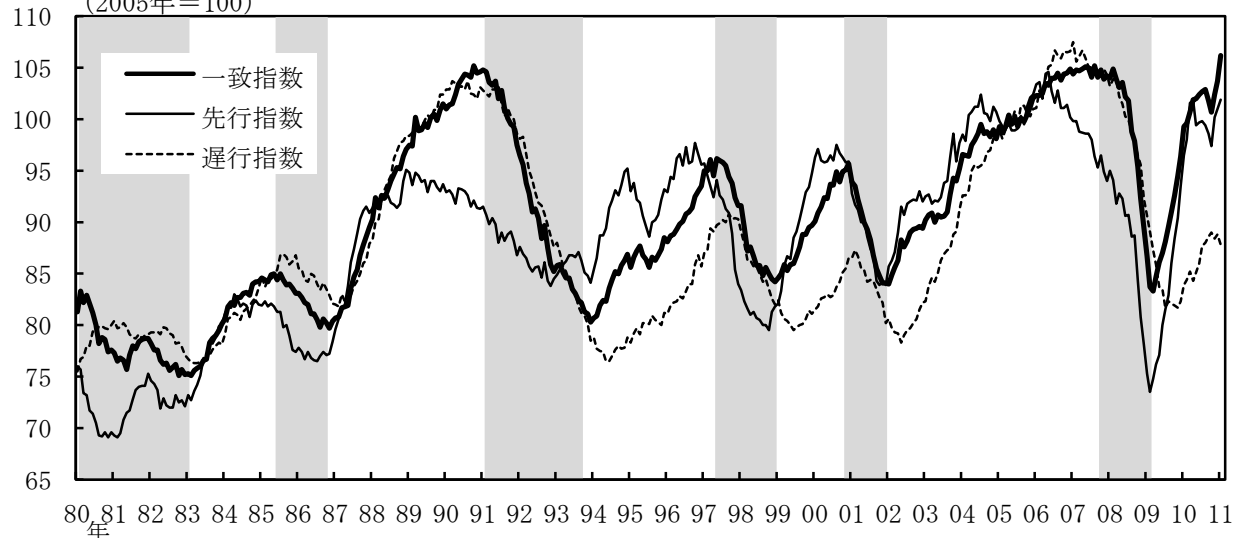
(2) 需要項目別の動向

(季調済前期比、内訳は寄与度、%)

	2009年	2010年				
	10～12月	1～3	4～6	7～9	10～12	
実 質 G D P	1.8	1.5	0.5	0.8	-0.3	
国 内 需 要	1.0	1.0	0.3	1.0	-0.2	
民間需要	0.7	1.1	0.2	1.0	-0.0	
民間最終消費支出	0.6	0.3	-0.0	0.5	-0.5	
民間企業設備	0.2	0.1	0.4	0.2	0.1	
民間住宅	-0.1	0.0	-0.0	0.0	0.1	
民間在庫品増加	0.0	0.7	-0.1	0.3	0.3	
公的需要	0.3	-0.1	0.0	-0.1	-0.2	
公的固定資本形成	0.1	-0.1	-0.2	-0.1	-0.2	
純 輸 出	0.8	0.5	0.3	-0.1	-0.1	
輸 出	0.9	0.9	0.8	0.2	-0.1	
輸 入	-0.2	-0.4	-0.5	-0.4	0.0	
名 目 G D P	0.9	1.7	-0.6	0.6	-0.7	

(3) 景気動向指数 (C I)

(2005年=100)



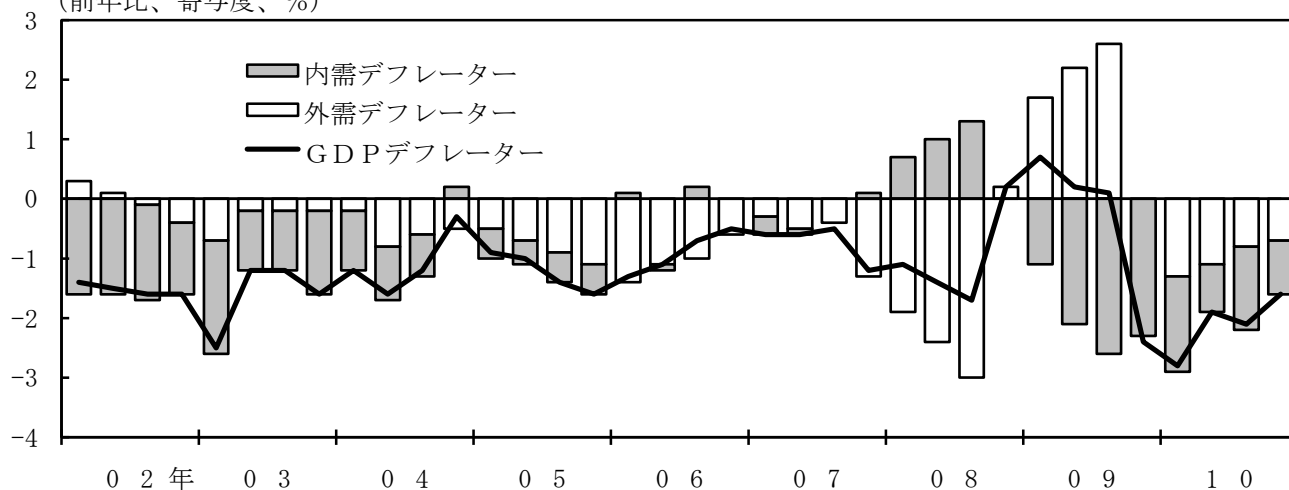
(注) シャドー部分は景気後退局面。

(資料) 内閣府「国民経済計算」「景気動向指数」

GDPデフレーターと所得形成

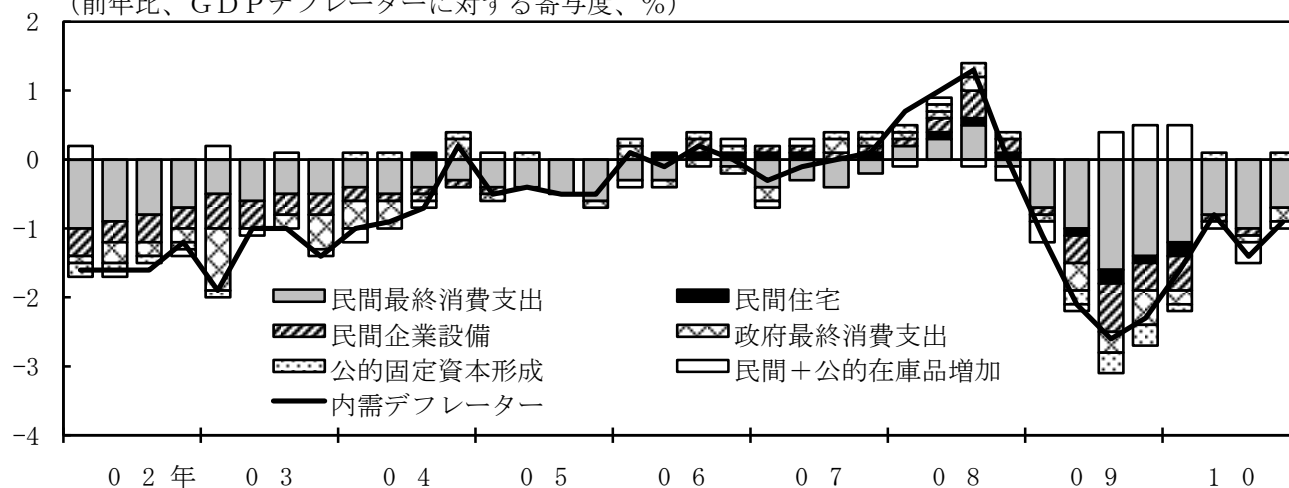
(1) GDPデフレーター

(前年比、寄与度、%)



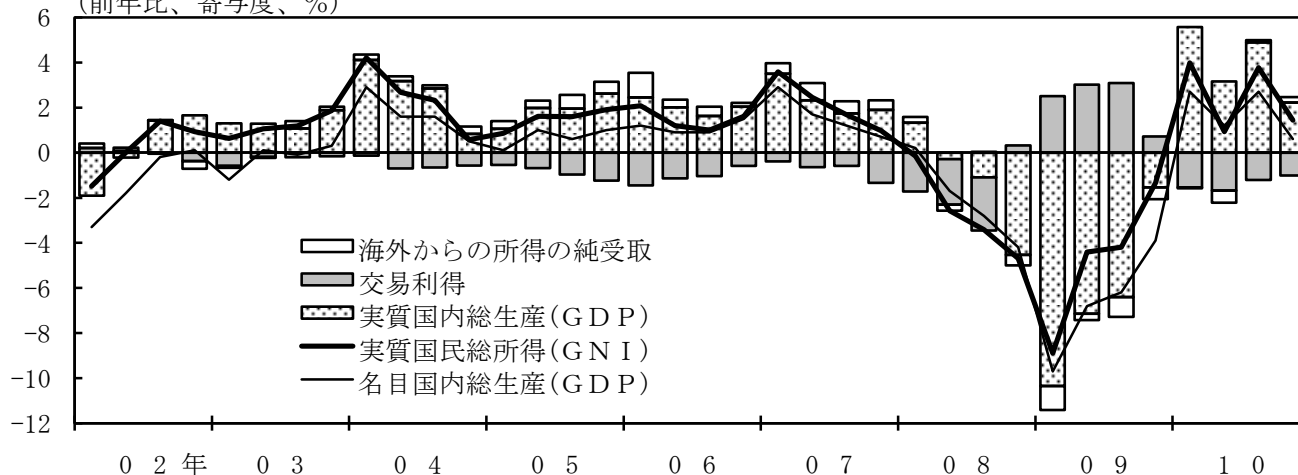
(2) 内需デフレーター

(前年比、GDPデフレーターに対する寄与度、%)



(3) マクロの所得形成

(前年比、寄与度、%)



(注) 1. 内訳は実質国民総所得(GNI)に対する寄与度。

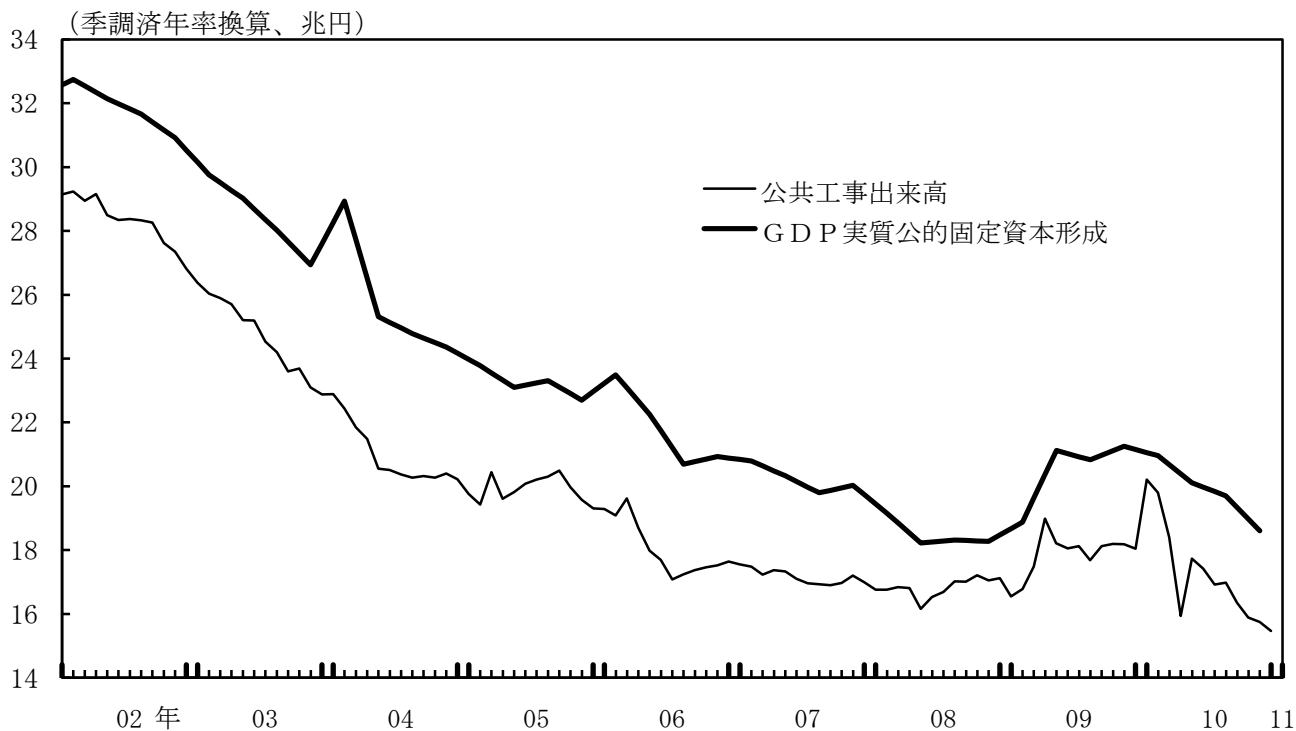
2. 実質GNI = 実質GDP + 交易利得 + 海外からの所得の純受取

交易利得 = 名目純輸出 / 輸出・輸入デフレーターの加重平均 - 実質純輸出

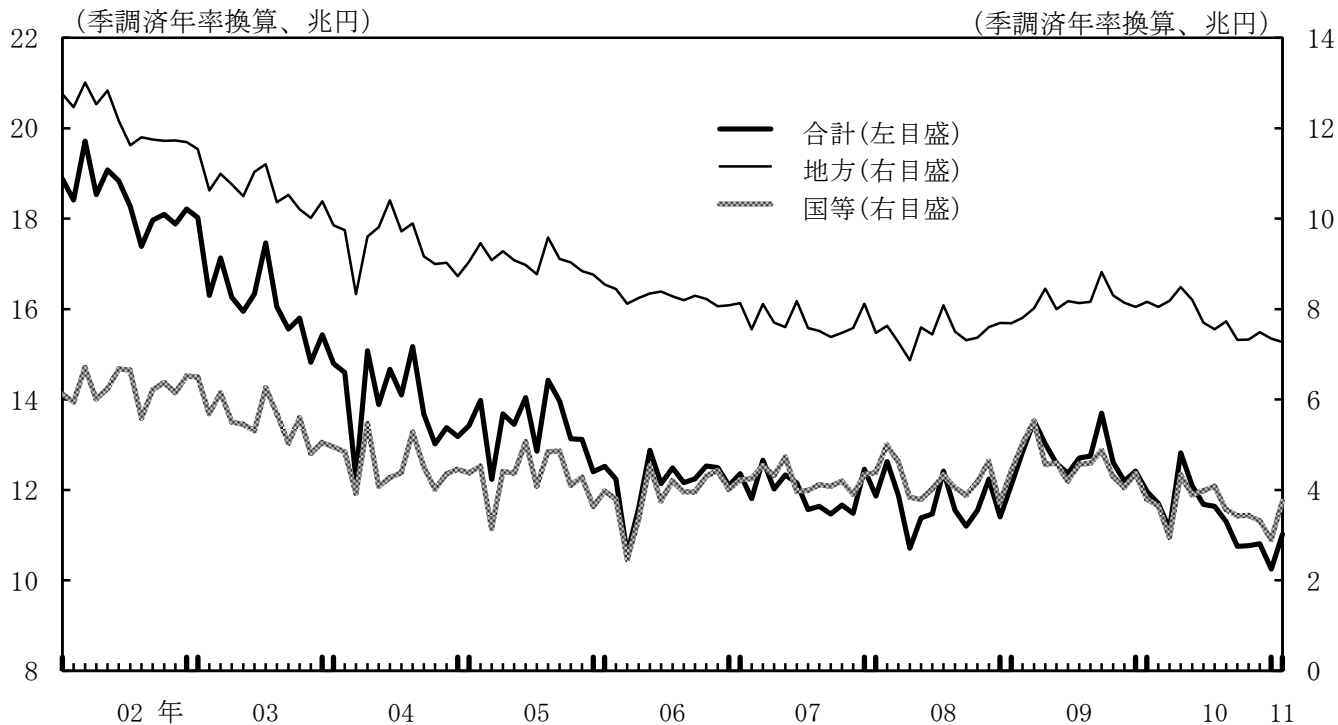
(資料) 内閣府「国民経済計算」

公 共 投 資

(1) 公共工事出来高とGDP実質公的固定資本形成



(2) 公共工事請負金額

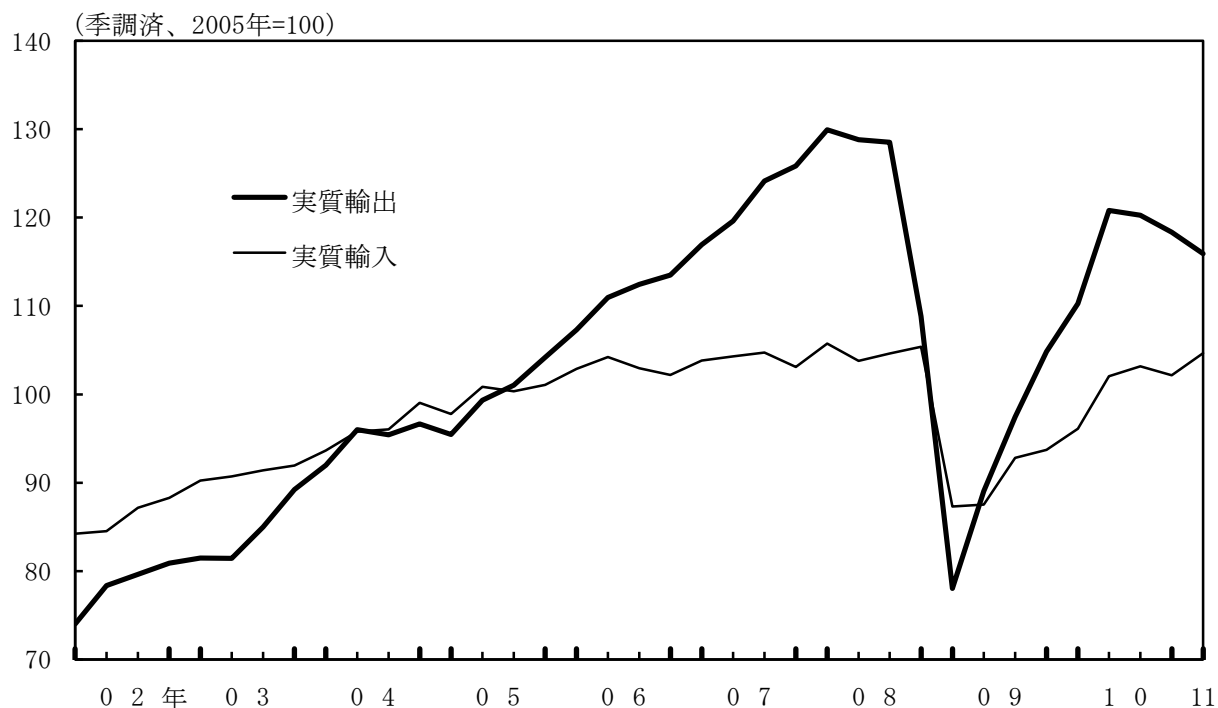


- (注) 1. GDP実質公的固定資本形成は、四半期の値を中心月にプロット。
 2. 公共工事出来高は、国土交通省「建設総合統計」の総合表ベース。
 3. 公共工事請負金額の「地方」は、「都道府県」・「市区町村」・「地方公社」の合計。
 「国等」は「国」・「独立行政法人等」・「その他」の合計。
 4. 公共工事請負金額および公共工事出来高は、X-12-ARIMAによる季節調整値。
 公共工事出来高は、毎月季節調整替えを行うため、過去に遡って改訂される。

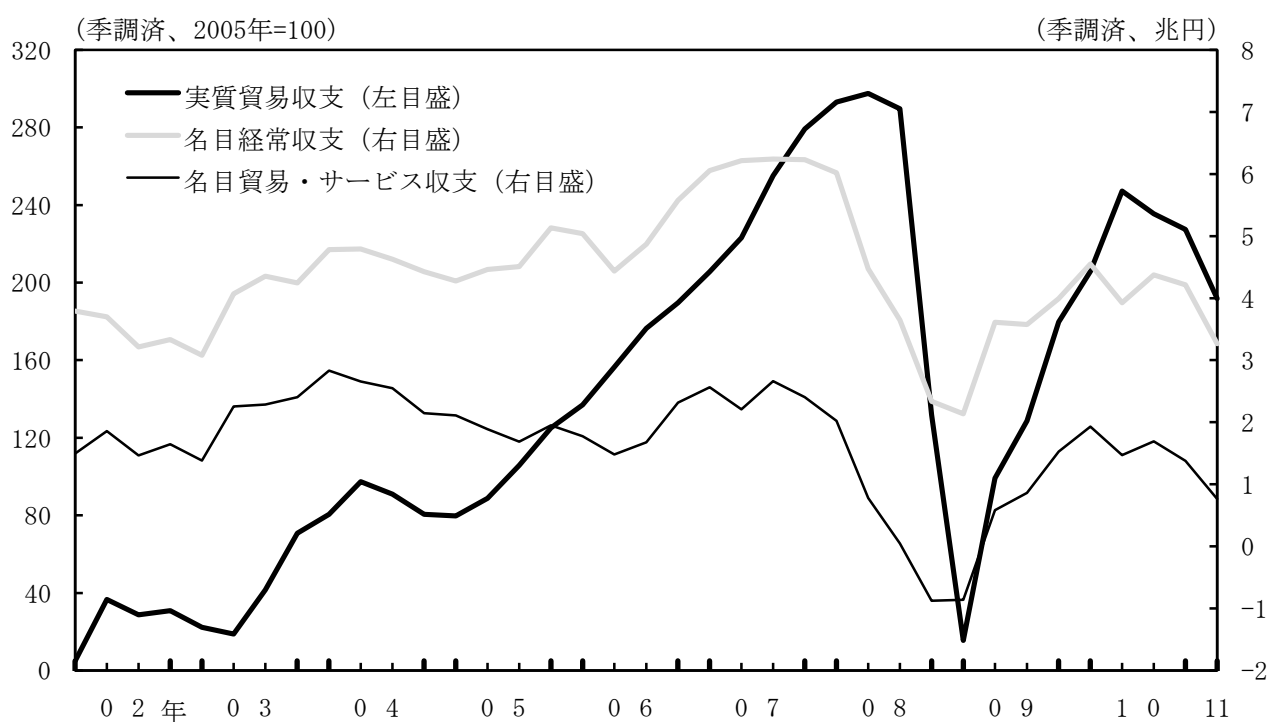
(資料) 内閣府「国民経済計算」、東日本建設業保証株式会社他「公共工事前払金保証統計」、国土交通省「建設総合統計」

輸 出 入

(1) 実質輸出入



(2) 対外収支



- (注) 1. 実質輸出(入)は、通関輸出(入)金額を輸出(入)物価指数で各々デフレートし、指数化したもの。
 実質貿易収支は、実質輸出入の差を指数化したもの。
 2. 各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。
 3. 2011/1Qの実質輸出入、実質貿易収支は1月の値。
 4. 2011/1Qの名目経常収支、名目貿易・サービス収支は1月の四半期換算値。

(資料) 財務省「貿易統計」、財務省・日本銀行「国際収支状況」、日本銀行「企業物価指数」

実質輸出の内訳

(1) 地域別

		(前年比、%)		(季調済前期比、%)					(季調済前月比、%)		
		暦年 2009年	2010	2010年 1Q	2Q	3Q	4Q	2011 1Q	2010年 11月	12	2011 1
米国	<15.4>	-32.6	24.3	-1.2	11.3	3.4	-1.9	-2.5	-2.5	7.0	-6.0
EU	<11.3>	-34.6	16.7	-4.0	8.5	4.2	0.9	-4.4	8.5	-4.7	-3.8
東アジア	<53.4>	-15.8	31.6	7.9	5.0	0.8	1.4	0.7	-2.3	5.7	-2.2
中国	<19.4>	-10.2	31.0	9.1	2.5	2.7	6.8	0.1	-3.4	8.5	-4.1
N I E s	<23.7>	-18.0	27.9	6.9	5.3	-0.6	-1.8	0.0	-0.5	3.0	-1.8
韓国	<8.1>	-16.0	23.7	5.9	5.8	1.6	-7.4	9.2	2.8	3.9	5.5
台湾	<6.8>	-17.7	37.1	9.7	6.8	-0.8	-4.0	2.7	-2.0	0.6	3.0
香港	<5.5>	-18.8	28.7	4.9	10.0	-3.9	1.4	-7.5	-9.5	19.1	-14.7
シンガポール	<3.3>	-21.6	19.8	13.3	-11.0	6.0	5.8	-1.0	17.4	-16.5	6.2
ASEAN 4	<10.2>	-20.5	42.7	8.1	9.0	0.6	-1.0	3.5	-4.2	6.2	0.9
タイ	<4.4>	-20.9	46.0	4.9	11.1	1.2	-0.9	4.0	-1.3	2.1	3.0
その他	<19.9>	-32.1	28.9	11.1	9.1	-4.0	-4.3	6.1	-3.9	7.1	2.7
実質輸出計		-25.6	27.5	5.2	9.6	-0.4	-1.6	-2.1	-1.8	7.0	-5.8

- (注) 1. < >内は、2010年通関輸出額に占める各地域・国のウェイト。
 2. ASEAN 4はタイ、マレーシア、フィリピン、インドネシア。
 3. 各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。なお、2011/1Qは1月の2010/10～12月対比。

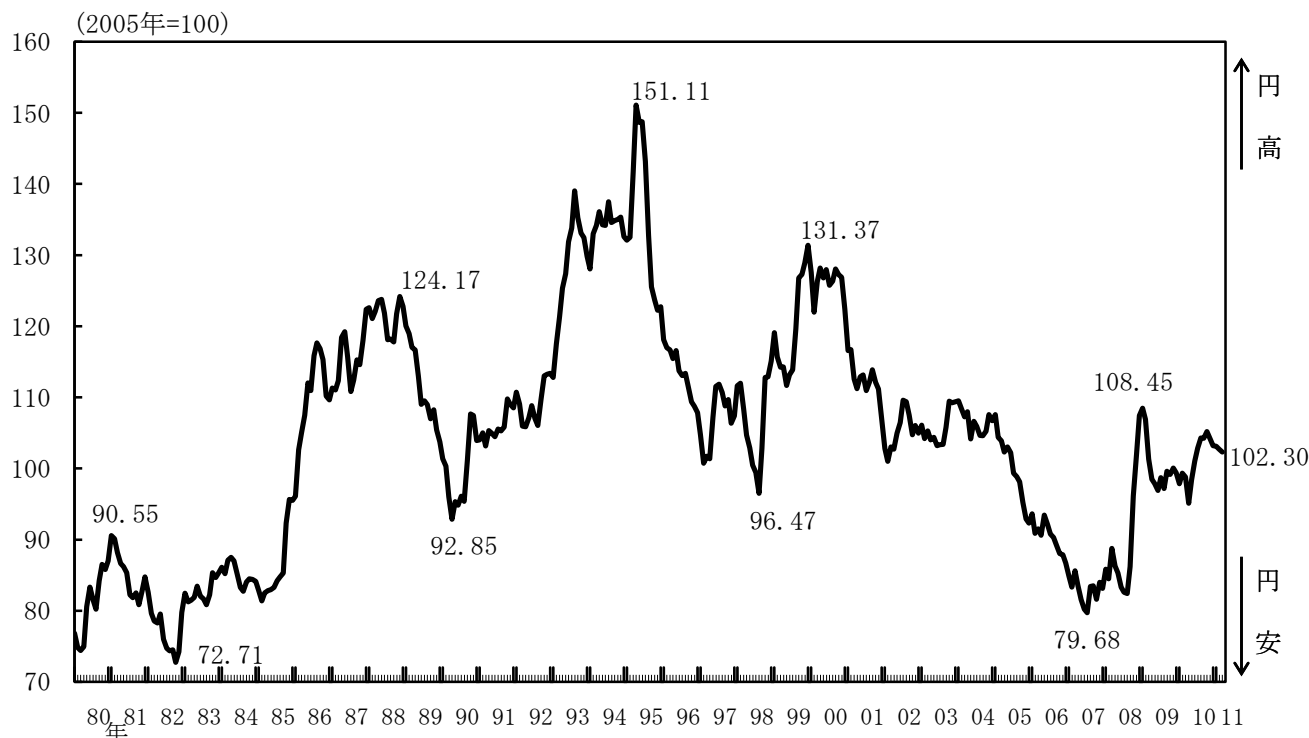
(2) 財別

		(前年比、%)		(季調済前期比、%)					(季調済前月比、%)		
		暦年 2009年	2010	2010年 1Q	2Q	3Q	4Q	2011 1Q	2010年 11月	12	2011 1
中間財	<20.6>	-5.6	18.6	0.9	5.4	1.3	-1.9	-0.0	0.4	-0.2	-0.0
自動車関連	<21.6>	-41.4	42.1	4.9	10.7	0.5	-0.2	-4.6	-4.4	9.7	-8.9
消費財	<3.4>	-28.8	9.9	-0.5	9.2	1.0	-7.1	-6.8	-4.3	7.1	-9.6
情報関連	<10.7>	-17.0	27.2	5.9	7.2	-1.5	-1.9	-2.1	-3.7	4.0	-3.4
資本財・部品	<29.2>	-28.1	35.7	8.7	14.7	1.2	-2.8	-0.0	-1.5	7.2	-4.1
実質輸出計		-25.6	27.5	5.2	9.6	-0.4	-1.6	-2.1	-1.8	7.0	-5.8

- (注) 1. < >内は、2010年通関輸出額に占める各財のウェイト。
 2. 「消費財」は、自動車を除く。
 3. 「情報関連」は、電算機類、通信機、IC等電子部品、科学光学機器。
 4. 「資本財・部品」は、情報関連、原動機、自動車部品を除く。
 5. 各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。なお、2011/1Qは1月の2010/10～12月対比。

実質実効為替レート・海外経済

(1) 実質実効為替レート (月中平均)



- (注) 1. BISのブロードベースを使用して算出。1993年以前はナローベースを使用して接続。
 2. 2011年2～3月分は、日本銀行の名目実効為替レート (円インデックス) を用いて算出。
 なお、2011/3月は10日までの平均値。

(2) 海外経済 —— 実質GDP

(欧米は前期比年率、東アジアは前年比、%)

			2008年	2009年	2010年	2010年 1Q	2Q	3Q	4Q
米 国			0.0	-2.6	2.8	3.7	1.7	2.6	2.8
欧 州	E U		0.5	-4.2	1.8	1.7	4.2	1.9	0.7
		ド イ ツ	1.0	-4.7	3.6	2.6	9.2	2.8	1.5
		フ ラ ン ス	0.1	-2.5	1.5	1.1	2.4	1.0	1.4
		英 国	-0.1	-4.9	1.3	1.3	4.2	2.8	-2.3
東 ア ジ ア	中 国		9.6	9.2	10.3	11.9	10.3	9.6	9.8
	N I E s	韓 国	2.3	0.2	6.1	8.1	7.2	4.4	4.8
		台 湾	0.7	-1.9	10.8	13.6	12.9	10.7	6.9
		香 港	2.3	-2.7	6.8	8.1	6.4	6.7	6.2
		シンガポール	1.5	-0.8	14.5	16.4	19.4	10.5	12.0
	A S E A N 4	タ イ	2.5	-2.3	7.8	12.0	9.2	6.6	3.8
		インドネシア	6.0	4.6	6.1	5.6	6.1	5.8	6.9
		マレーシア	4.7	-1.7	7.2	10.1	8.9	5.3	4.8
		フィリピン	3.7	1.1	7.3	7.8	8.2	6.3	7.1

(注) 計数は、各国政府または中央銀行、欧州委員会による。

実質輸入の内訳

(1) 地域別

(1) 地域別

		(前年比、%)		(季調済前期比、%)					(季調済前月比、%)		
		暦年 2009年	2010	2010年 1Q	2Q	3Q	4Q	2011 1Q	2010年 11月	2011 12	2011 1
米国	<9.7>	-18.7	8.3	-0.4	4.5	0.7	-1.3	-1.8	12.5	-7.9	-0.2
E U	<9.6>	-13.2	6.6	-0.8	4.1	4.6	-5.0	5.8	-7.6	3.4	6.3
東アジア	<42.5>	-13.1	22.0	4.2	11.2	1.2	1.9	4.5	2.4	-0.7	4.2
中国	<22.1>	-11.1	24.0	3.0	13.8	0.9	4.0	3.8	3.8	-2.9	4.6
N I E s	<8.9>	-15.9	21.7	7.0	6.9	0.7	-1.8	10.2	0.6	1.0	9.2
韓国	<4.1>	-19.0	20.9	4.0	10.7	0.9	6.2	14.8	1.6	1.1	13.3
台湾	<3.3>	-12.4	21.3	6.3	4.6	1.2	-7.4	5.4	-0.9	-1.5	6.8
香港	<0.2>	-29.7	33.0	55.5	-7.4	-5.0	2.3	4.1	29.5	0.6	-4.2
シンガポール	<1.2>	-12.4	23.2	12.6	7.7	-3.8	-7.8	6.7	-2.4	8.6	1.8
A S E A N 4	<11.5>	-14.9	18.1	4.3	9.3	2.6	0.4	1.5	0.5	3.3	-0.9
タイ	<3.0>	-17.5	25.9	3.6	11.0	6.1	-4.7	4.0	6.1	-0.7	2.4
その他	<38.2>	-13.9	6.5	2.6	3.3	0.8	-1.8	3.0	-1.6	-2.7	5.4
実質輸入計		-14.0	11.9	2.5	6.2	1.1	-1.0	2.4	1.1	-2.1	3.5

- (注) 1. < >内は、2010年通関輸入額に占める各地域・国のウェイト。
 2. A S E A N 4はタイ、マレーシア、フィリピン、インドネシア。
 3. 各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。なお、2011/1Qは1月の2010/10～12月対比。

(2) 財別

		(前年比、%)		(季調済前期比、%)					(季調済前月比、%)		
		暦年 2009年	2010	2010年 1Q	2Q	3Q	4Q	2011 1Q	2010年 11月	2011 12	2011 1
素原料	<36.4>	-14.9	5.2	3.2	2.9	1.0	-1.7	1.8	-3.9	-0.6	3.6
中間財	<14.9>	-15.3	18.8	5.8	7.4	1.7	-3.9	4.5	1.6	1.7	2.7
食料品	<8.6>	1.0	2.3	2.2	8.6	3.4	-13.9	6.3	3.4	-0.7	5.6
消費財	<8.5>	-10.3	22.8	1.0	11.3	-1.4	12.2	1.7	5.6	3.6	-2.3
情報関連	<11.2>	-12.4	26.5	6.2	10.0	1.7	3.0	6.9	-1.6	-0.2	7.6
資本財・部品	<11.3>	-23.8	18.9	-0.4	6.8	3.4	2.3	2.3	10.5	-5.5	2.9
うち除く航空機	<10.7>	-24.4	21.7	4.9	6.7	3.3	1.1	5.5	3.0	-0.7	5.0
実質輸入計		-14.0	11.9	2.5	6.2	1.1	-1.0	2.4	1.1	-2.1	3.5

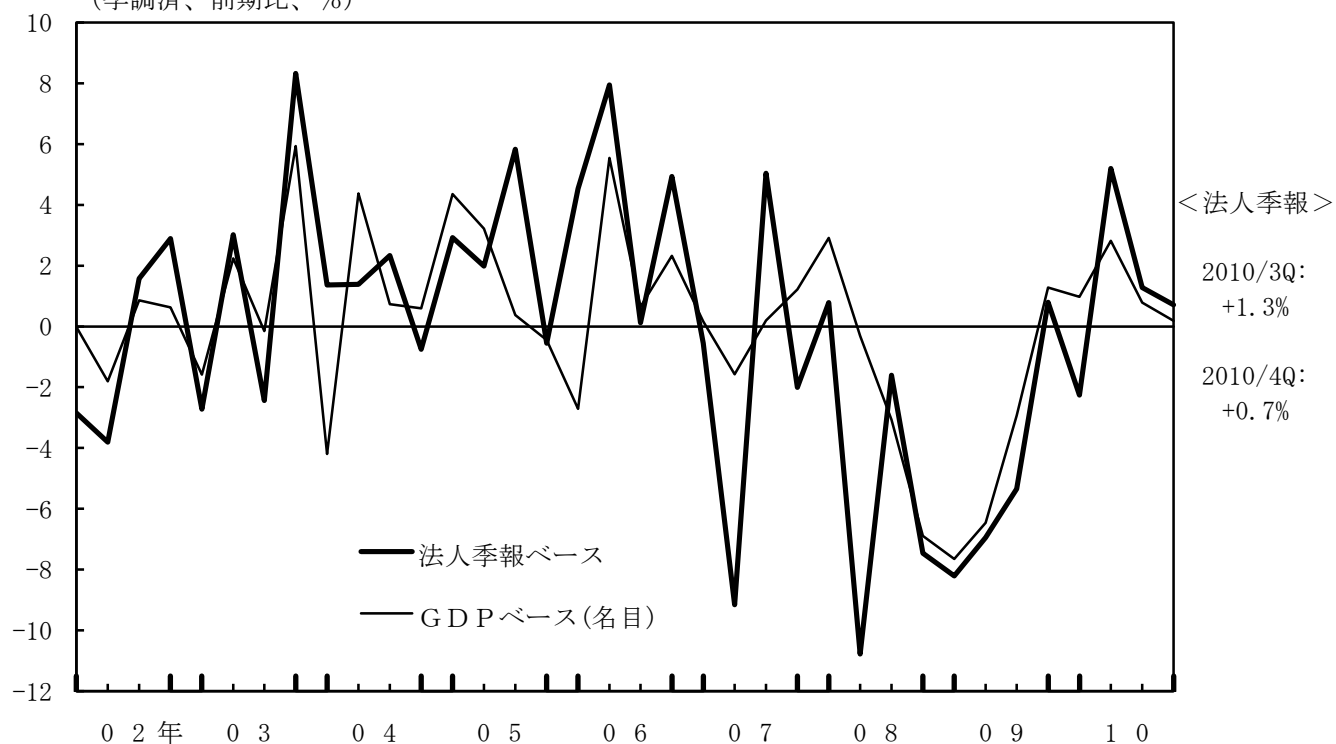
- (注) 1. < >内は、2010年通関輸入額に占める各財のウェイト。
 2. 「素原料」は、原料品、鉱物性燃料。
 3. 「消費財」は、食料品を除く。
 4. 「情報関連」は、電算機類・部分品、通信機、I C等電子部品、科学光学機器。
 5. 「資本財・部品」は、情報関連を除く。
 6. 各計数は、X-12-ARIMAによる季節調整値。なお、2011/1Qは1月の2010/10～12月対比。

(資料) 財務省「貿易統計」、日本銀行「企業物価指数」

設備投資と収益（法人季報）

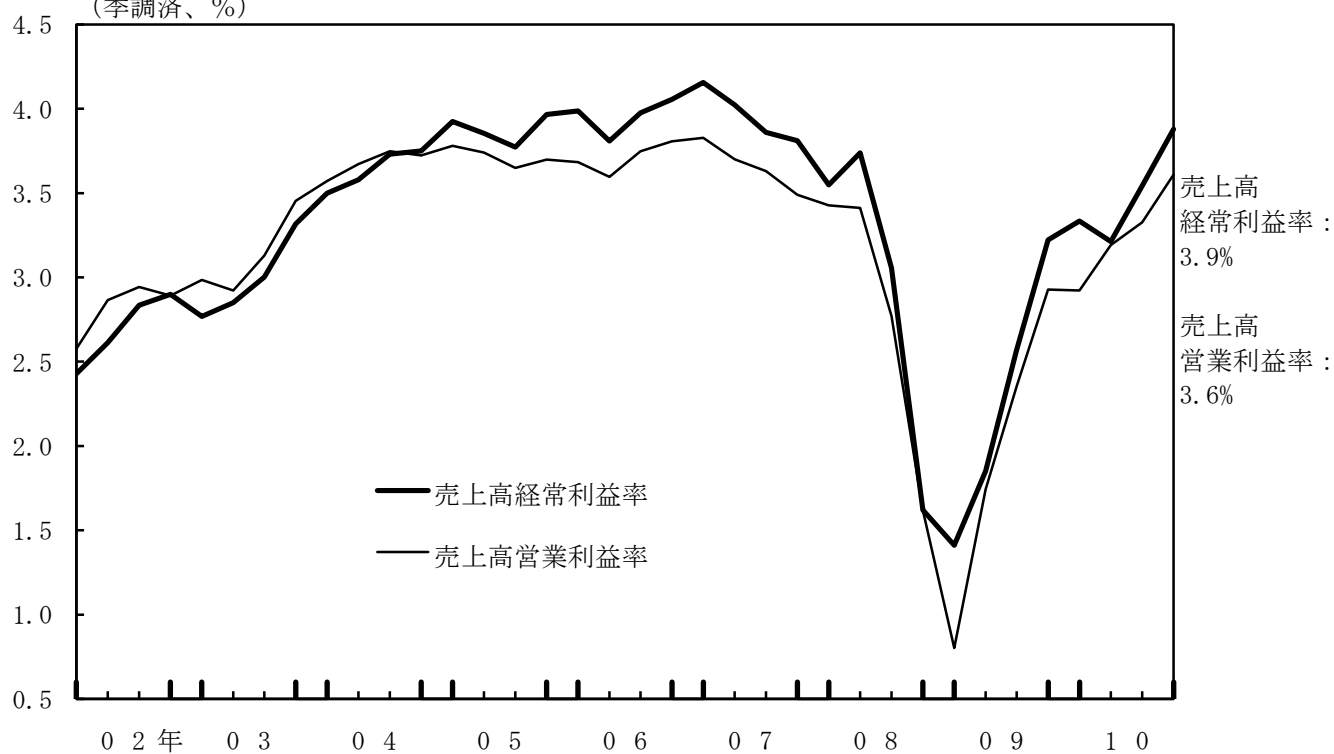
（１）設備投資

（季調済、前期比、％）



（２）収益

（季調済、％）



（注）1. 法人季報の計数は全て全産業全規模ベース。金融業、保険業を除く。

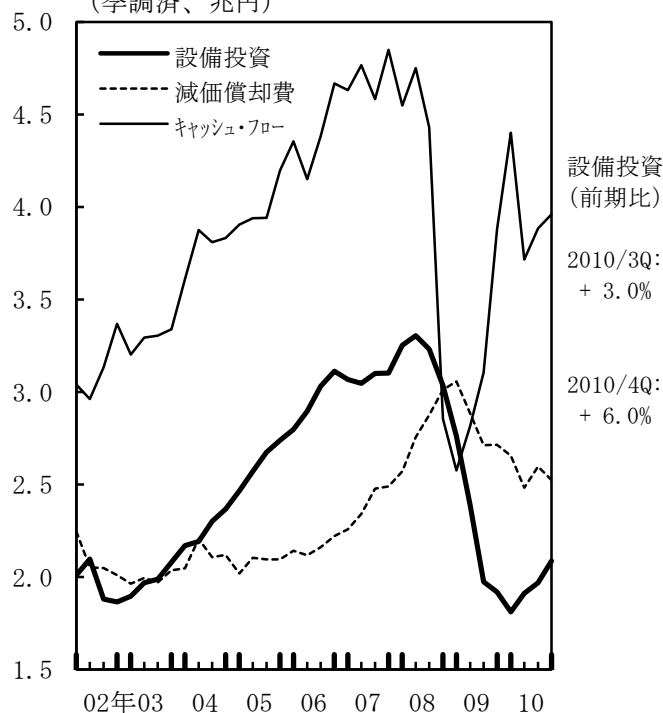
2. （２）の売上高営業利益率は、X-12-ARIMAによる季節調整値。

（資料） 内閣府「国民経済計算」、財務省「法人企業統計季報」

業種別・規模別の設備投資

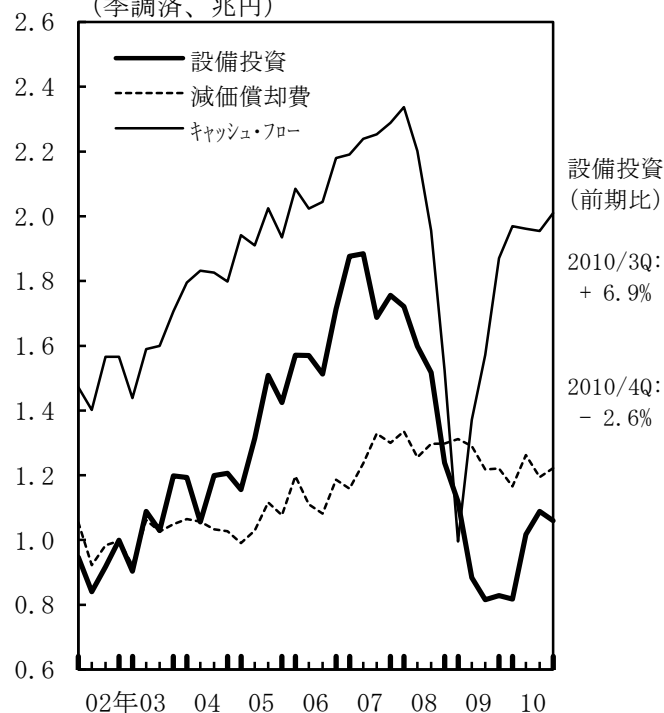
(1) 製造業大企業

(季調済、兆円)



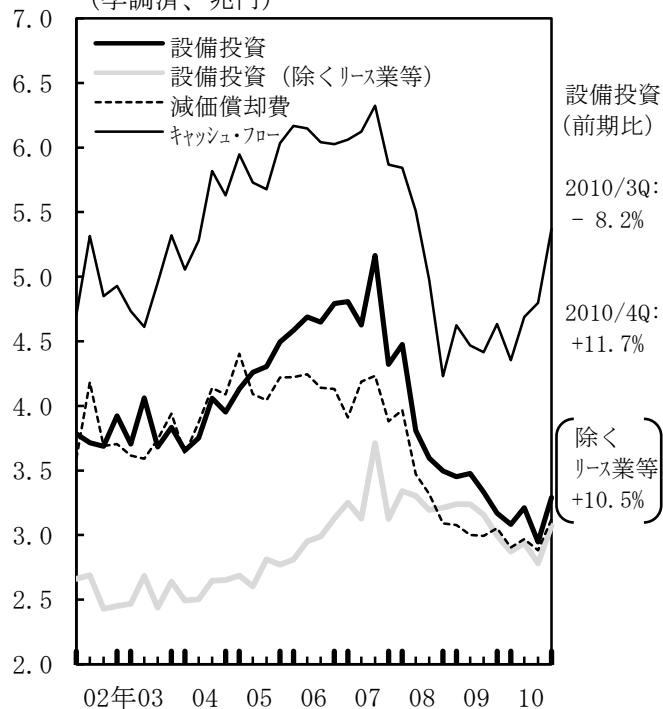
(2) 製造業中堅中小企業

(季調済、兆円)



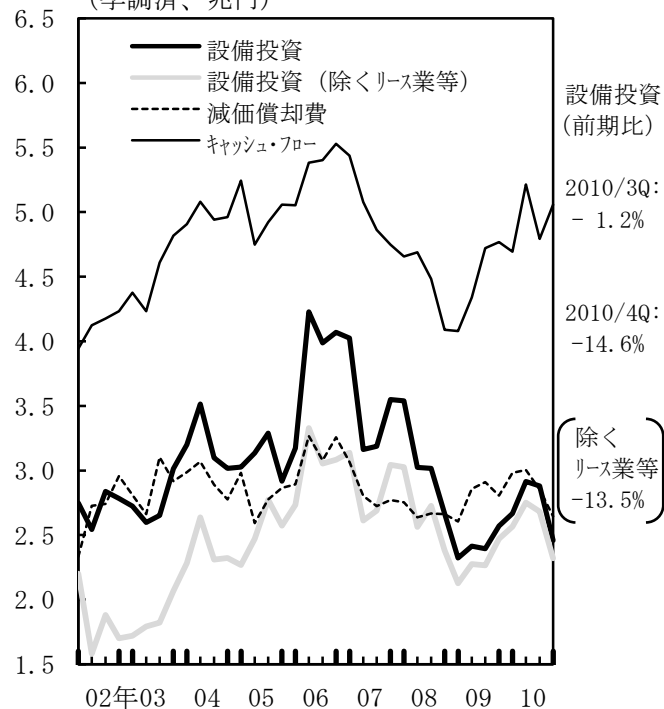
(3) 非製造業大企業

(季調済、兆円)



(4) 非製造業中堅中小企業

(季調済、兆円)



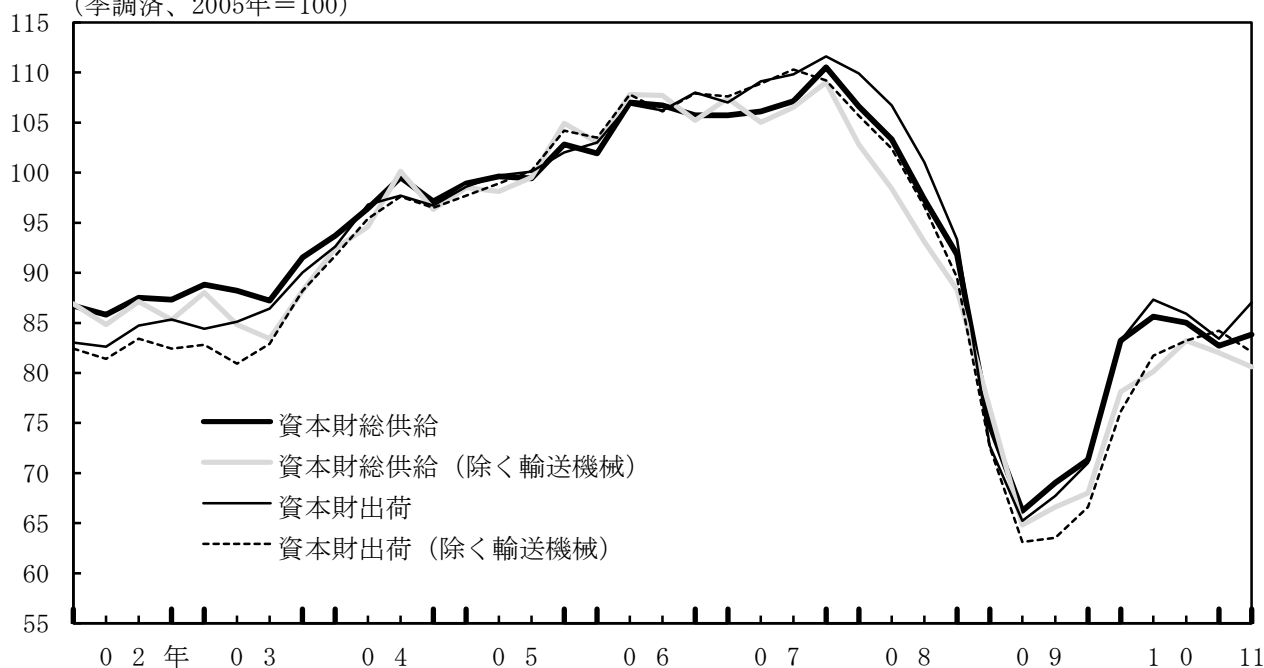
- (注) 1. 大企業は資本金10億円以上、中堅中小企業は資本金1,000万円以上10億円未満。
2. キャッシュ・フローは、(減価償却費+経常利益×1/2)として算出。
3. 計数は、X-11による季節調整値。
4. 計数は全て金融業、保険業を除く。設備投資(除くリース業等)は、2004/2Q以降はリース業、その他の物品賃貸業を除く。2004/1Q以前は、事業所サービス業を除く。

(資料) 財務省「法人企業統計季報」

設備投資一致指標

(1) 資本財の総供給・出荷

(季調済、2005年=100)

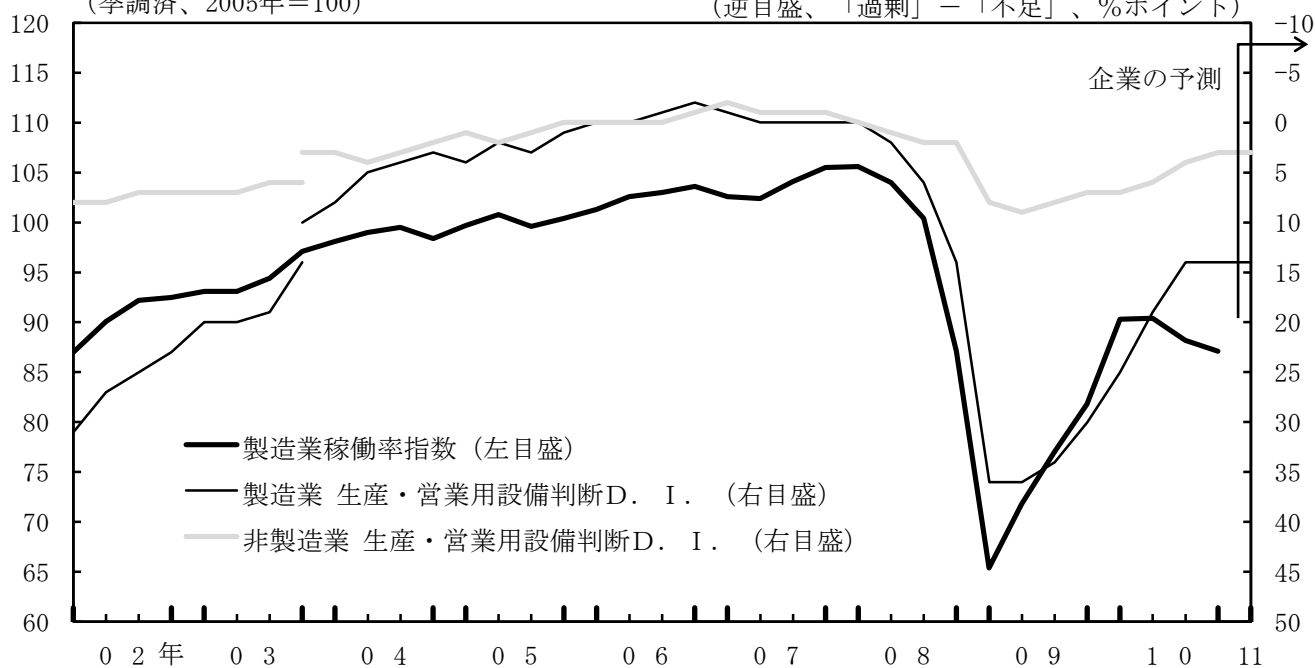


- (注) 1. 資本財総供給は、国内向けの国産品と輸入品を合わせたもの。
 2. 資本財出荷は、国内向けの国産品と輸出品を合わせたもの。
 3. 2011/1Qは、1月の計数。

(2) 稼働率と設備判断D. I.

(季調済、2005年=100)

(逆目盛、「過剰」－「不足」、%ポイント)

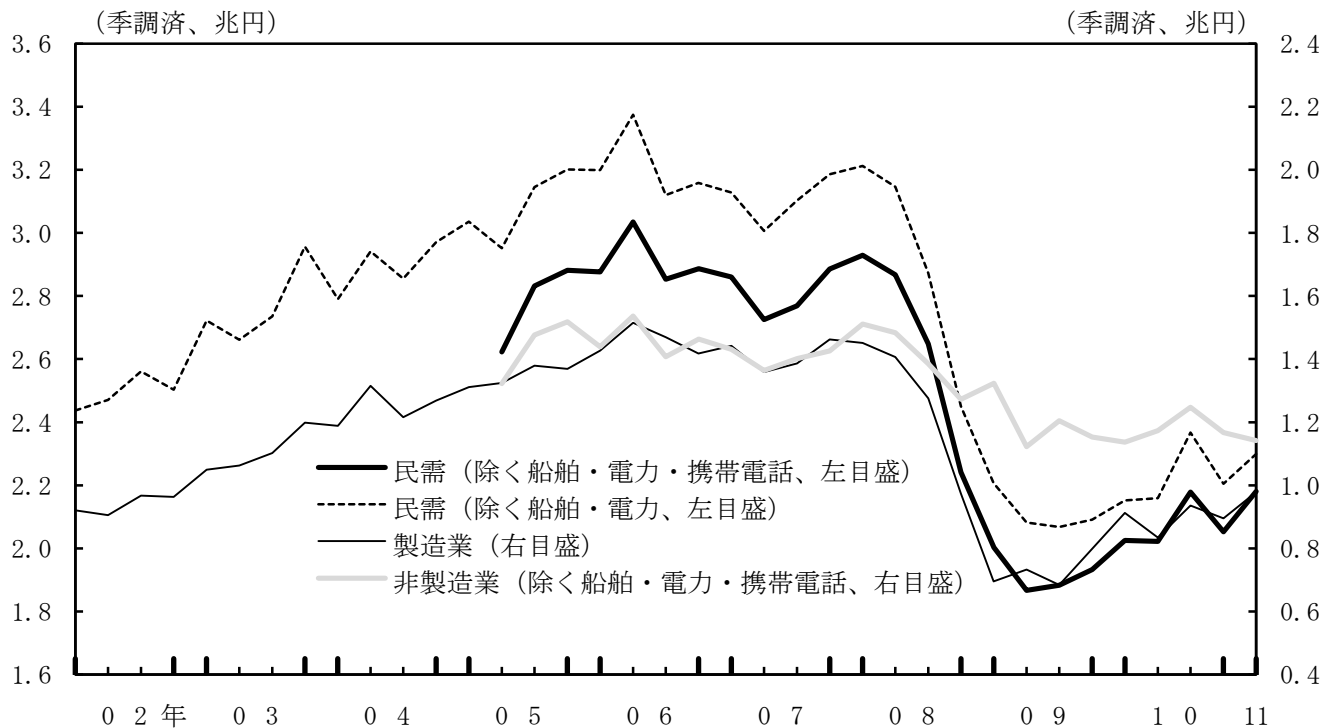


- (注) 1. 生産・営業用設備判断D. I. は全規模合計。
 2. 生産・営業用設備判断D. I. は、2004/3月調査より、調査対象企業の拡充を含む幅広い見直しを実施した。旧ベースは2003/12月調査まで、新ベースは2003/12月調査から。

(資料) 経済産業省「鉱工業指数統計」「鉱工業総供給表」、
 日本銀行「全国企業短期経済観測調査」

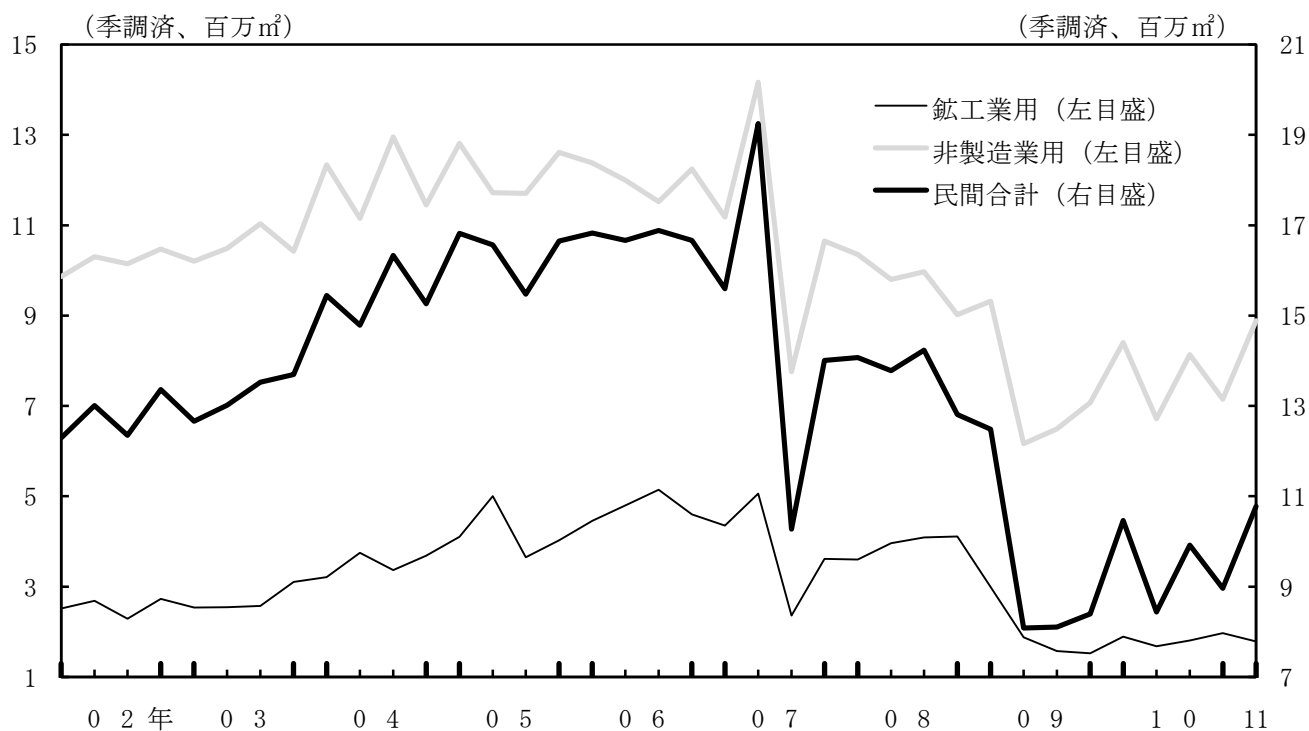
設備投資先行指標

(1) 機械受注



(注) 2011/1Qは、1月の計数を四半期換算。

(2) 建築着工床面積 (民間非居住用)



(注) 1. X-12-ARIMAによる季節調整値。

2. 新産業分類に対応し、2003年度以降、新聞・出版業が鉱工業から非製造業に分類変更となった。そのため、リンク係数を算出のうえ、2002年度以前を水準調整している。

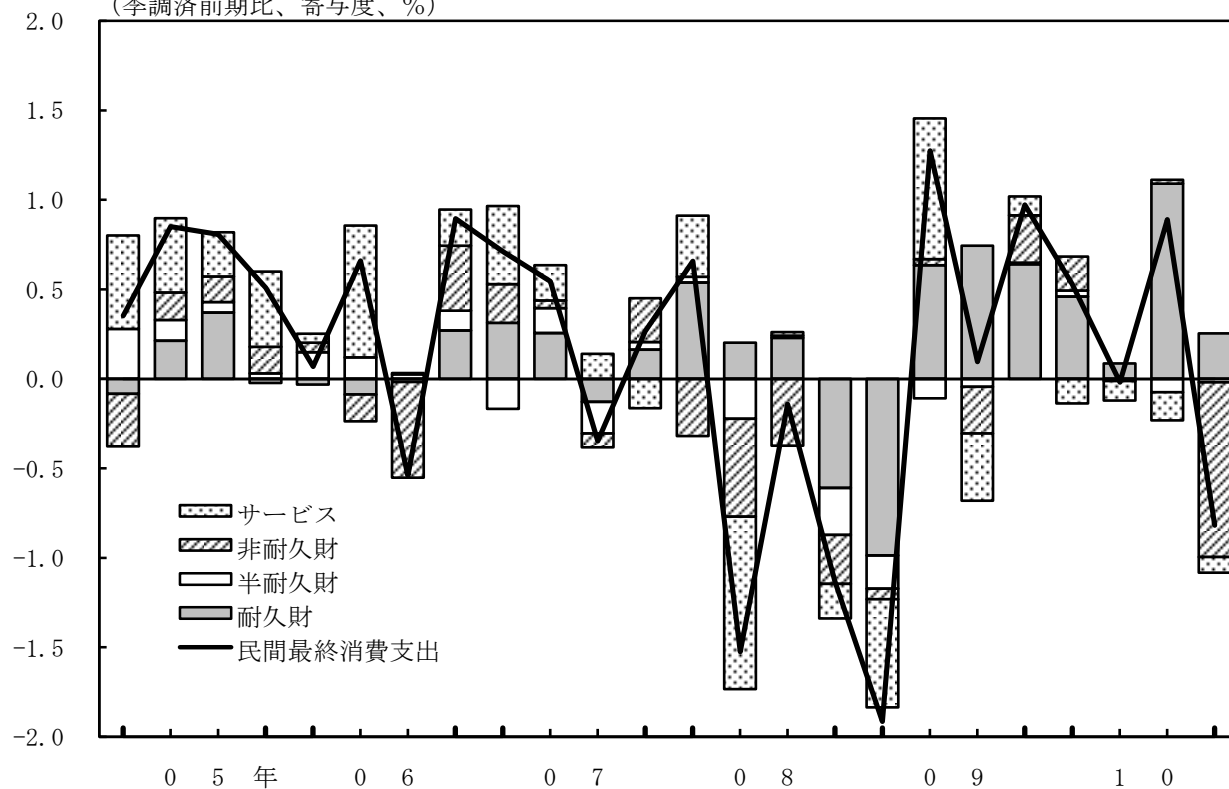
3. 2011/1Qは、1月の計数を四半期換算。

(資料) 内閣府「機械受注統計」、国土交通省「建築着工統計」

個人消費（1）

（1）GDP形態別消費（実質）

（季調済前期比、寄与度、％）



（2）GDP民間最終消費支出・消費総合指数（実質）

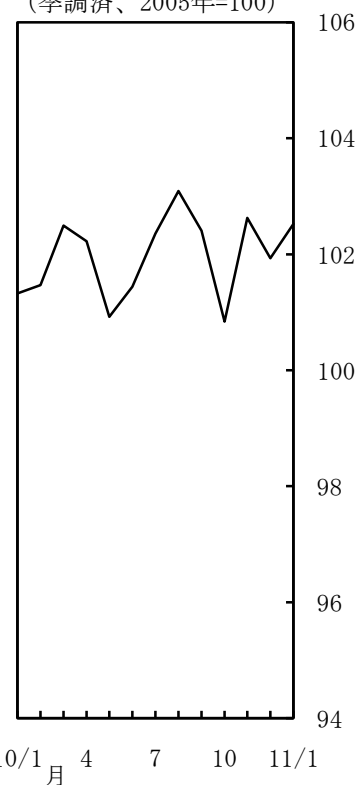
< 四半期 >

（季調済、2005年=100）



< 月次 >

（季調済、2005年=100）

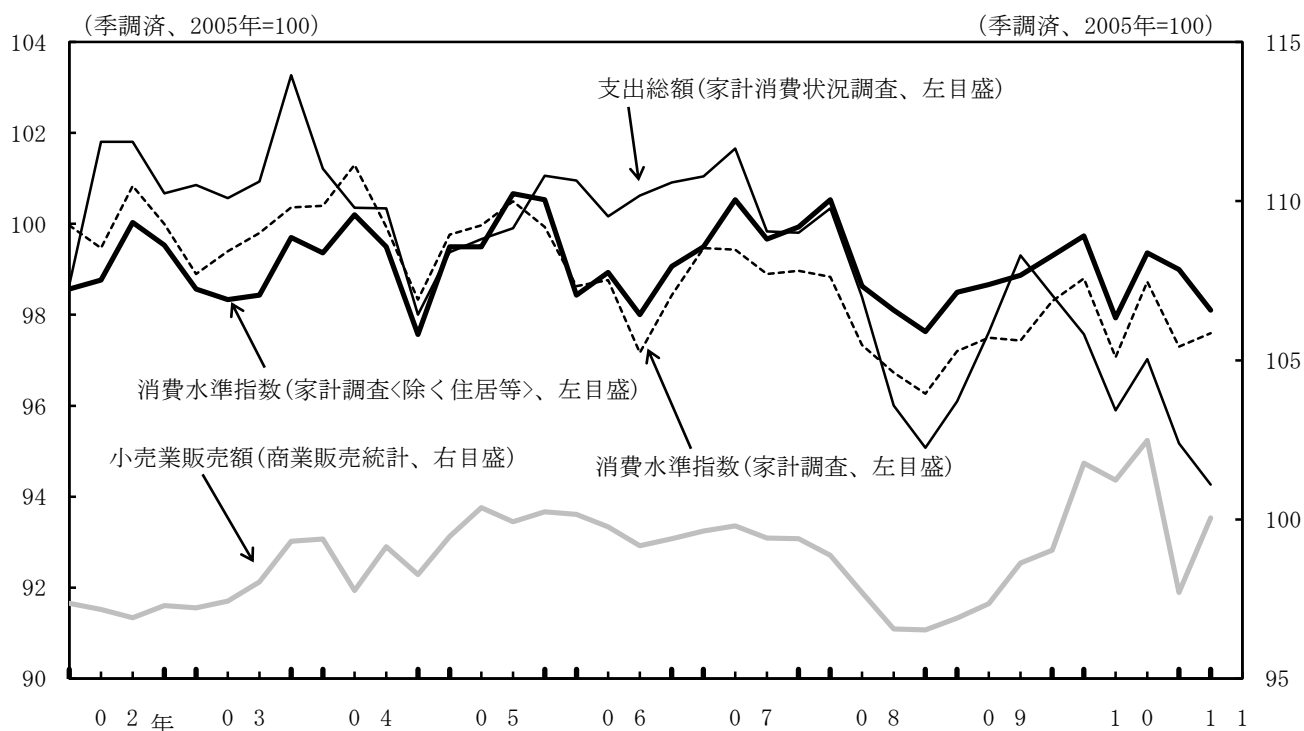


（注）消費総合指数の2011/1Qは、1月の値。

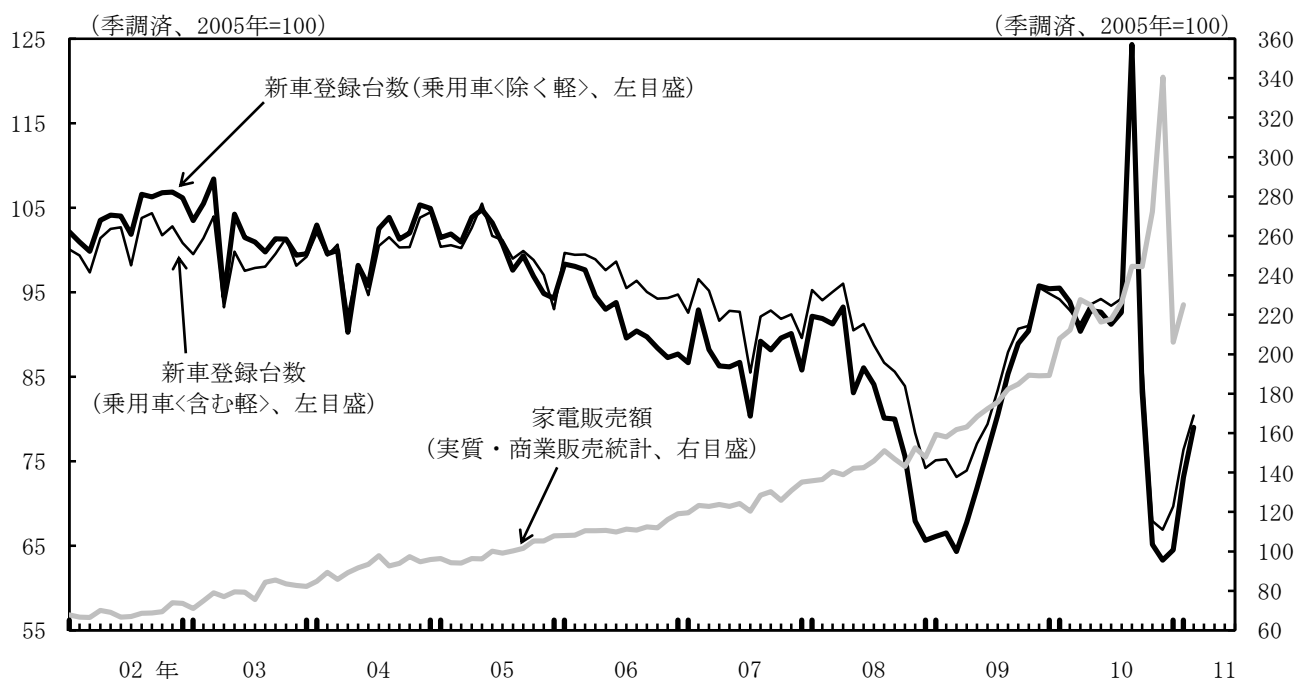
（資料）内閣府「国民経済計算」「消費総合指数」

個人消費（2）

（1）家計調査・家計消費状況調査・商業販売統計（実質）



（2）耐久消費財

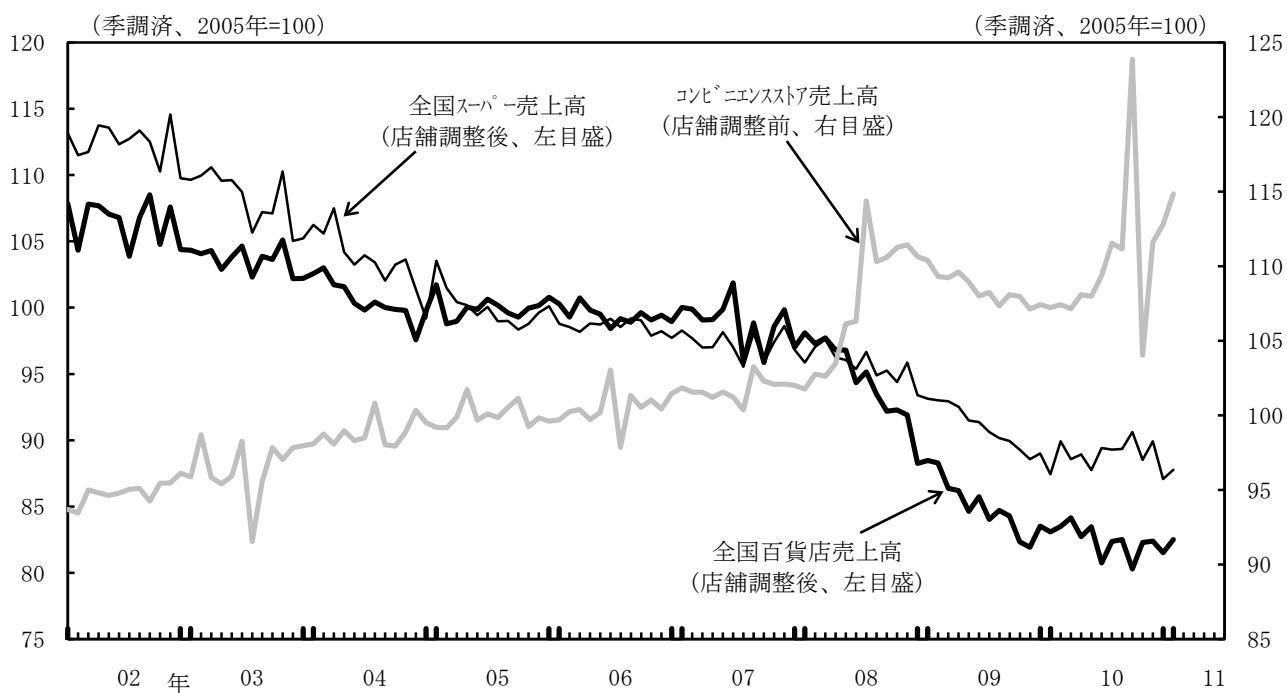


- (注) 1. 支出総額、小売業販売額、家電販売額及び新車登録台数はX-12-ARIMAによる季節調整値。
 2. 消費水準指数は、二人以上の世帯（世帯人員及び世帯主の年齢分布調整済）ベース。
 3. 支出総額は二人以上の世帯ベース。CPI「持家の帰属家賃を除く総合」で実質化。
 4. 小売業販売額は、CPI（「財」から「電気・都市ガス・水道」を除いたもの）で実質化。
 家電販売額は、商業販売統計の機械器具小売業販売額指数を、各種家電関連商品のCPI（但し、2002年以前のパソコン用プリンタはCGPIで代用）を幾何平均して算出したデフレーターで実質化。
 5. 2011/1Qは1月の値。

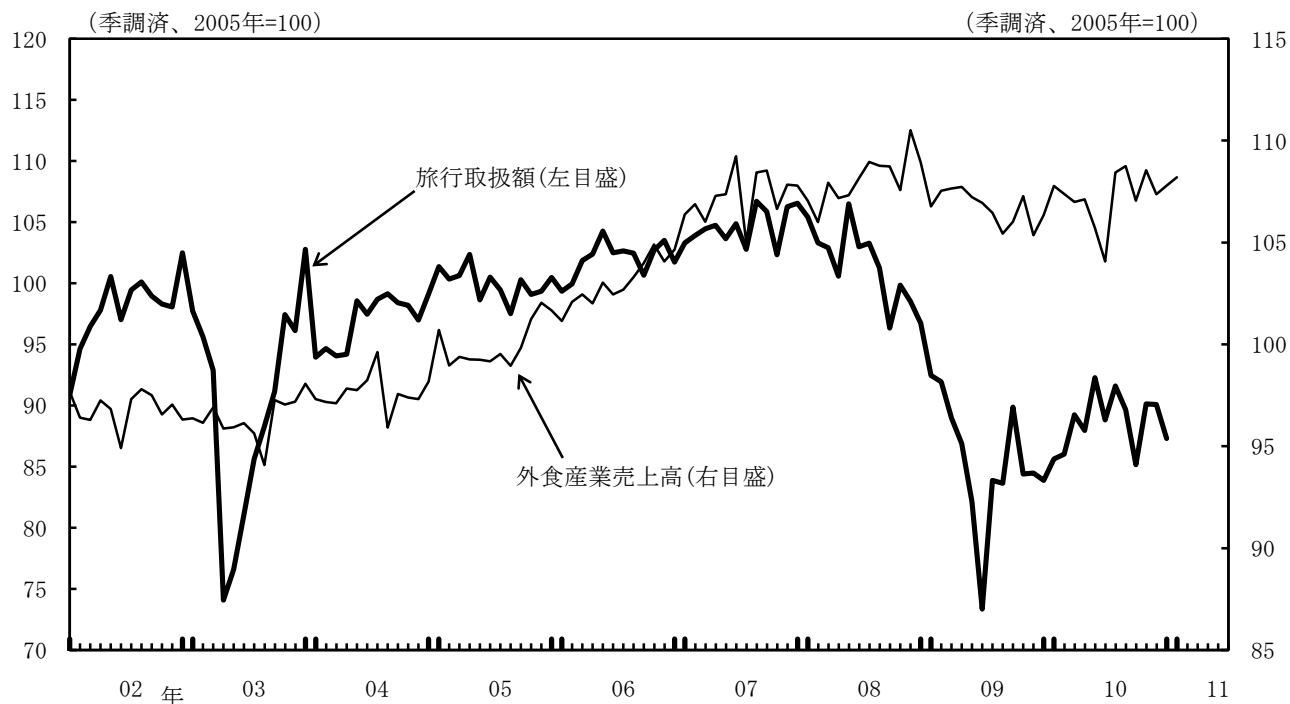
(資料) 総務省「家計調査報告」「家計消費状況調査」「消費者物価指数」、経済産業省「商業販売統計」、日本銀行「企業物価指数」、日本自動車販売協会連合会「自動車国内販売」、全国軽自動車協会連合会「軽自動車新車販売速報」

個人消費（3）

（1）小売店販売（名目）



（2）サービス消費（名目）



（注）1. X-12-ARIMAによる季節調整値。

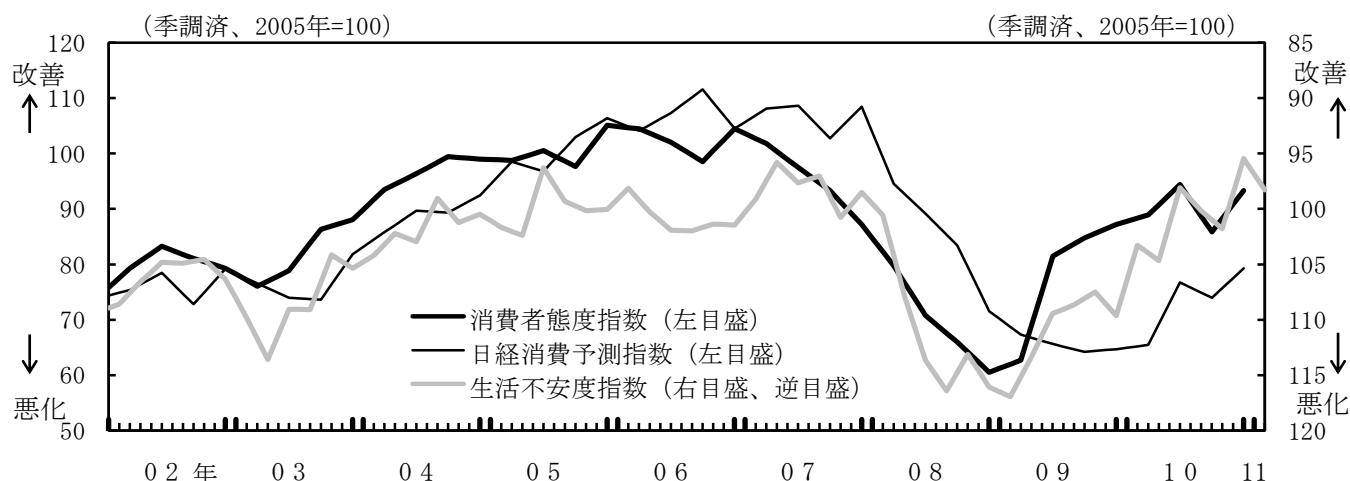
2. 旅行取扱額は、外国人旅行を除いている。また、2007/4月及び2010/4月に調査対象が変更された結果、原データに断層が生じている。2007/4月以降の系列は、前年比を用いて接続している。

3. 外食産業売上高は、1993年の外食総研のデータを基準とし、日本フードサービス協会の前年比で延長。

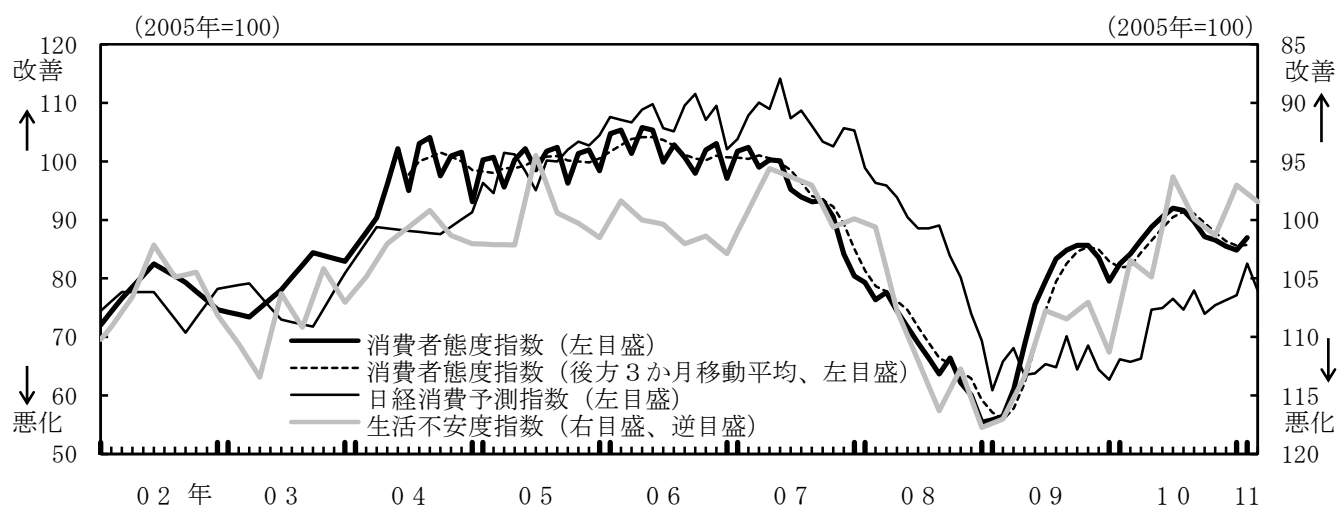
（資料） 経済産業省「商業販売統計」、観光庁「旅行業者取扱額」、
外食総研「月次売上動向調査」、日本フードサービス協会「外食産業市場動向調査」

消費者コンフィデンス

(1) 季調済系列

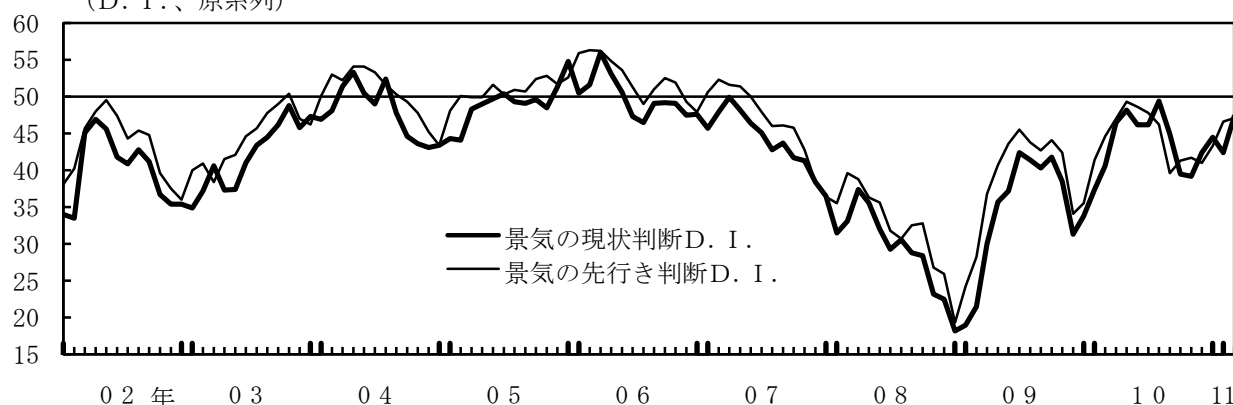


(2) 原系列



<参考> 景気ウォッチャー調査 (家計動向関連)

(D. I.、原系列)

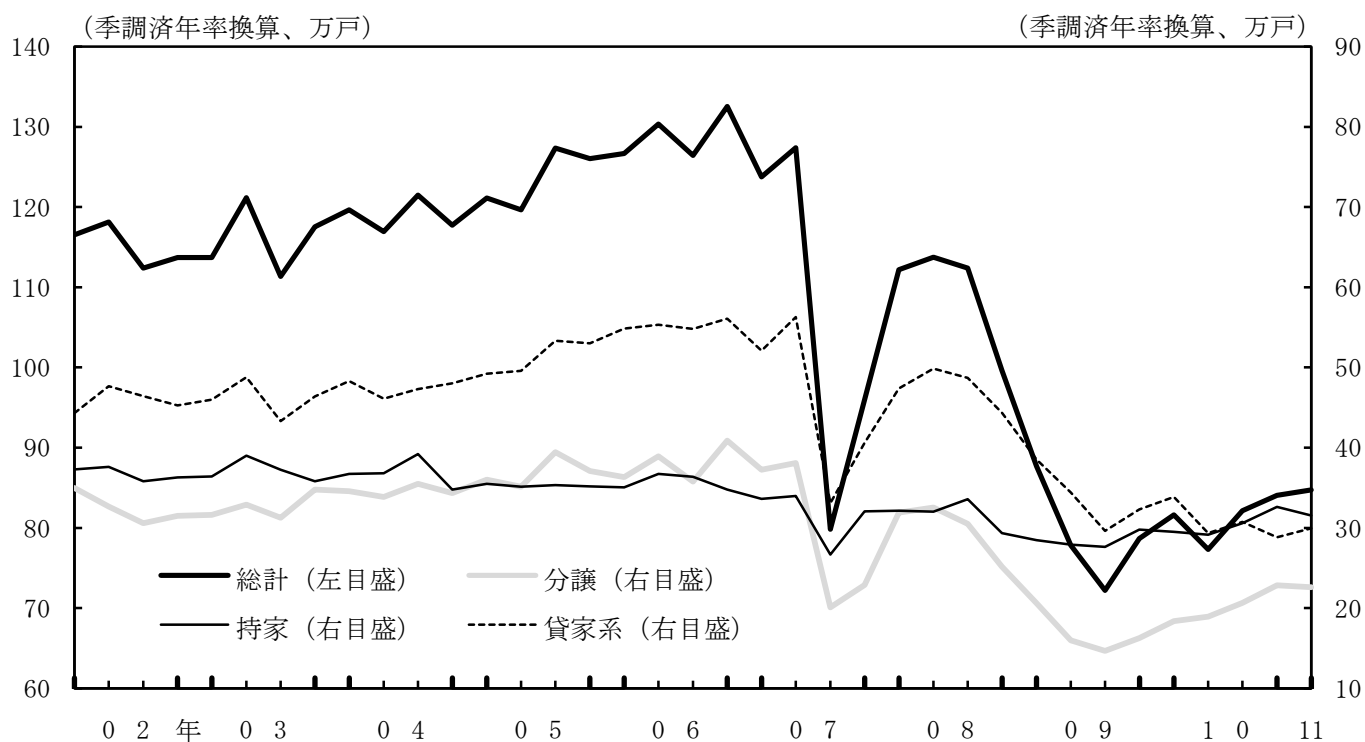


- (注) 1. 消費者態度指数 (調査客体：全国・一般世帯 約4,700世帯)、日経消費予測指数 (同：首都圏 600人)、生活不安度指数 (同：全国 1,200人) はいずれも消費者意識を尋ねたアンケート調査。
2. 調査が実施されていない月については、線形補間を実施。
3. 日経消費予測指数及び生活不安度指数はX-12-ARIMAによる季節調整値。なお、日経消費予測指数は、2004年まで四半期調査であったため、四半期の値で季節調整を実施。

(資料) 内閣府「消費動向調査」「景気ウォッチャー調査」、日本経済新聞社「日経消費予測指数」、日本リサーチ総合研究所「消費者心理調査」

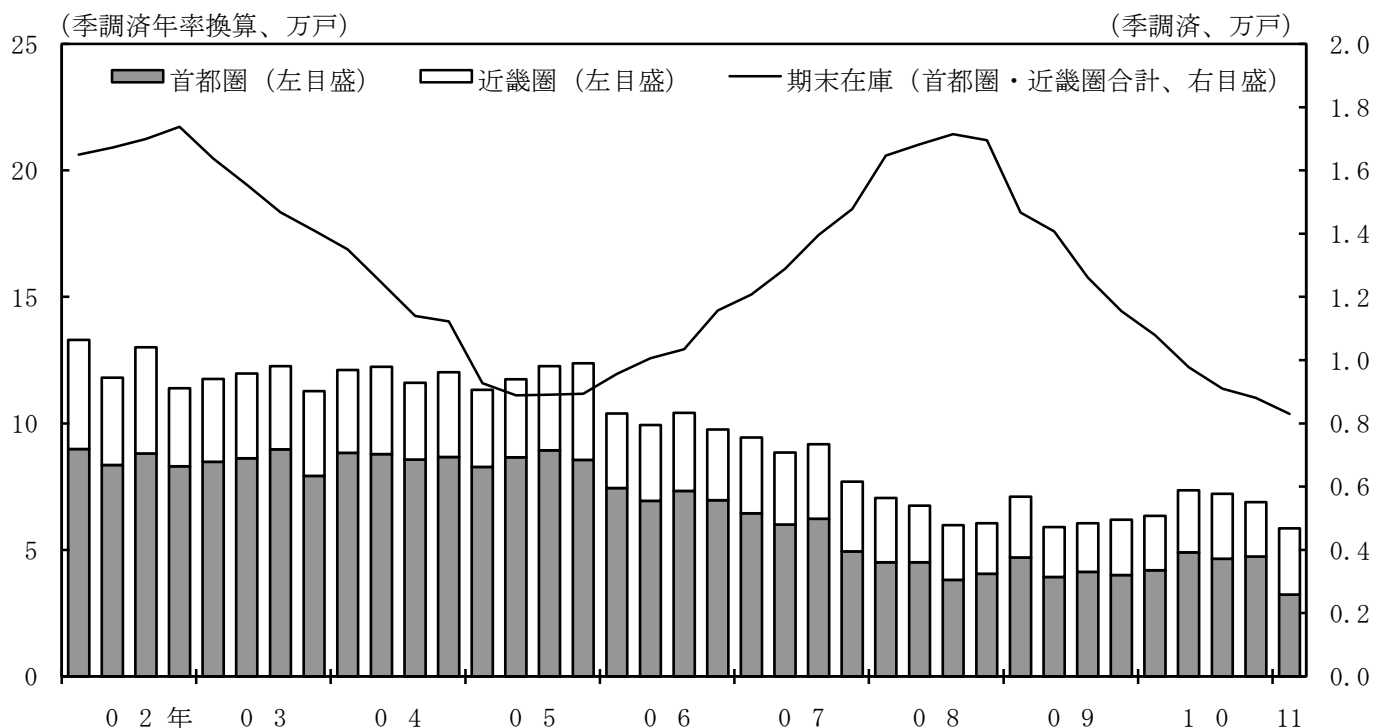
住宅投資関連指標

(1) 新設住宅着工戸数



(注) 2011/1Qは1月の値。

(2) マンション販売動向 (全売却戸数)



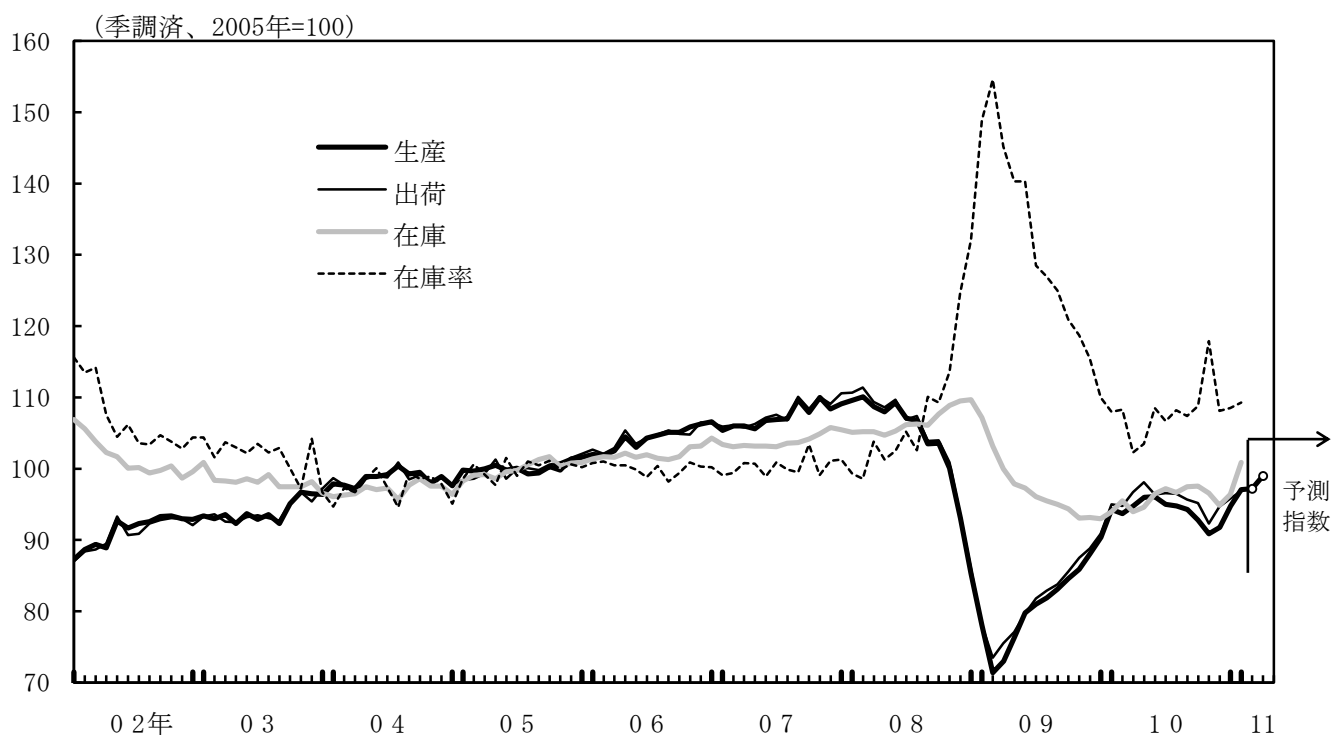
(注) 1. X-12-ARIMAによる季節調整値。

2. 2011/1Qは1月の値。

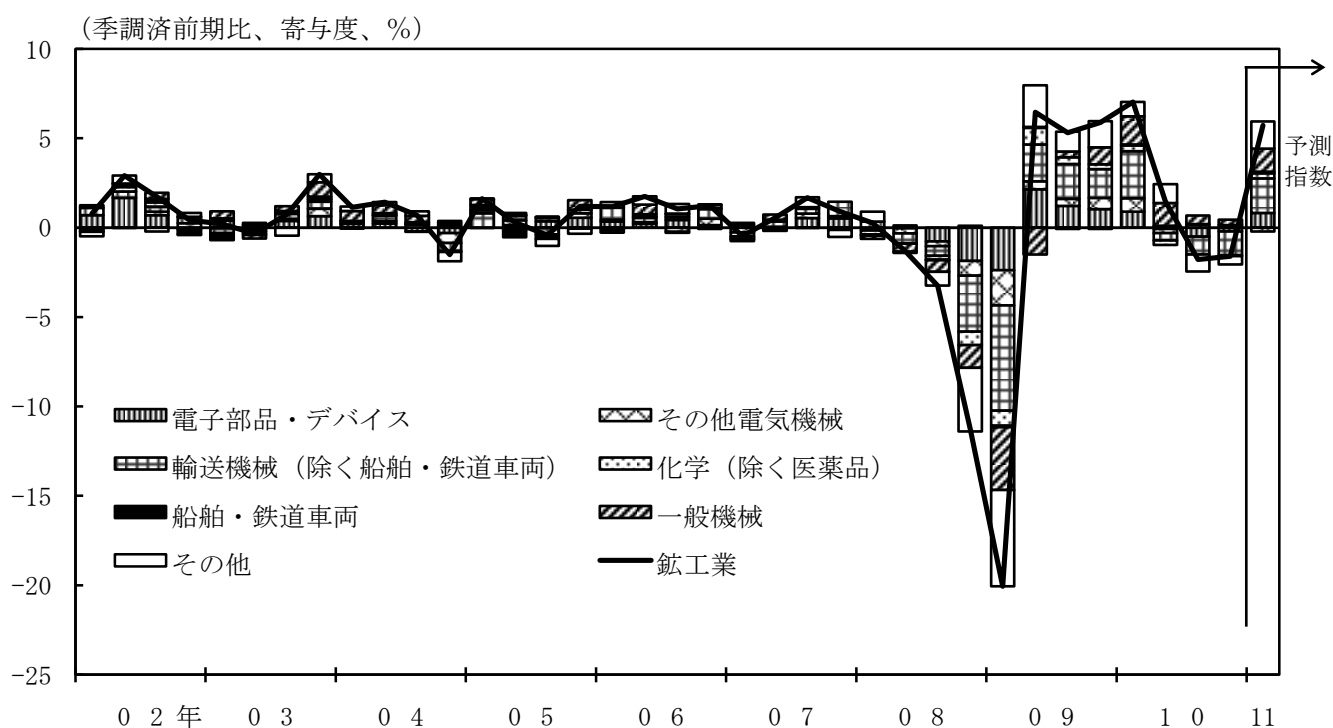
(資料) 国土交通省「建築着工統計」、
不動産経済研究所「首都圏のマンション市場動向」「近畿圏のマンション市場動向」

鋁工業生産・出荷・在庫

(1) 鋁工業生産・出荷・在庫



(2) 生産の業種別寄与度



- (注) 1. その他電気機械は電気機械、情報通信機械を合成したもの。
2. 2003/1Q以前は、2000年基準の指数を用いて算出。
3. 2011/1Qは、予測指数を用いて算出。

(資料) 経済産業省「鋁工業指数統計」

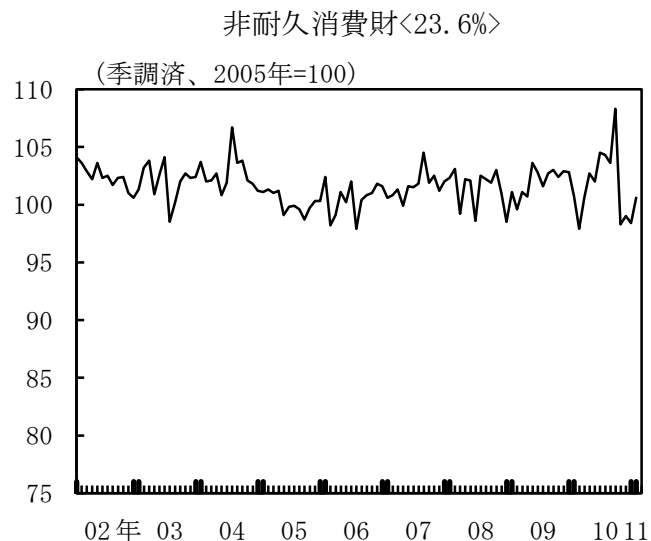
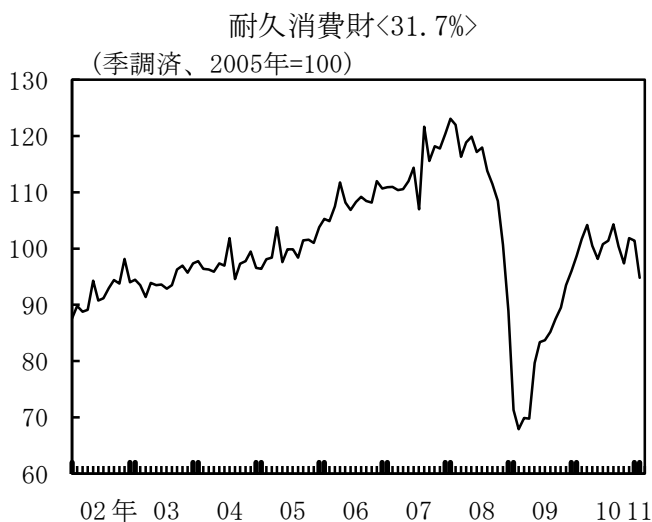
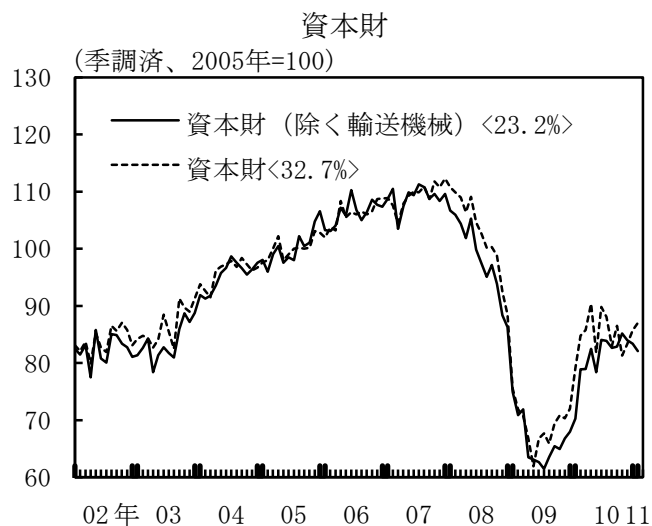
財別出荷

(1) 最終需要財と生産財



(注) < >内は鉱工業出荷に占めるウェイト。

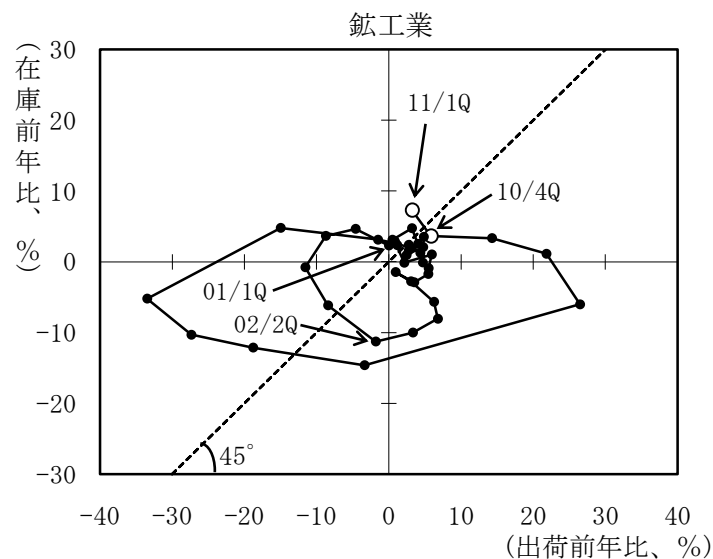
(2) 最終需要財の内訳



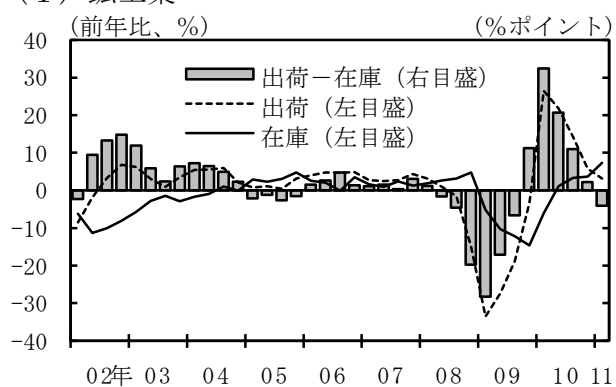
(注) < >内は最終需要財に占めるウェイト。

(資料) 経済産業省「鉱工業指数統計」

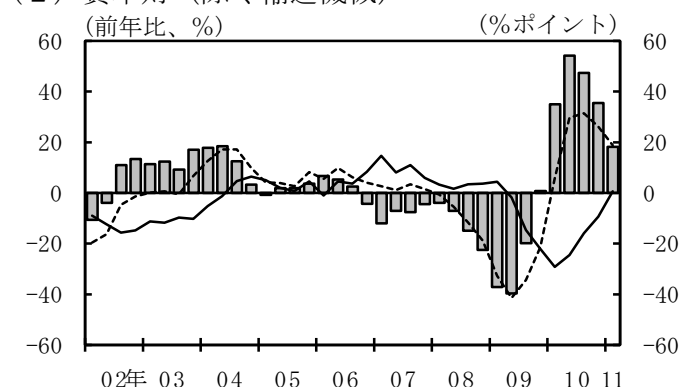
在庫循環



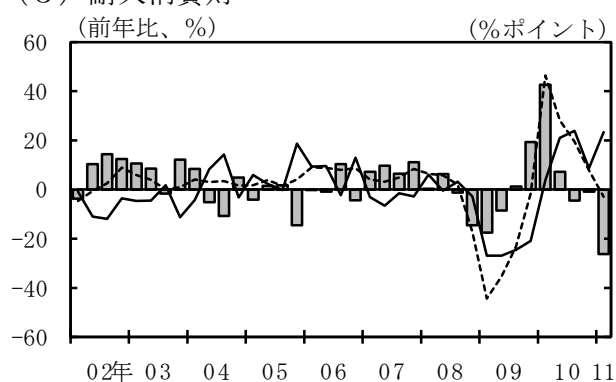
(1) 鉱工業



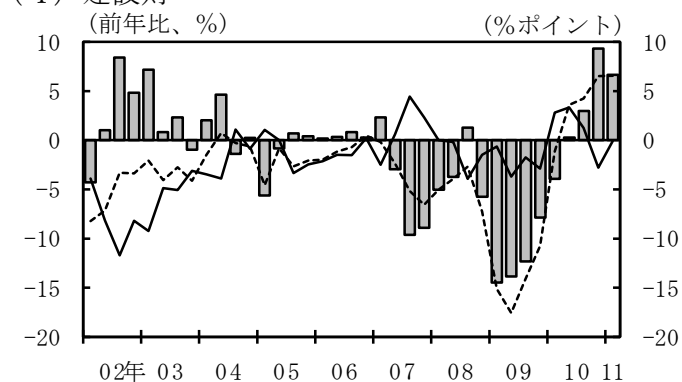
(2) 資本財 (除く輸送機械)



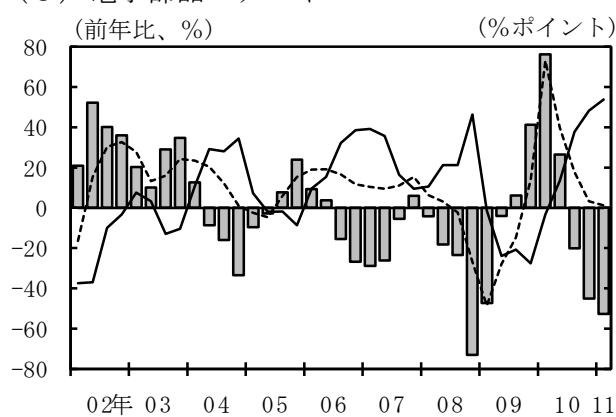
(3) 耐久消費財



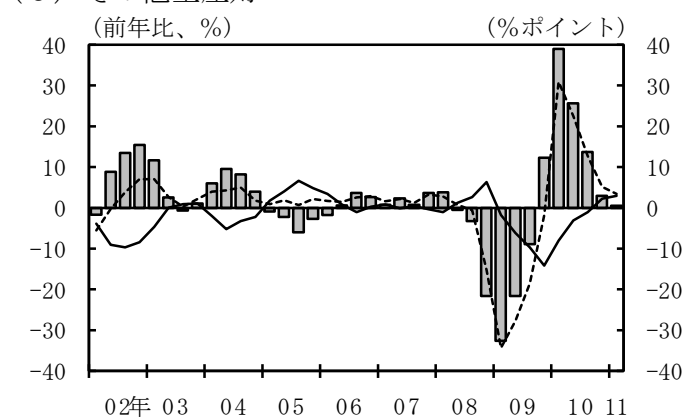
(4) 建設財



(5) 電子部品・デバイス



(6) その他生産財

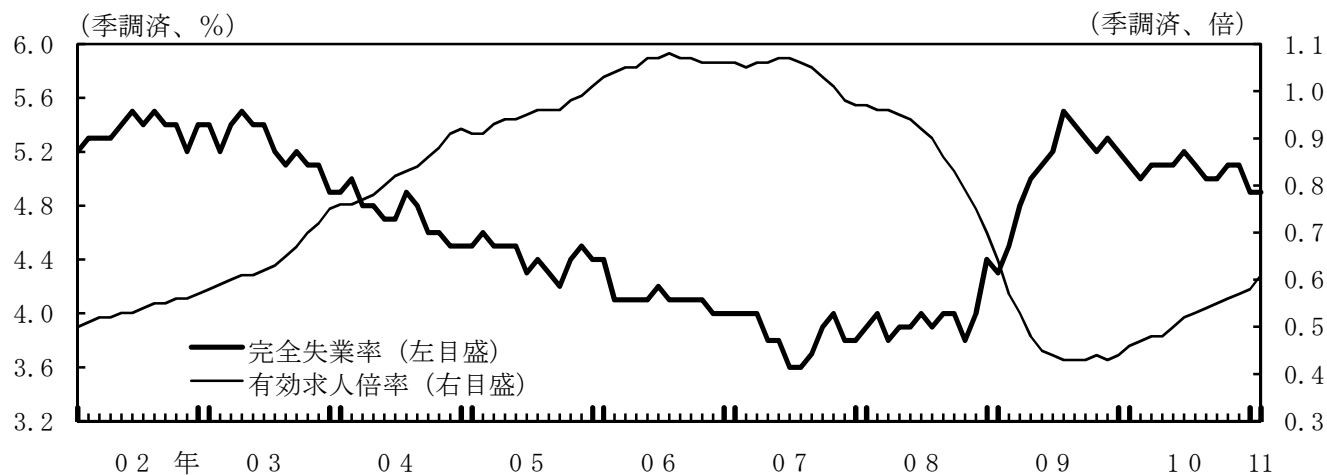


(注) 2011/1Qは、1月の値を用いて算出。

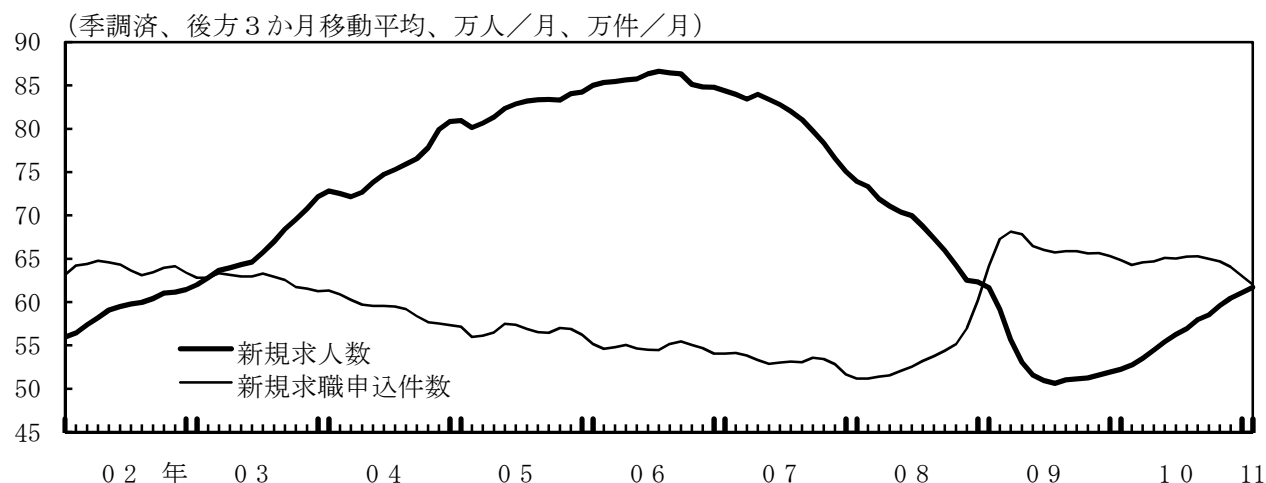
(資料) 経済産業省「鉱工業指数統計」

労働需給 (1)

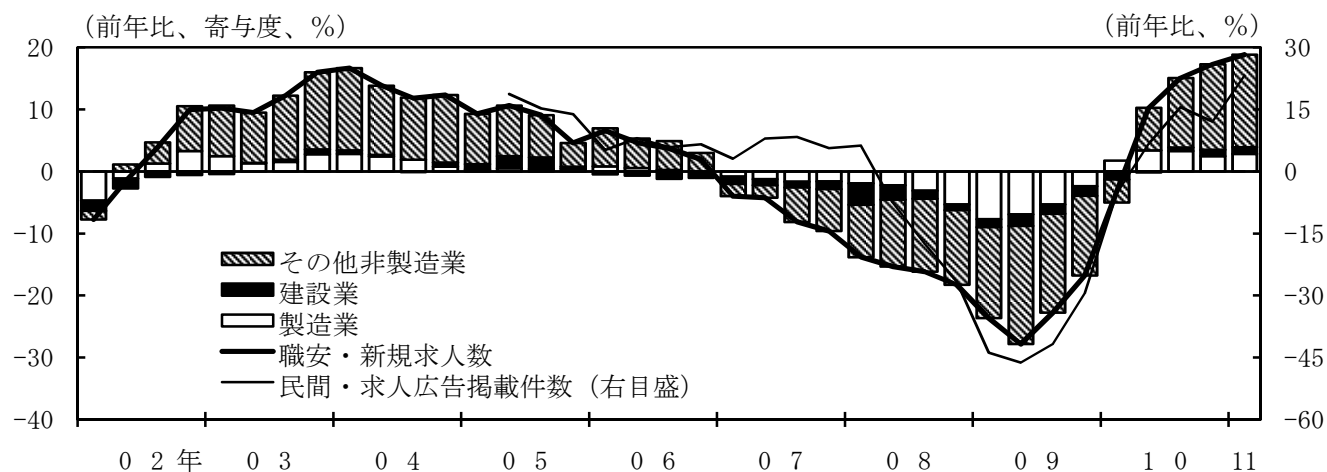
(1) 失業率と有効求人倍率



(2) 新規求人と新規求職



(3) 求人の動向



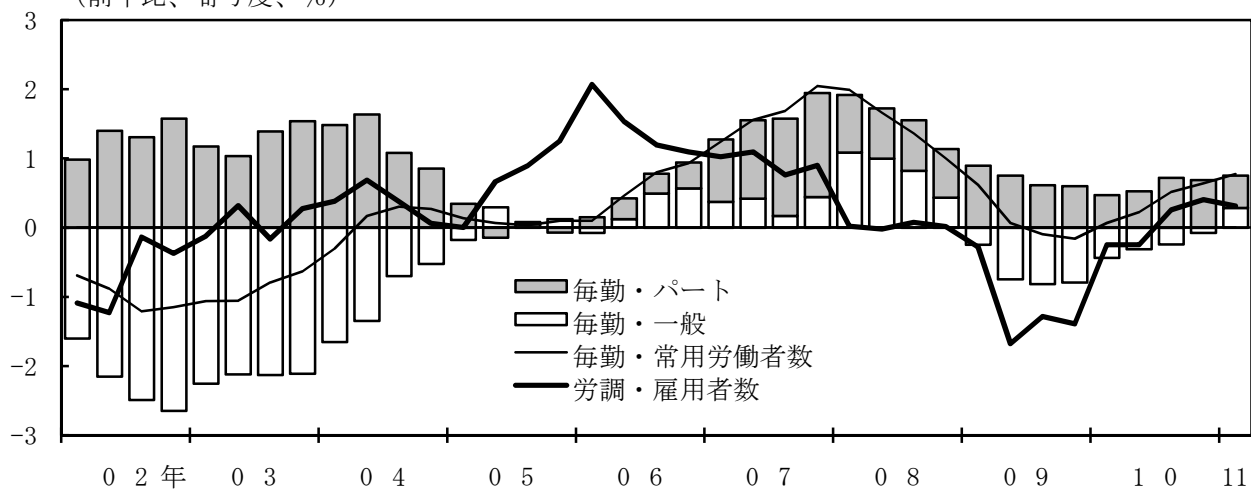
- (注) 1. 有効求人倍率、新規求人数、新規求職申込件数は、新規学卒者を除きパートタイムを含む。
2. 求人広告掲載件数は、全国求人情報協会に加盟している企業が発行している求人メディア（有料求人情報誌、フリーペーパー、折込求人紙、求人サイト）に掲載された求人広告件数の集計値。
3. 2011/1Qは1月の前年同月比。

(資料) 総務省「労働力調査」、厚生労働省「職業安定業務統計」、
社団法人全国求人情報協会「求人広告掲載件数」

労働需給 (2)

(1) 労調・雇用者数と毎勤・常用労働者数

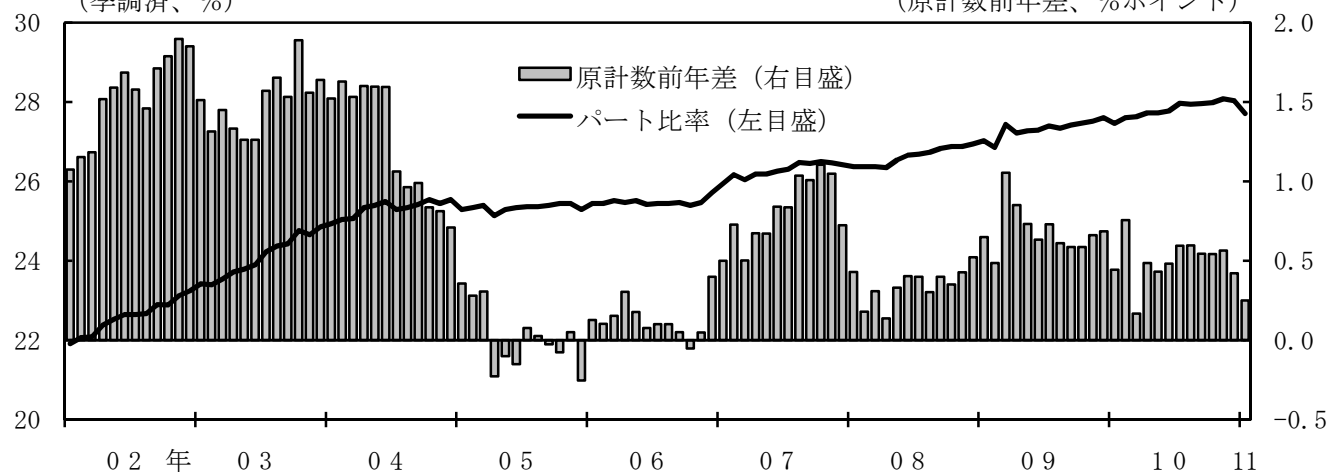
(前年比、寄与度、%)



(2) パート比率

(季調済、%)

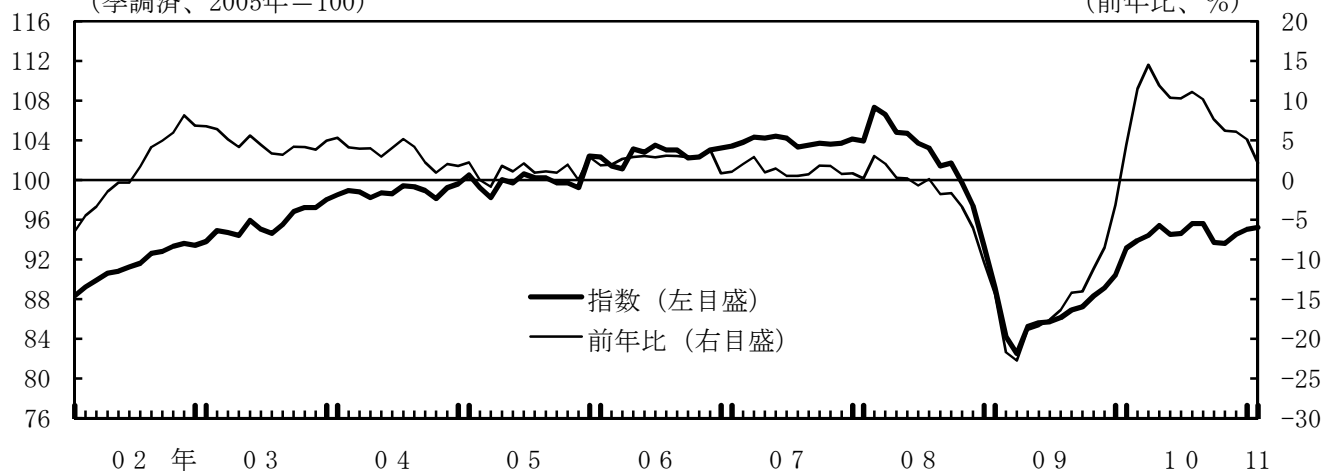
(原計数前年差、%ポイント)



(3) 所定外労働時間

(季調済、2005年=100)

(前年比、%)



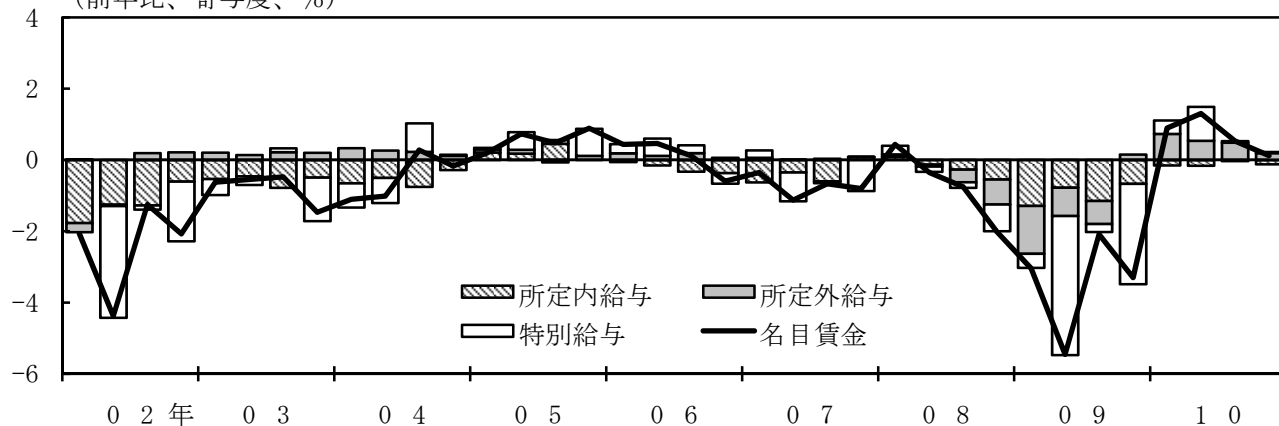
- (注) 1. 毎月勤労統計の計数は、事業所規模5人以上。
 2. パート比率は、パート労働者数/常用労働者数×100として算出。
 3. 2011/1Qは1月の前年同月比。

(資料) 厚生労働省「毎月勤労統計」、総務省「労働力調査」

雇用者所得

(1) 名目賃金

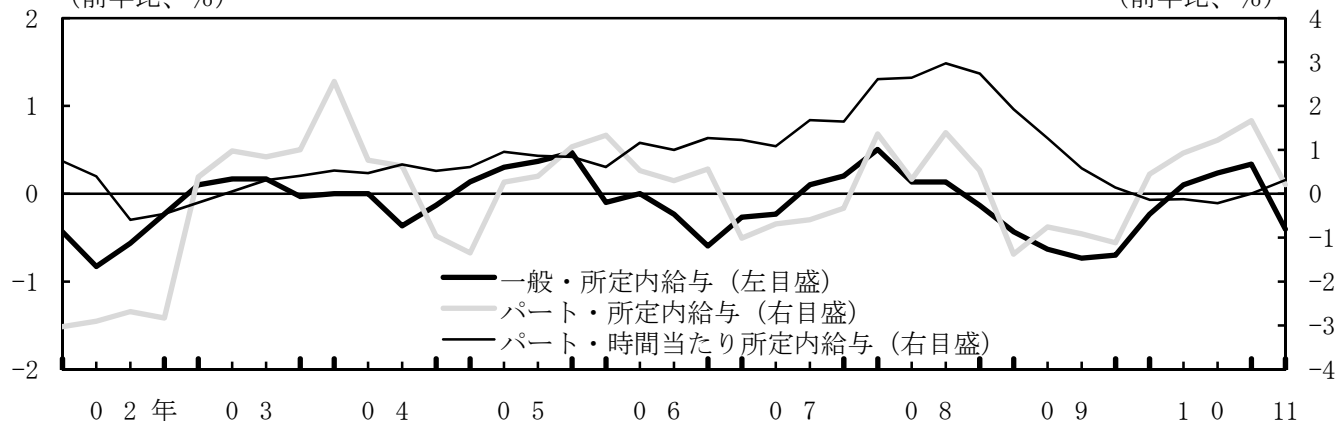
(前年比、寄与度、%)



(2) 就業形態別・所定内給与

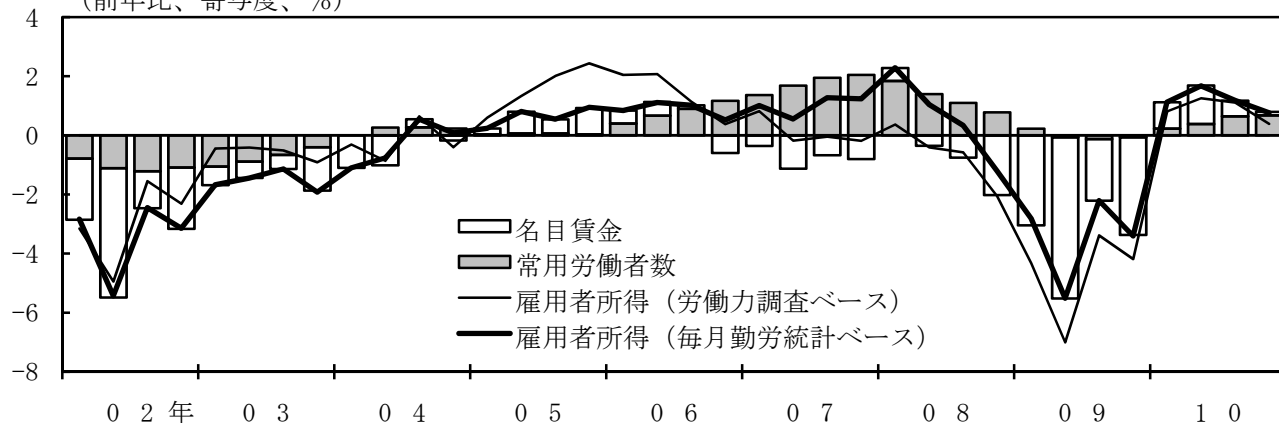
(前年比、%)

(前年比、%)



(3) 雇用者所得

(前年比、寄与度、%)



(注) 1. 毎月勤労統計の計数は、事業所規模 5 人以上。

2. (1) および (3) の四半期は以下のように組替えている。

第1四半期：3～5月、第2：6～8月、第3：9～11月、第4：12～2月。

2010/4Qは2010/12～2011/1月の前年同期比。

3. (3) の雇用者所得は以下のように算出。

雇用者所得 (毎月勤労統計ベース) = 常用労働者数 (毎月勤労統計) × 名目賃金 (毎月勤労統計)

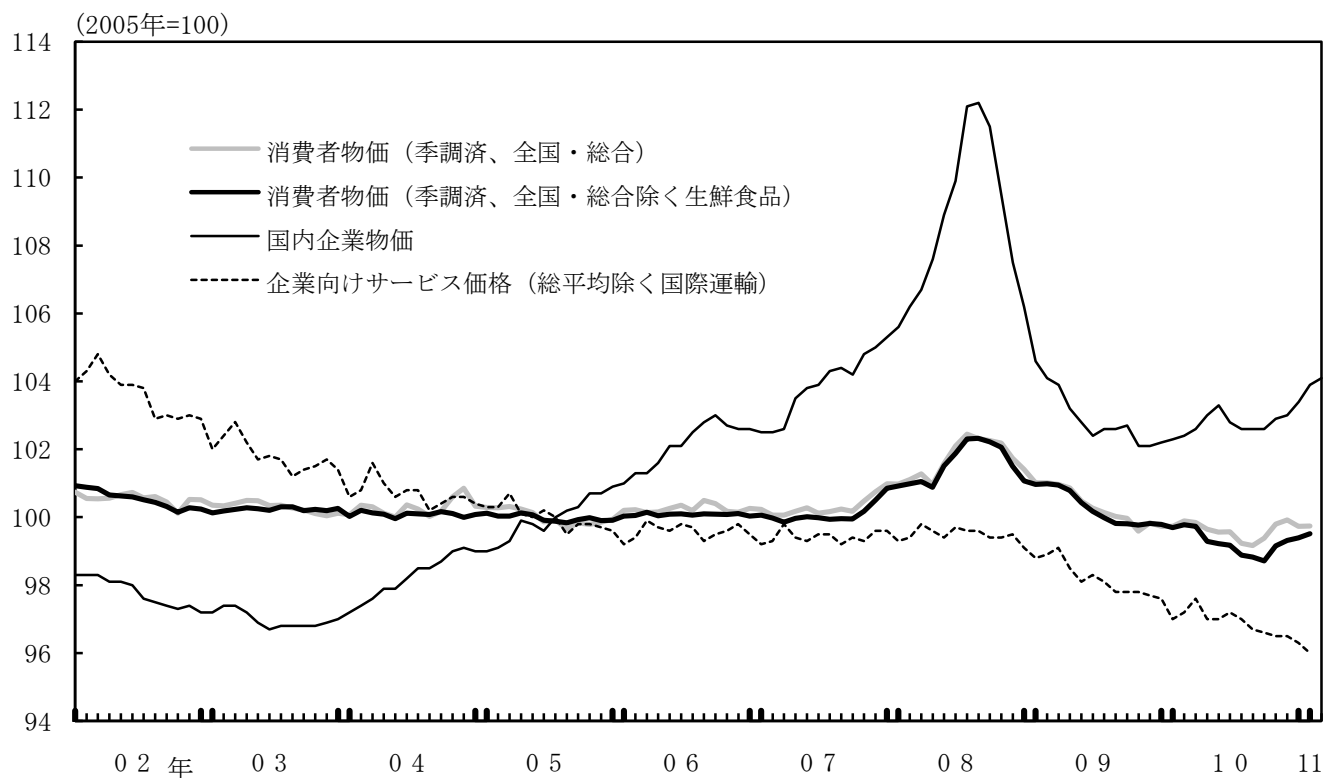
雇用者所得 (労働力調査ベース) = 雇用者数 (労働力調査) × 名目賃金 (毎月勤労統計)

4. (2) の2011/1Qは1月の前年同月比。

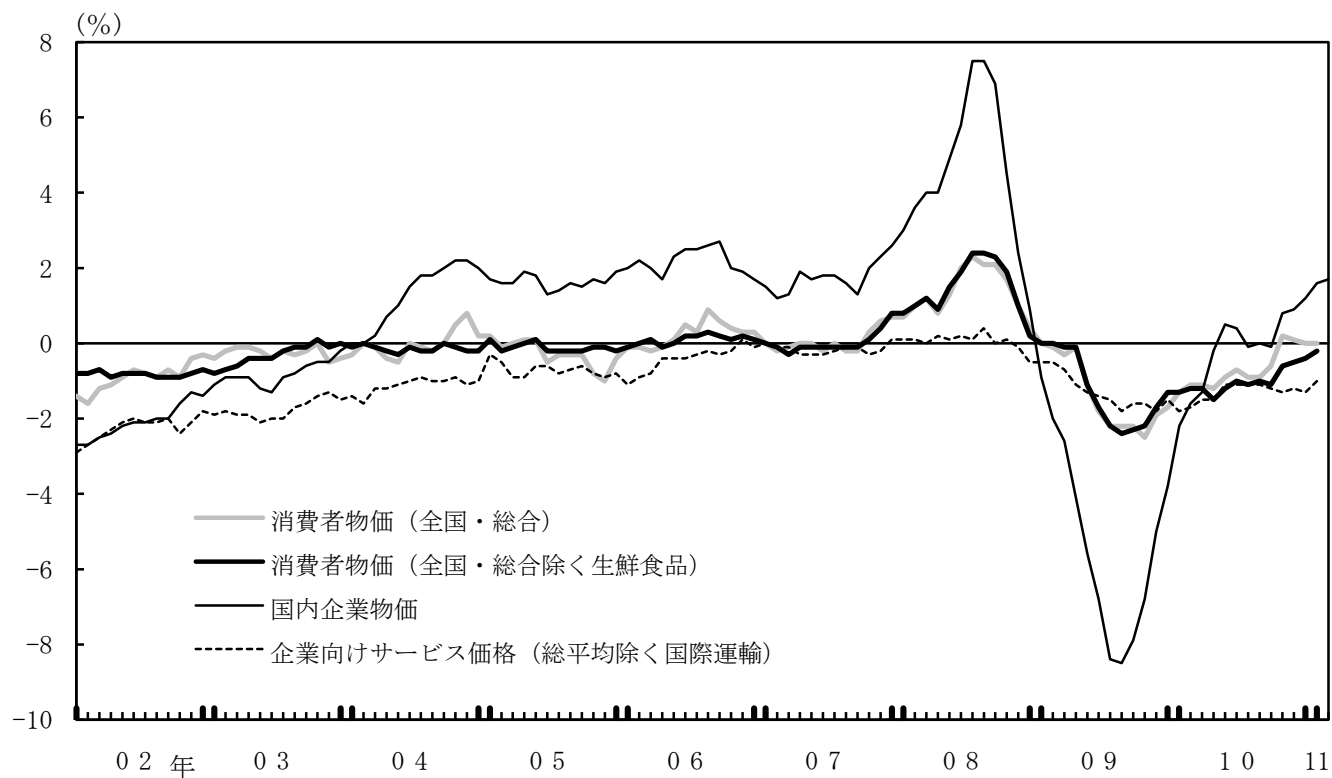
(資料) 厚生労働省「毎月勤労統計」、総務省「労働力調査」

物 価

(1) 水準



(2) 前年比

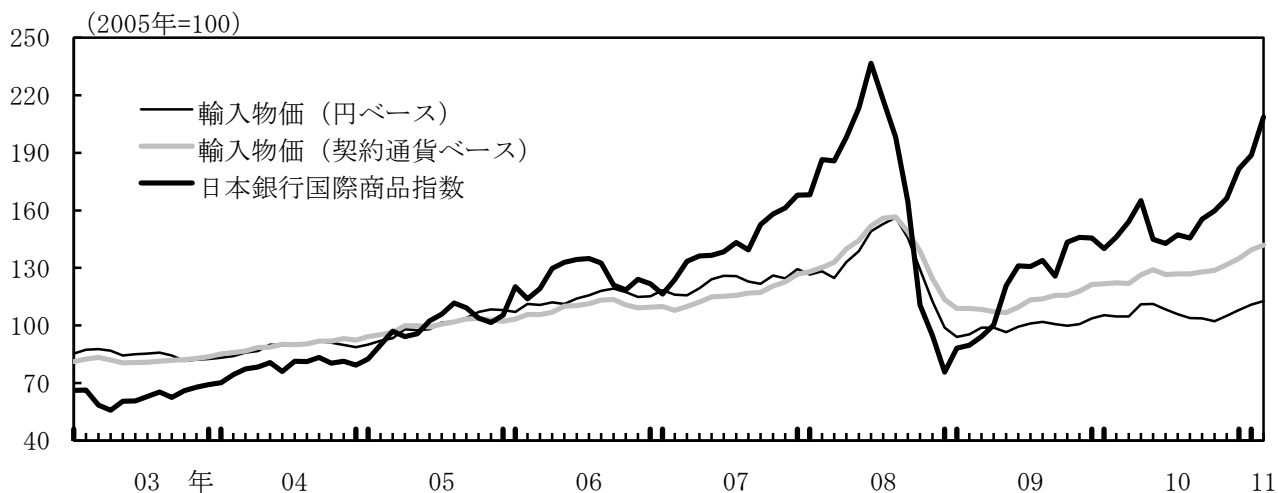


- (注) 1. (1) の消費者物価は、X-12-ARIMA による季節調整値。
 2. (1) の国内企業物価は、毎年7～9月にかけて適用される夏季割り増し電力料金の影響を除いて算出。

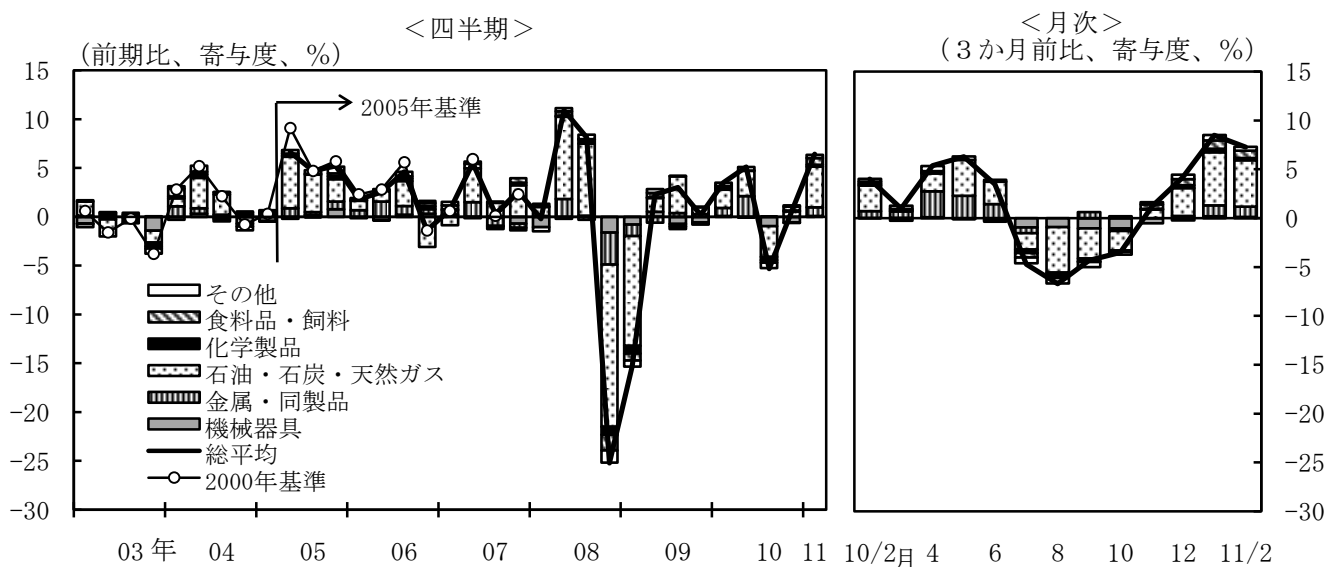
(資料) 総務省「消費者物価指数」、日本銀行「企業物価指数」「企業向けサービス価格指数」

輸入物価と国際商品市況

(1) 輸入物価と国際商品指数



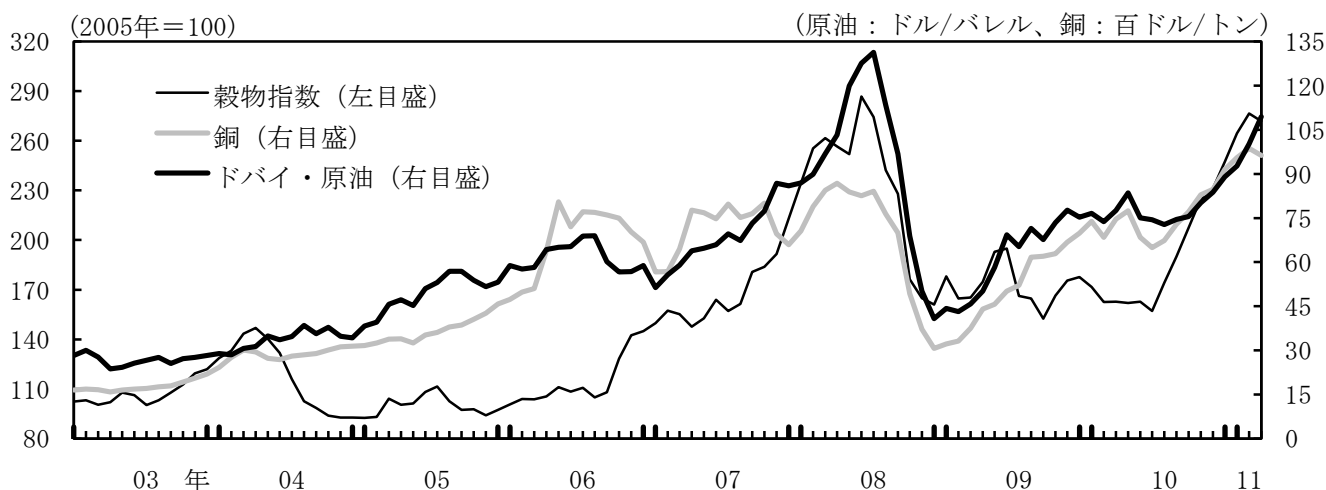
(2) 輸入物価 (円ベース：前期比、3 か月前比)



(注) 1. 機械器具：一般機器、電気・電子機器、輸送用機器、精密機器

2. 2011/1Qは、1～2月の平均値を用いて算出。なお、2000年基準の2007/4Qは、10月の値。

(3) 国際商品市況



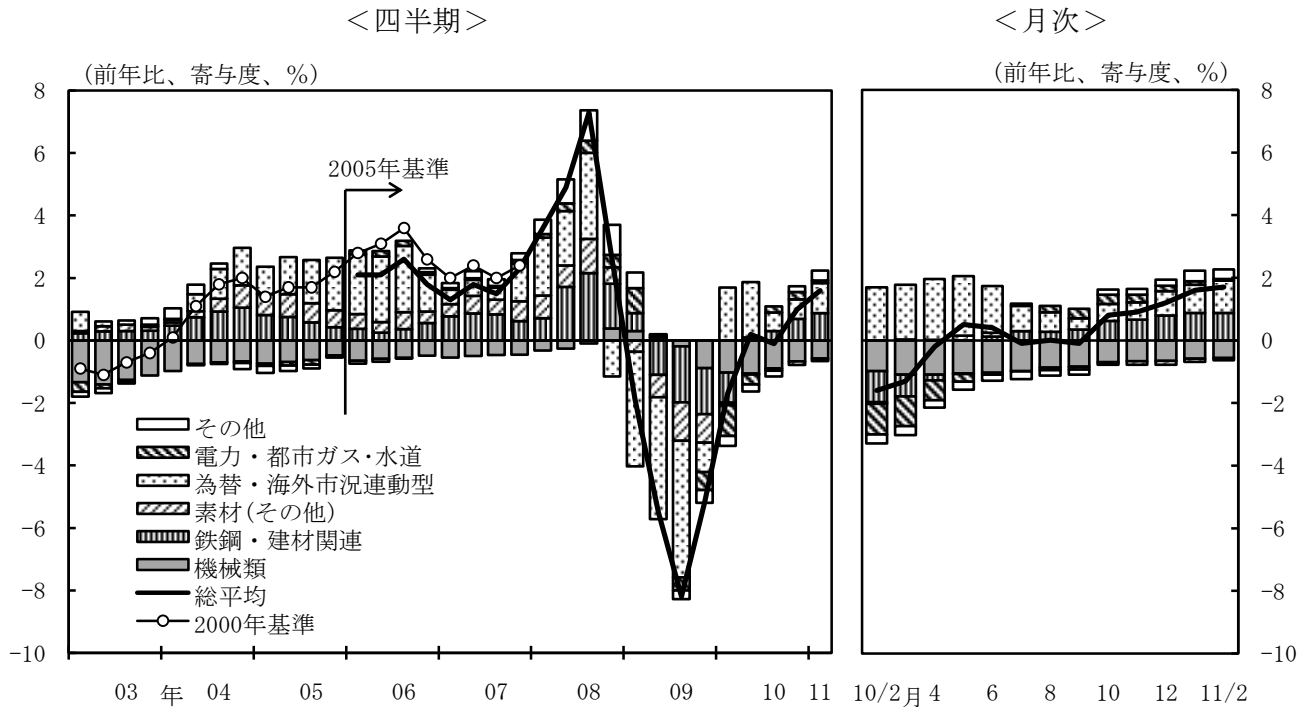
(注) 1. 穀物指数は、穀物 (小麦・大豆・トウモロコシ) の国際商品市況を加重平均したもの。
加重平均に用いるウェイトは貿易統計の輸入金額から算出。

2. 計数は月中平均。なお、2011/3月は11日までの平均値。

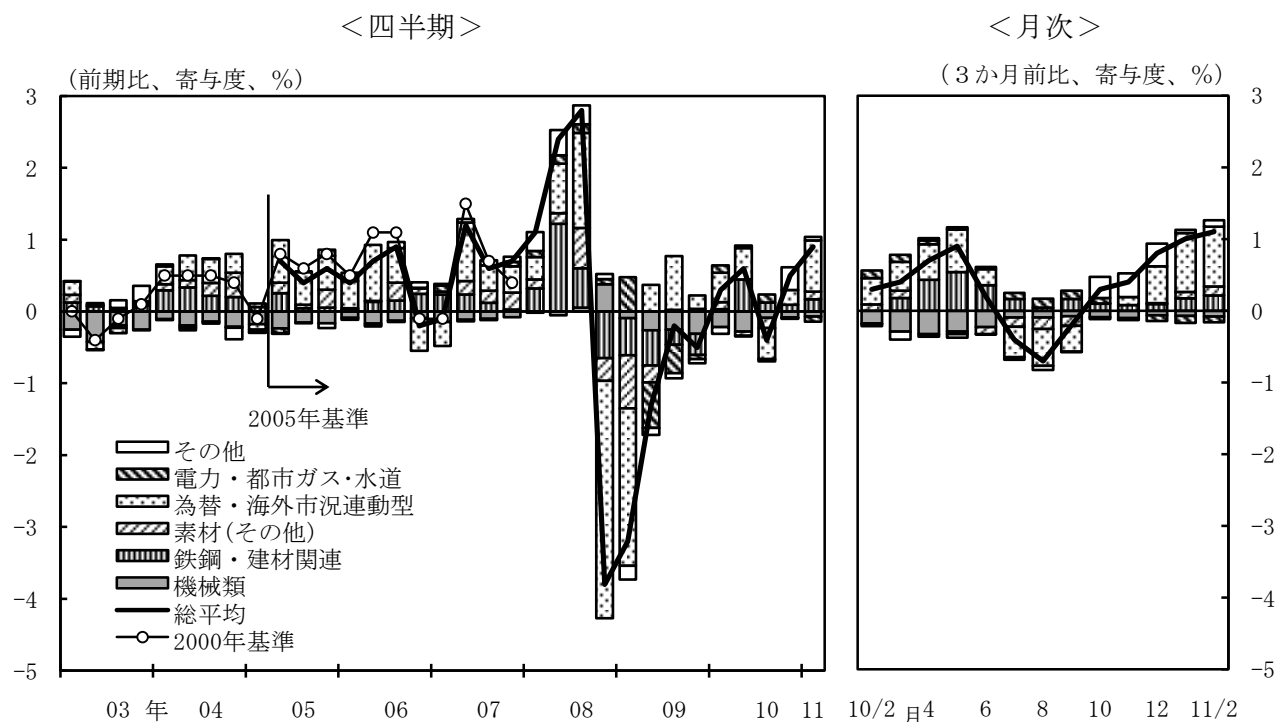
(資料) 日本銀行「企業物価指数」「日本銀行国際商品指数」等

国内企業物価

(1) 前年比



(2) 前期比、3か月前比（夏季電力料金調整後）



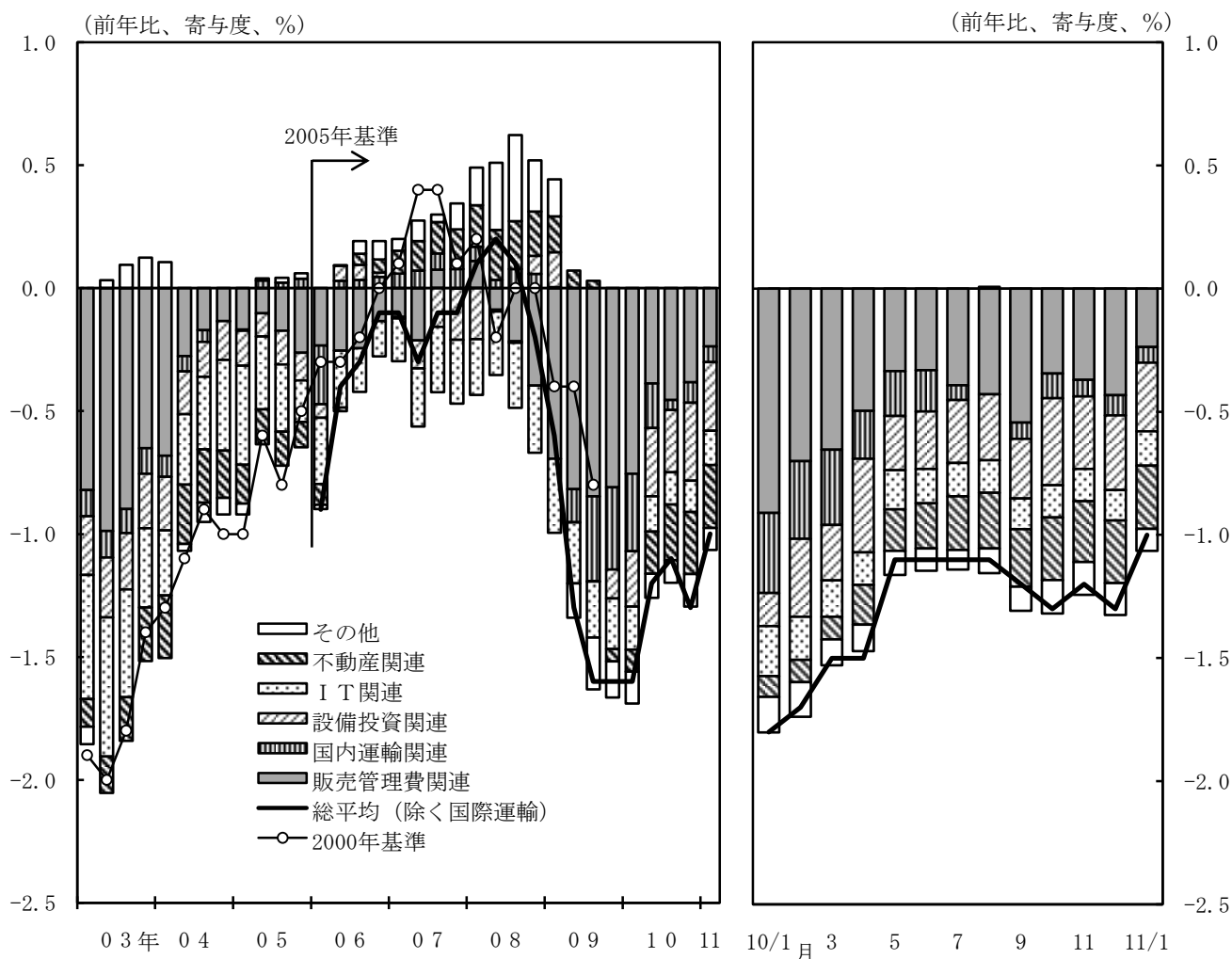
- (注) 1. 機械類：電気機器、情報通信機器、電子部品・デバイス、一般機器、輸送用機器、精密機器
2. 鉄鋼・建材関連：鉄鋼、金属製品、窯業・土石製品、製材・木製品、スクラップ類
3. 素材(その他)：化学製品、プラスチック製品、繊維製品、パルプ・紙・同製品
4. 為替・海外市況連動型：石油・石炭製品、非鉄金属
5. その他：加工食品、その他工業製品、農林水産物、鉱産物
6. (2) は、毎年7～9月にかけて適用される夏季割り増し電力料金の影響（国内企業物価に対する寄与度は0.2%程度）を除いて算出。
7. 2011/1Qは、1～2月の平均値を用いて算出。なお、2000年基準の2007/4Qは、10月の値。

(資料) 日本銀行「企業物価指数」

企業向けサービス価格

<四半期>

<月次>

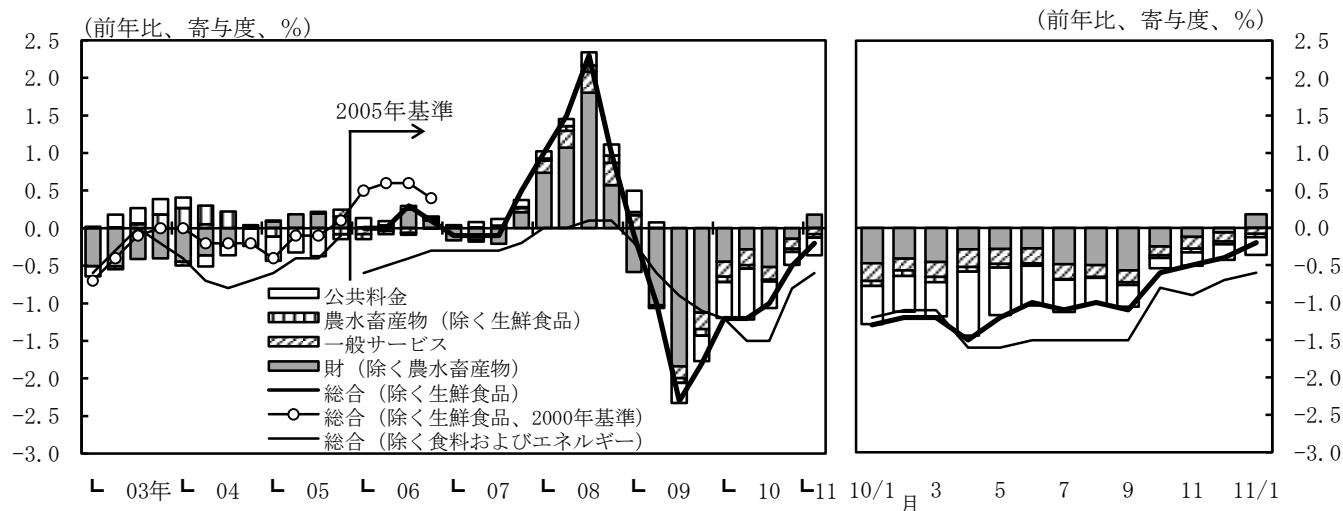


- (注) 1. 販売管理費関連：情報通信（除く新聞・出版）、広告、諸サービス（除くプラントエンジニアリング、土木建築サービス）
 2. 国内運輸関連：運輸（除く国際運輸、鉄道旅客輸送、道路旅客輸送、海上旅客輸送、国内航空旅客輸送）
 3. 設備投資関連：リース・レンタル（除く電子計算機・同関連機器リース、電子計算機レンタル）、土木建築サービス
 4. I T 関連：電子計算機・同関連機器リース、電子計算機レンタル
 5. 不動産関連：不動産
 6. その他：金融・保険、鉄道旅客輸送、道路旅客輸送、海上旅客輸送、国内航空旅客輸送、新聞・出版、プラントエンジニアリング
 7. 2011/1Qは、1月の値を用いて算出。なお、2000年基準の2009/3Qは、7～8月の平均値。

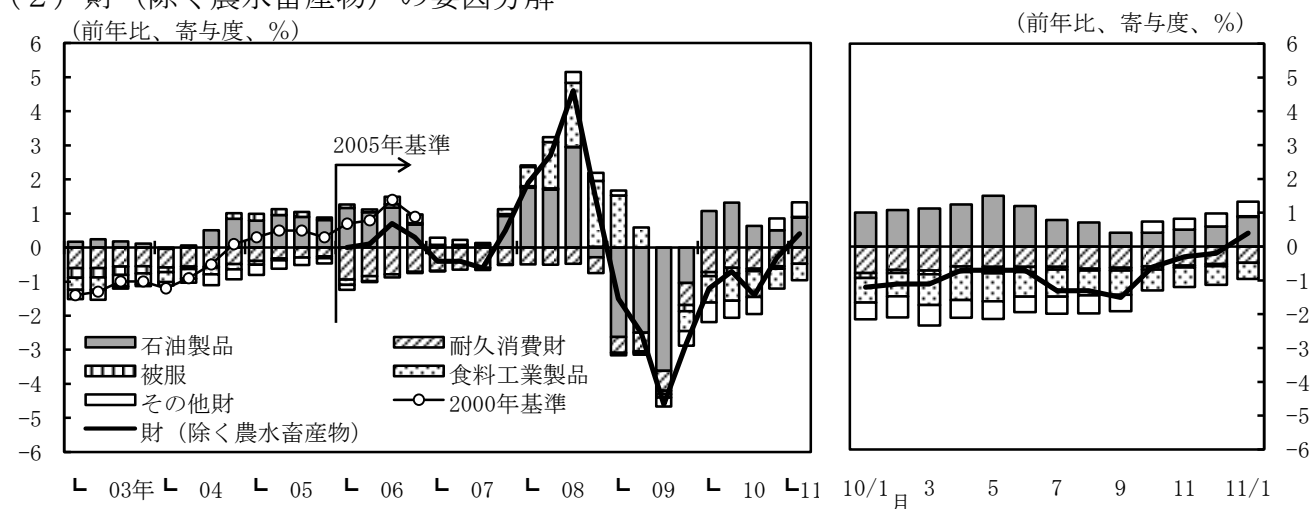
(資料) 日本銀行「企業向けサービス価格指数」

消費者物価

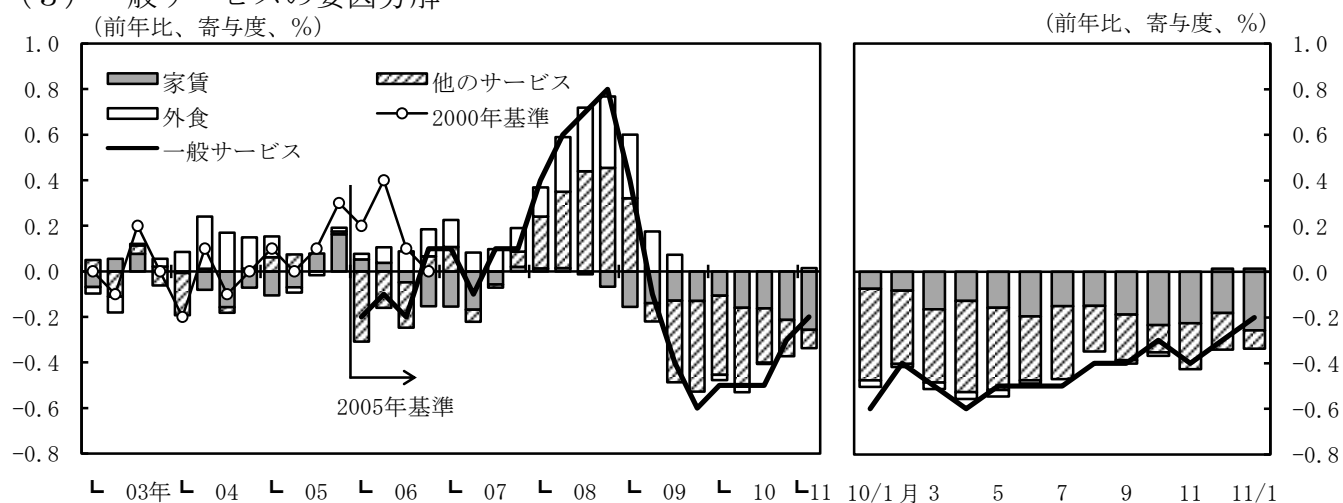
(1) 総合 (除く生鮮食品)



(2) 財 (除く農水畜産物) の要因分解



(3) 一般サービスの要因分解



(注) 1. 分類は、原則、総務省に則している。

ただし、以下の分類については、組み替えて定義している（「」内は総務省公表ベース）。

財＝「財」－「電気・都市ガス・水道」

公共料金＝「公共サービス」＋「電気・都市ガス・水道」

被服＝「衣料」＋「シャツ・セーター・下着類」

家賃＝「民営家賃」＋「持家の帰属家賃」

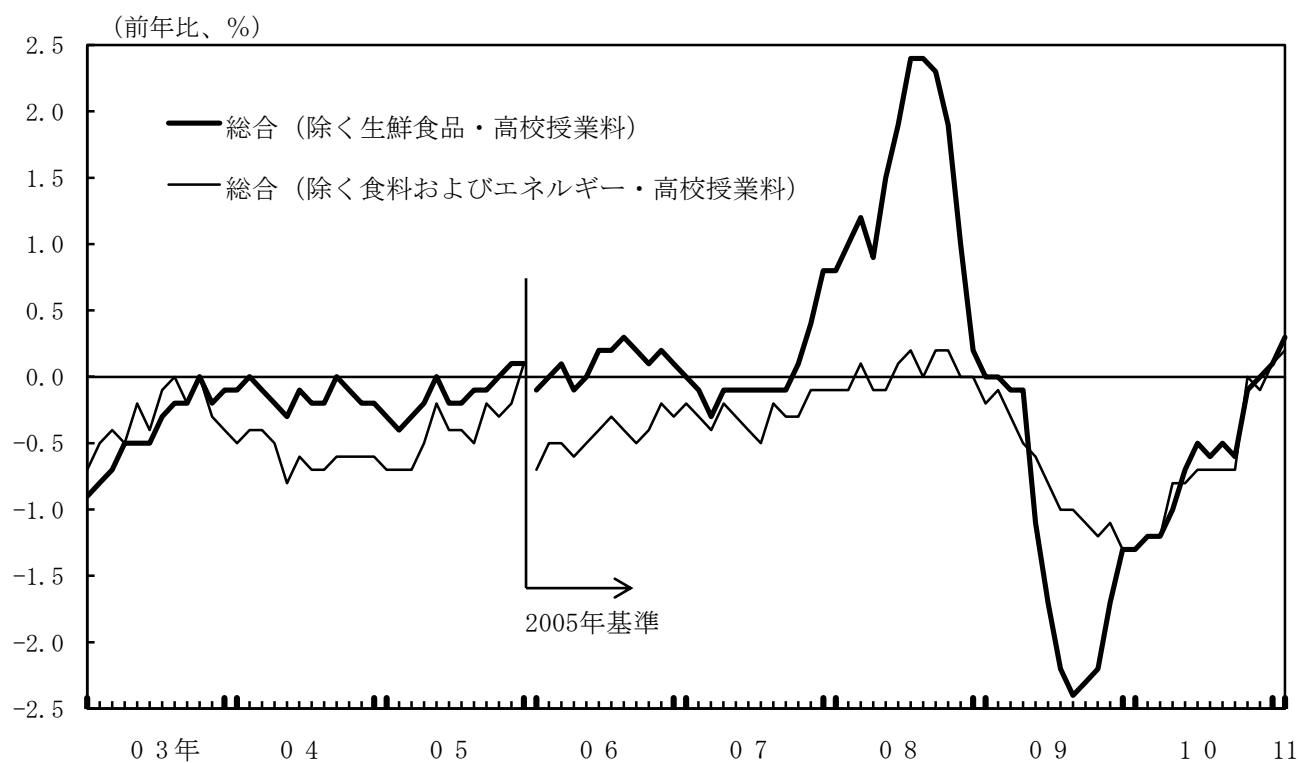
2. 「食料」は「酒類」を除く。また、「エネルギー」は「電気代」、「都市ガス代」、「プロパンガス」、「灯油」、「ガソリン」からなる。

3. 2011/1Qは、1月の値を用いて算出。

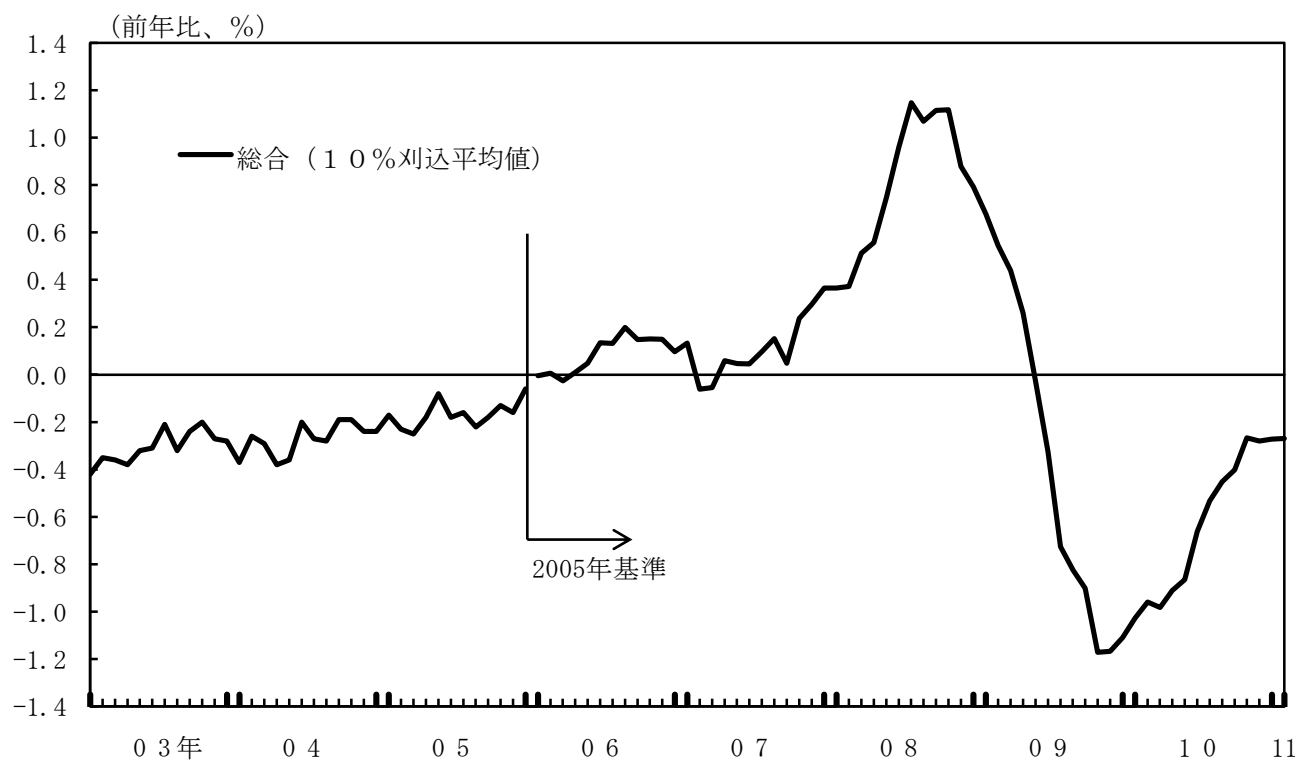
(資料) 総務省「消費者物価指数」

消費者物価の基調的な変動

(1) 高校授業料を除いた指数



(2) 刈込平均値

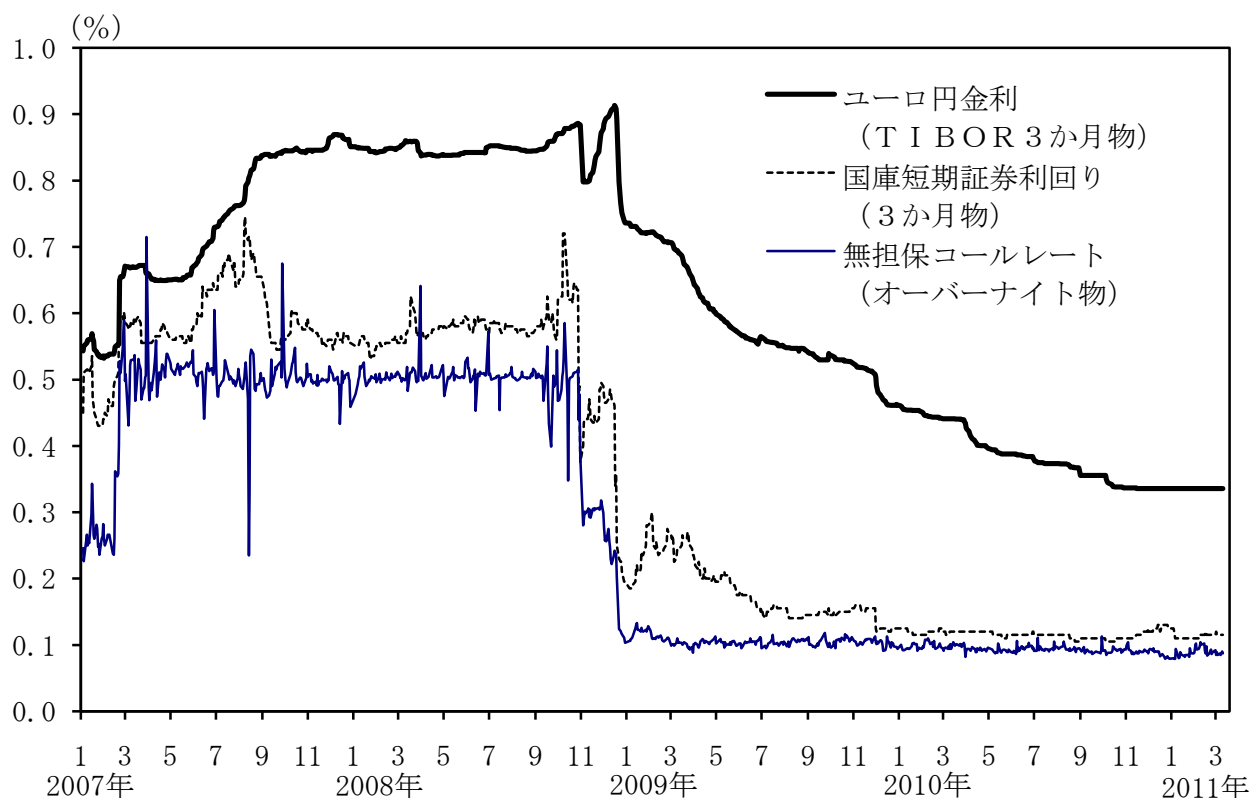


- (注) 1. 「食料」は「酒類」を除く。また、「エネルギー」は「電気代」、「都市ガス代」、「プロパンガス」、「灯油」、「ガソリン」からなる。
 2. 高校授業料は「公立高校授業料」および「私立高校授業料」からなる。
 3. 10%刈込平均値は、個別品目の前年同月比を値の小さな順に並び替え、値の大きい品目と小さい品目をウェイトベースでそれぞれ10%控除して、残った品目で新たに指数を作成して算出。

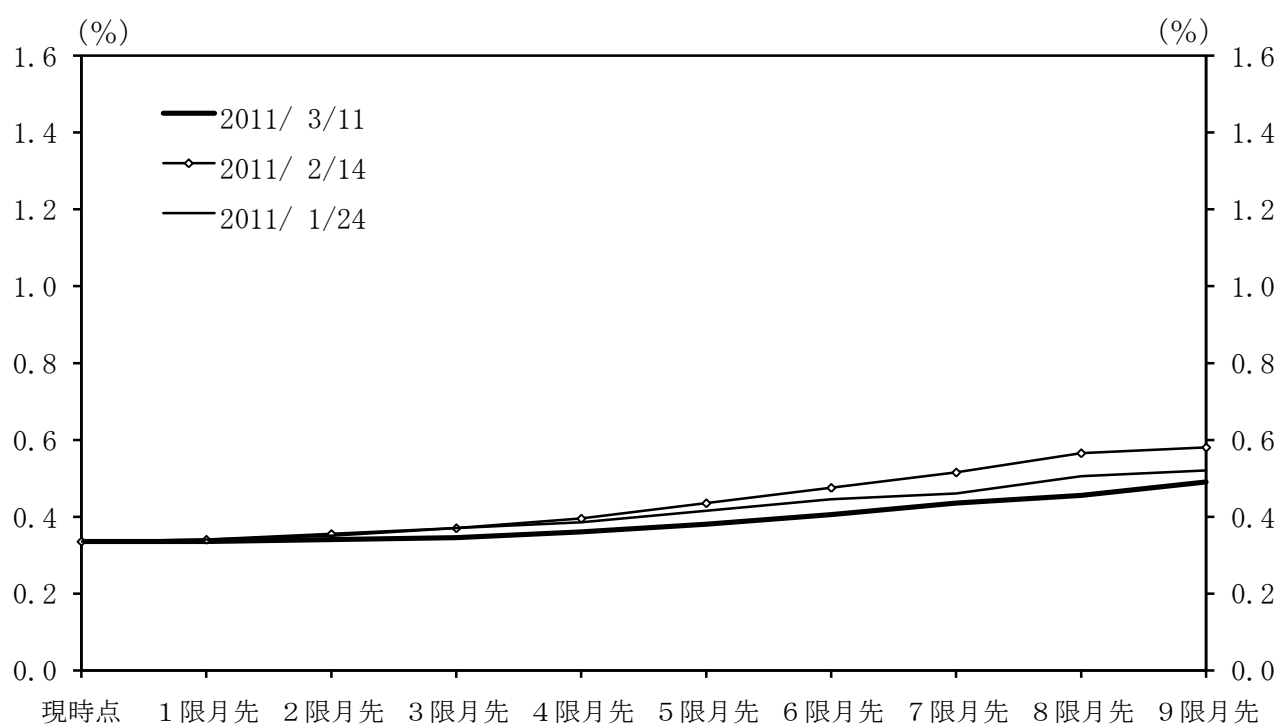
(資料) 総務省「消費者物価指数」

短期金利

(1) 短期金利



(2) ユーロ円金利先物 (3か月)



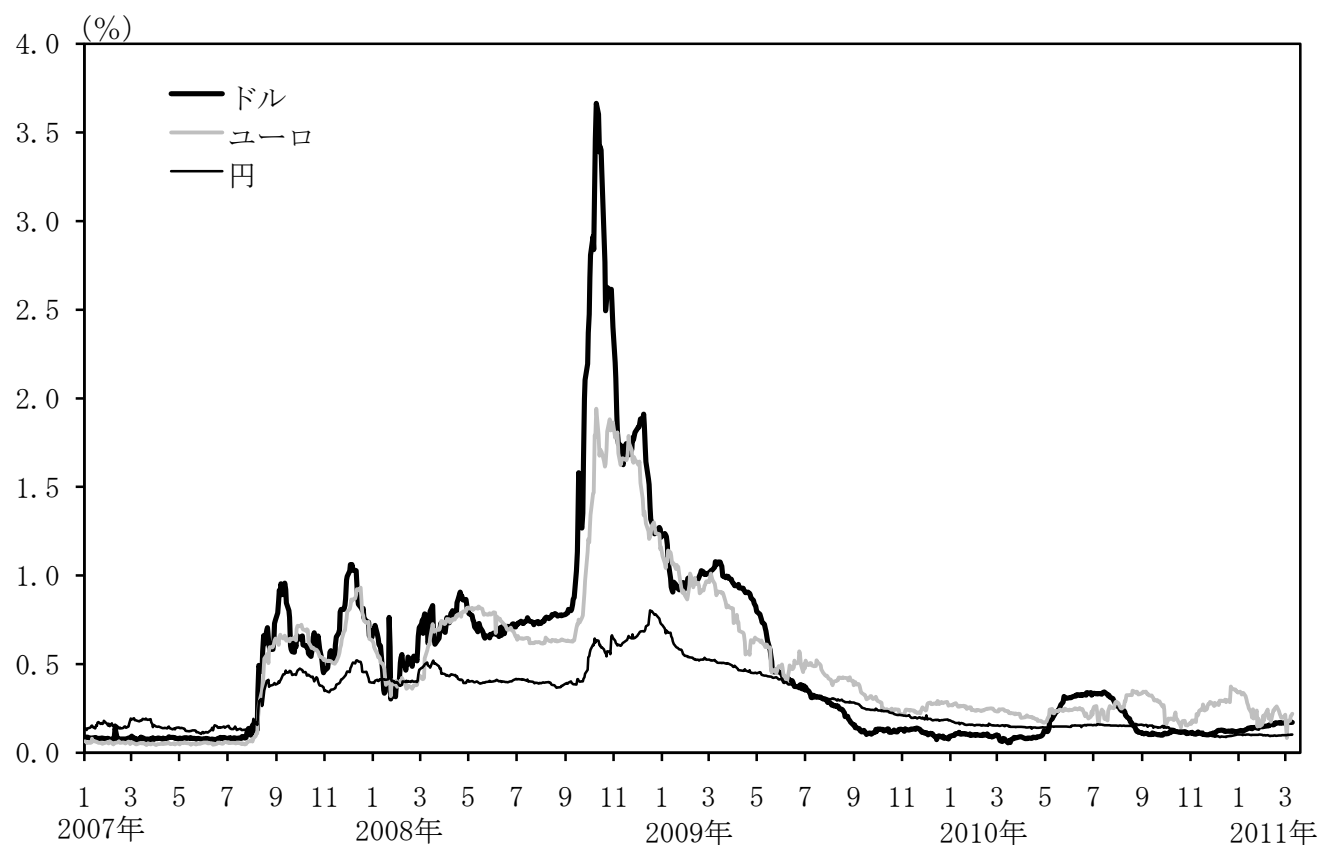
(注) 1. 2009年2月の統合発行以前の国庫短期証券利回りは政府短期証券利回り。

2. ユーロ円金利先物の限月には、3月、6月、9月、12月のみを採用。

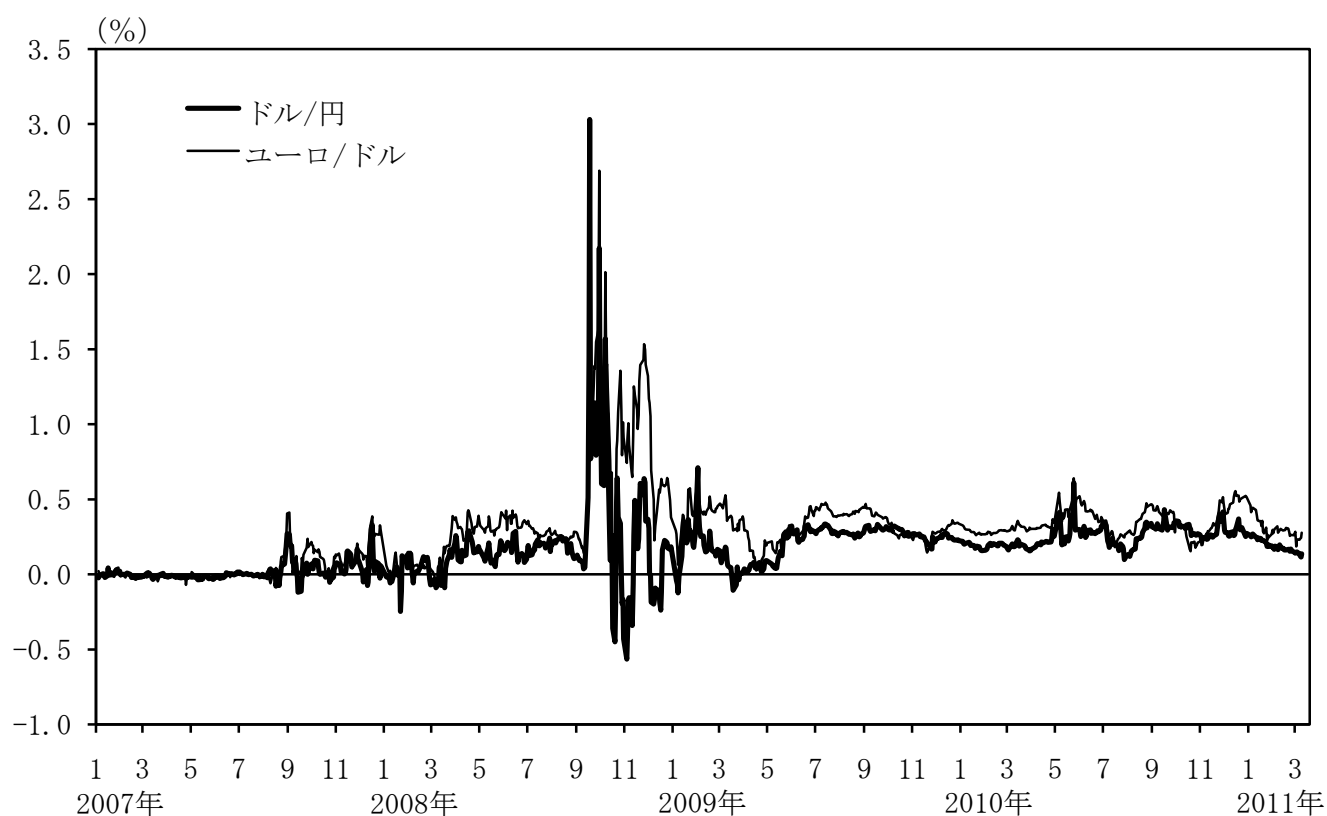
(資料) 全国銀行協会、日本相互証券、東京金融取引所、日本銀行

主要通貨の短期金融市場

(1) LIBOR-OISスプレッド（3か月物）



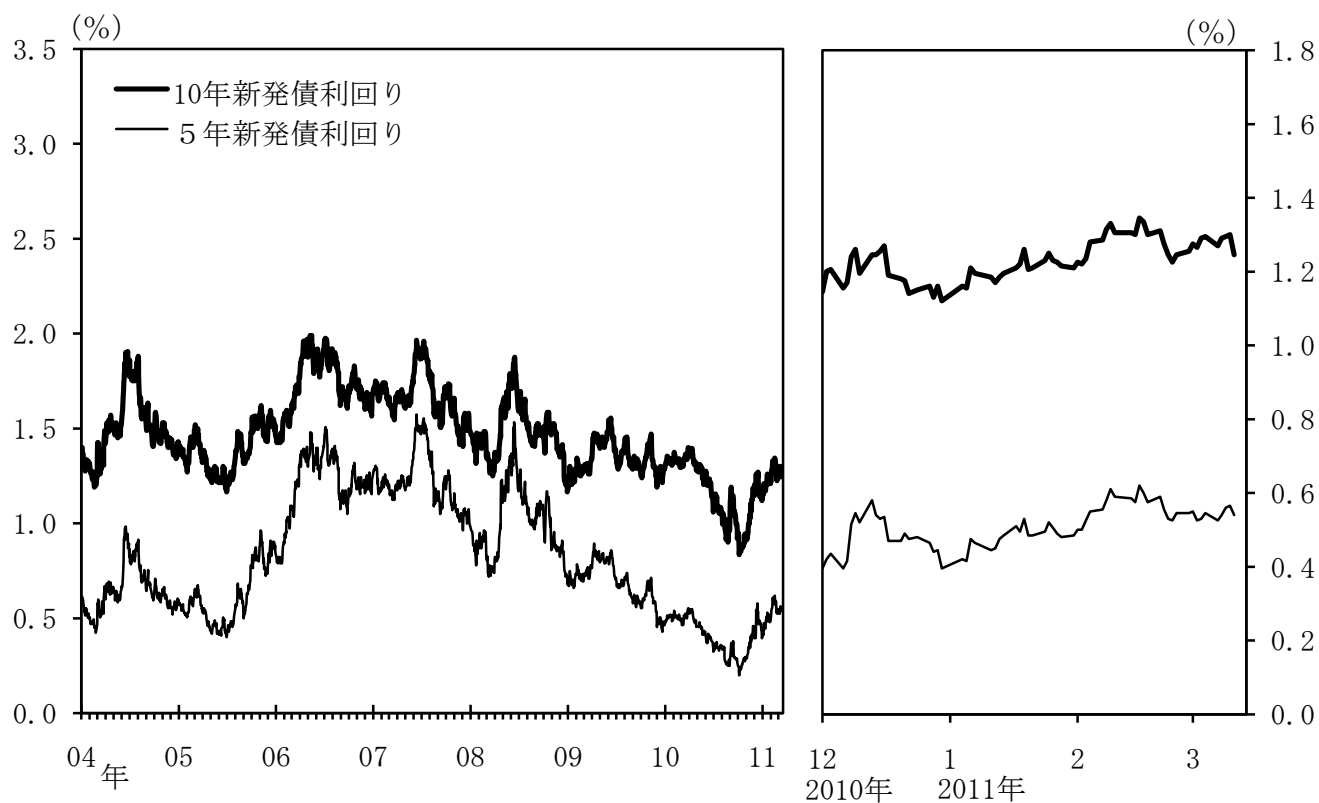
(2) ドル転コストドルLIBORスプレッド（3か月物）



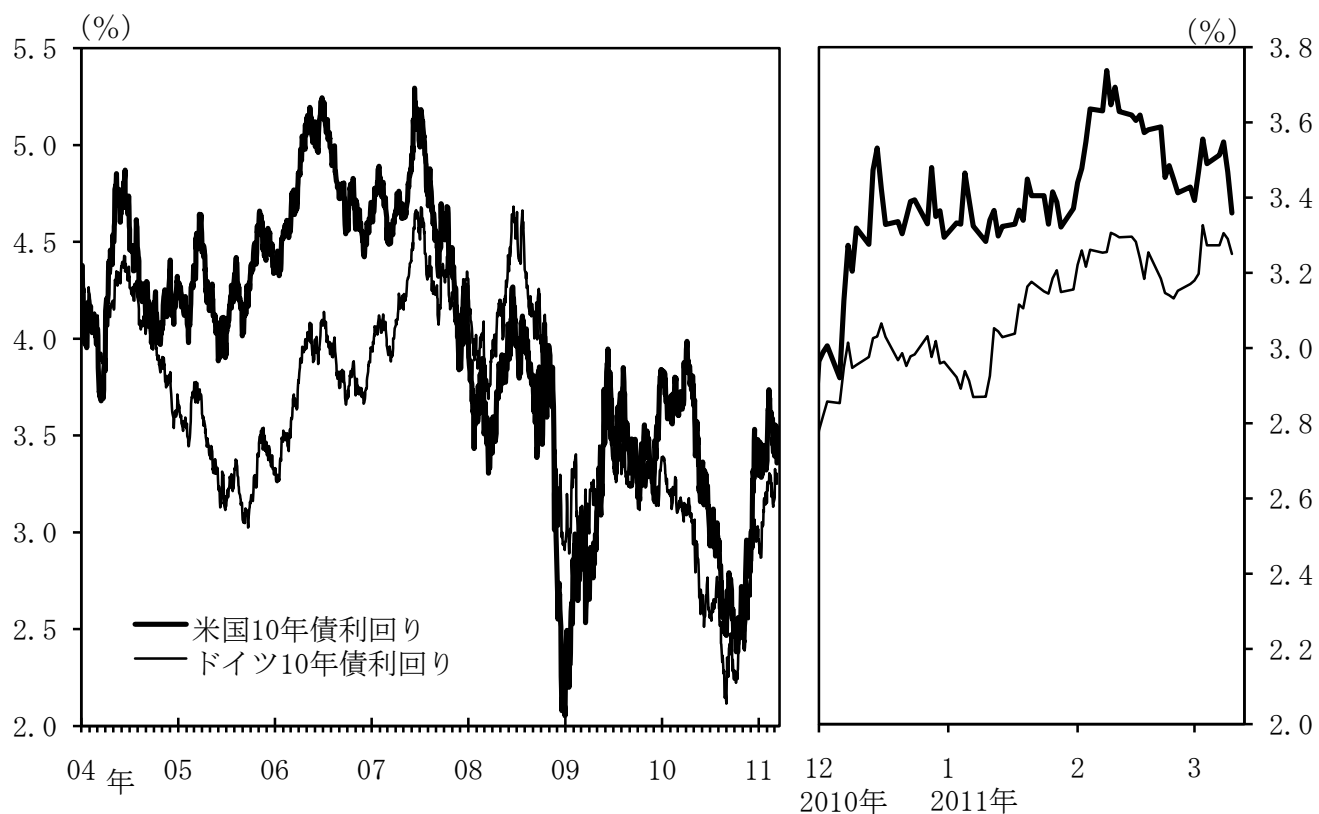
(資料) Bloomberg

長期金利

(1) 国内



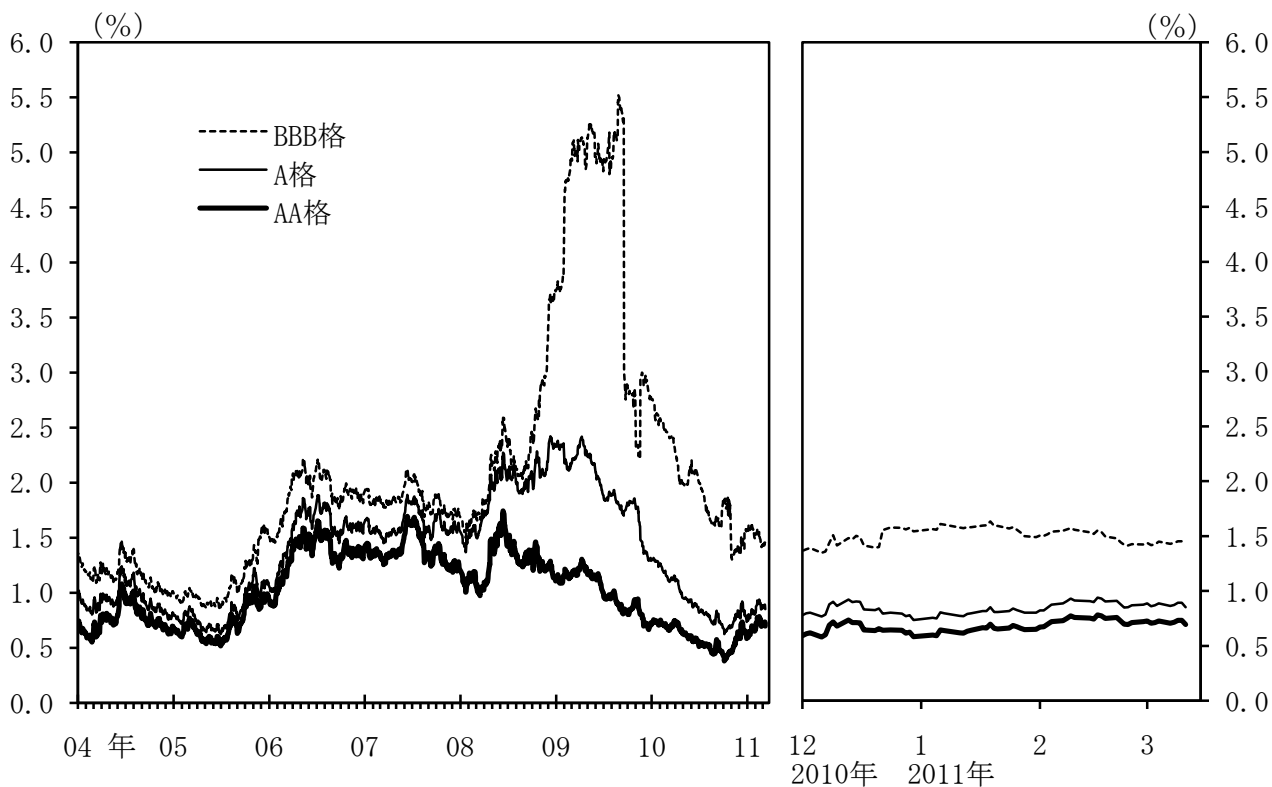
(2) 海外



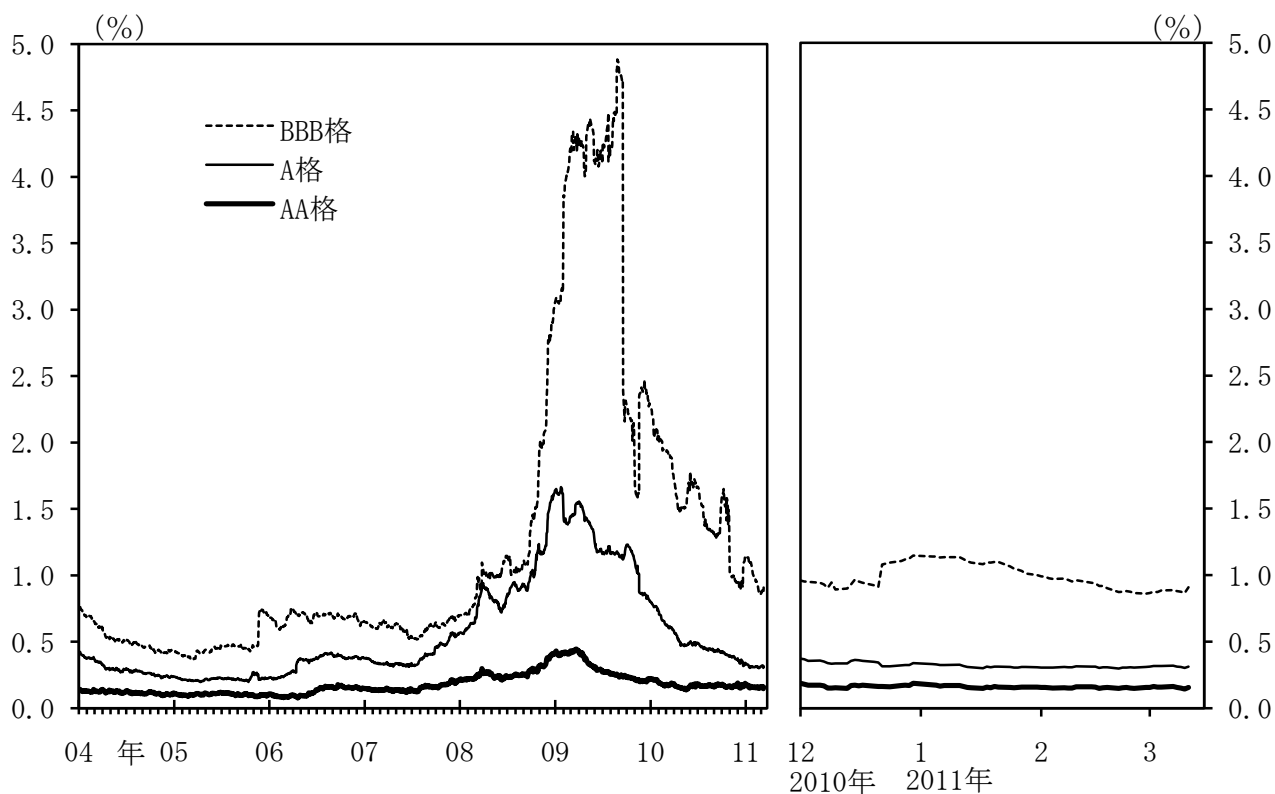
(資料) 日本相互証券、Bloomberg

社債流通利回り

(1) 社債流通利回り



(2) 利回り格差（社債流通利回り－国債流通利回り）



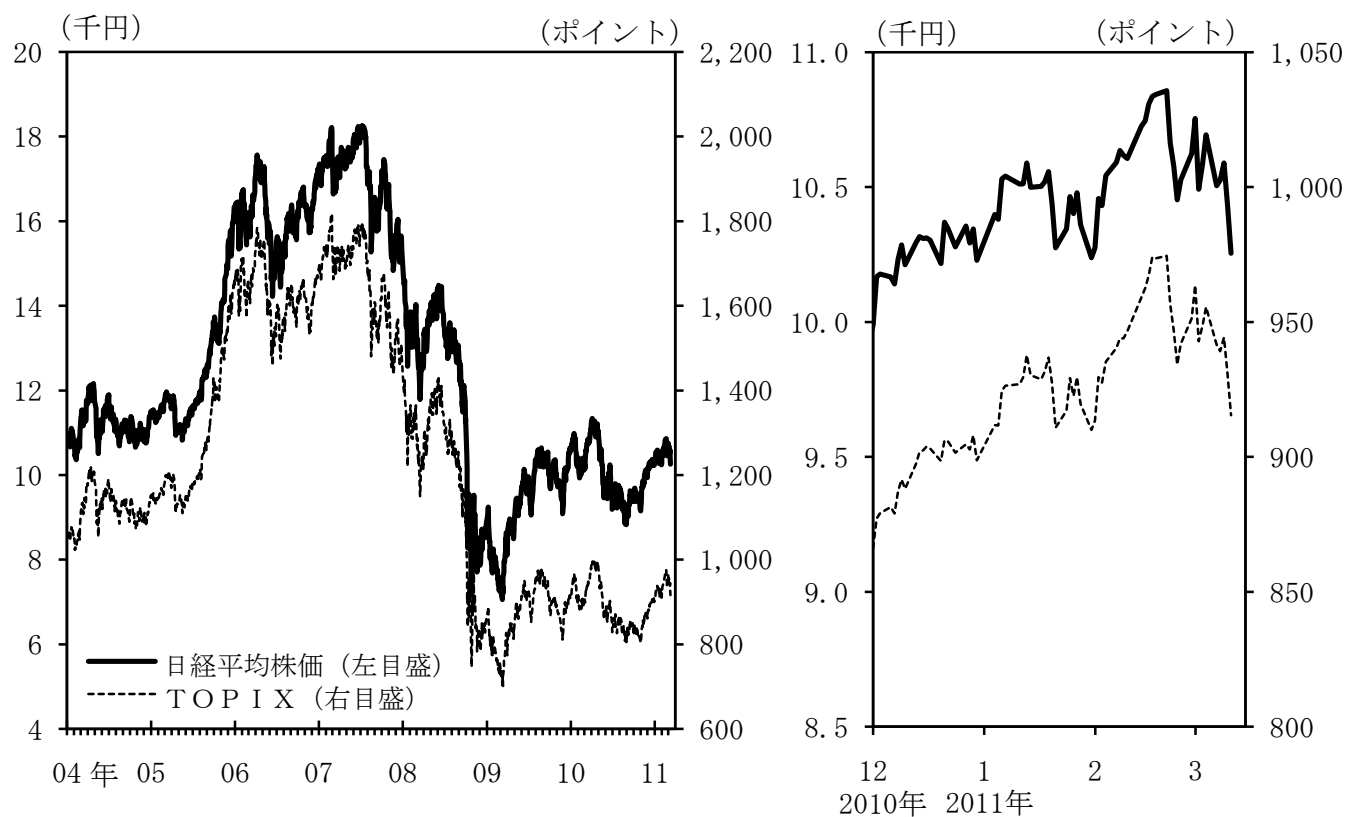
(注) 1. 社債、国債とも残存年数は5年。ただし、社債は、残存年数3年以上7年未満の銘柄より平均流通利回りを算出。

2. 社債利回りは日本証券業協会公表の気配値、格付けは格付投資情報センターによる。

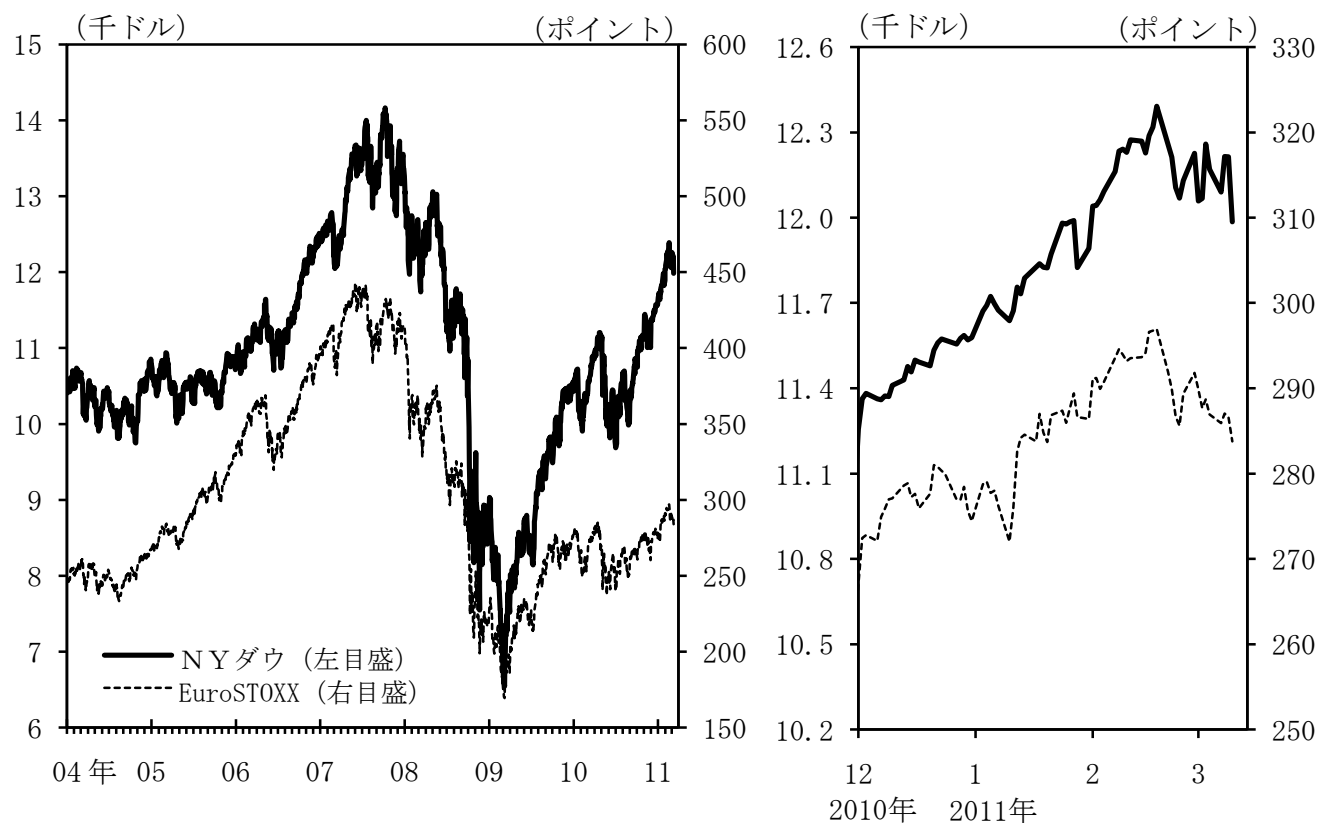
(資料) 日本証券業協会「公社債店頭売買参考統計値」

株 価

(1) 国内



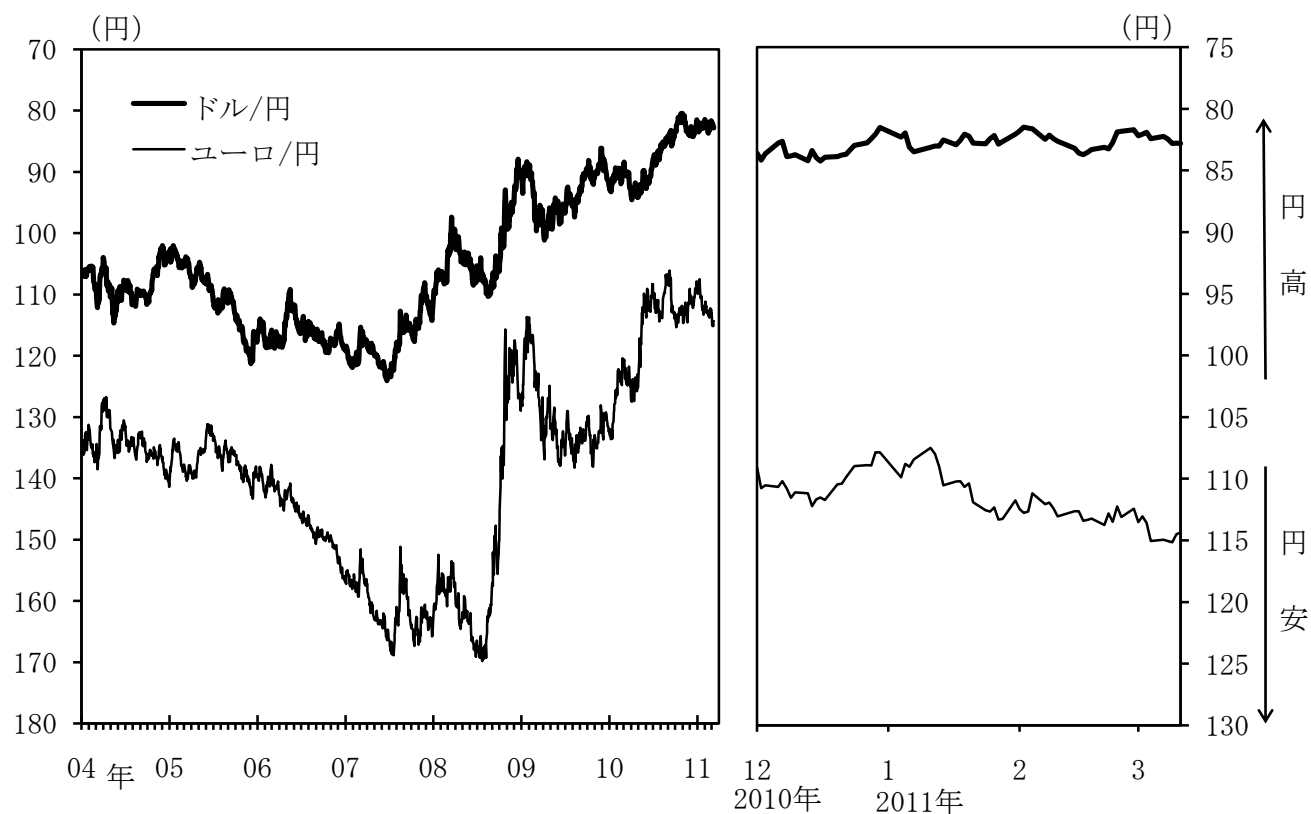
(2) 海外



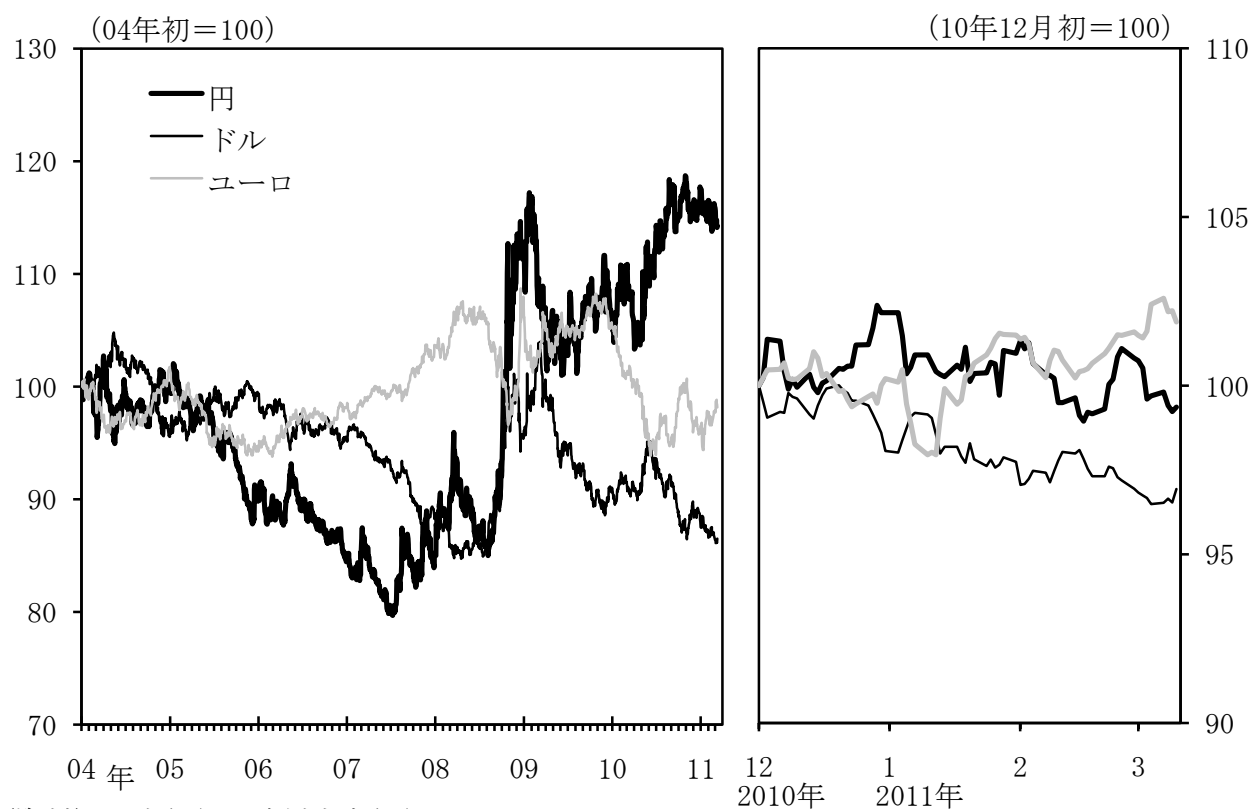
(資料) 日本経済新聞社「日本経済新聞」、東京証券取引所、Bloomberg

為替レート

(1) 主要通貨



(2) 名目実効為替レート

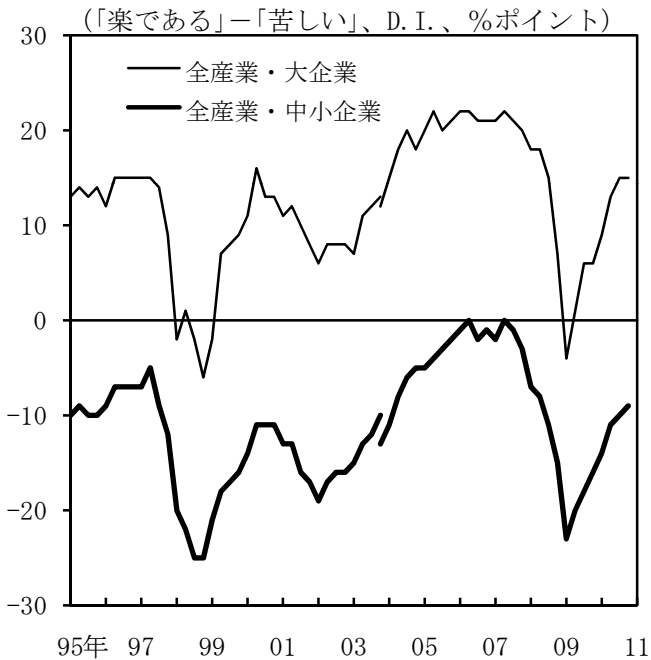


(資料) 日本銀行、欧州中央銀行、Bloomberg

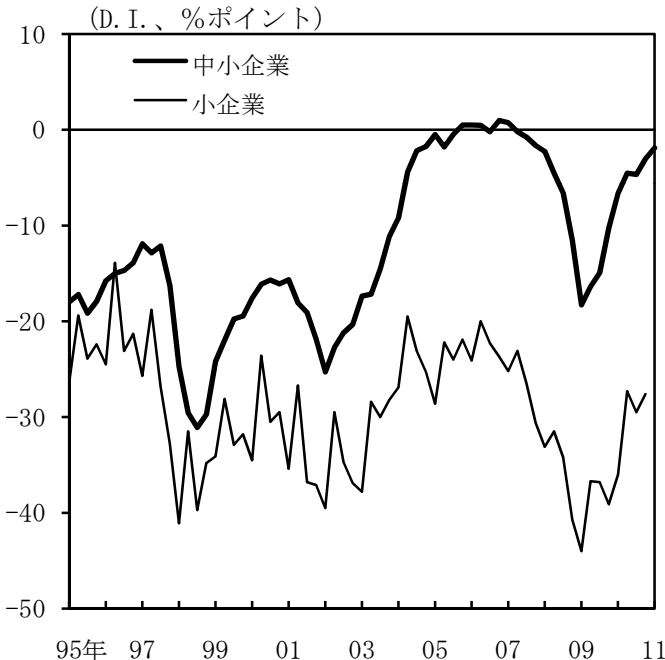
企業金融

(1) 資金繰り

<短観>



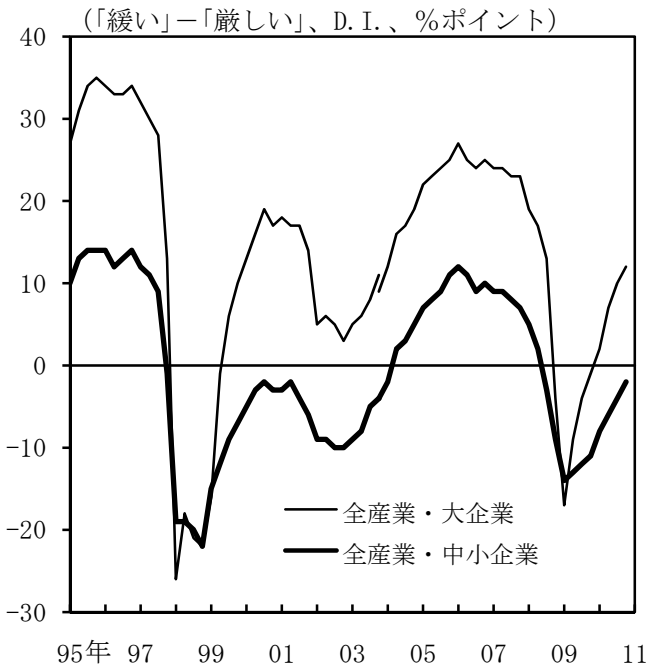
<日本公庫調査>



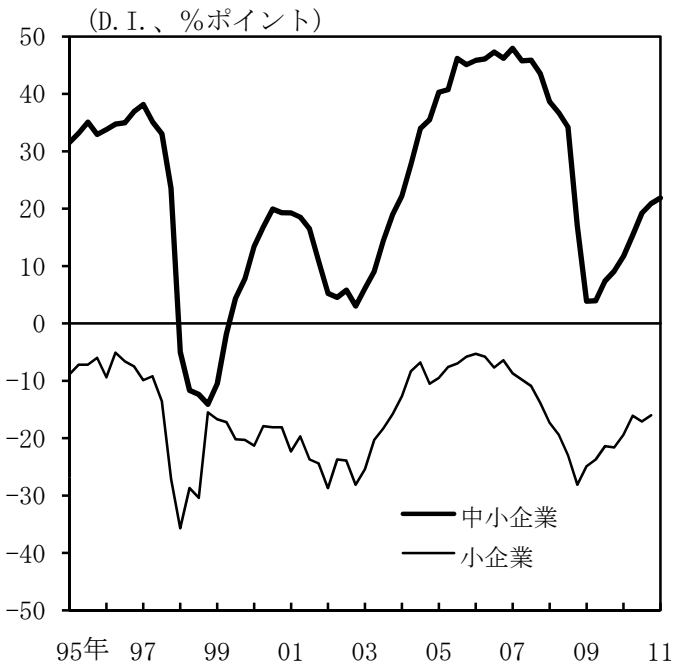
- (注) 1. 短観は2004/3月調査より見直しを実施。旧ベースは2003/12月調査まで、新ベースは2003/12月調査から(下の(2)も同じ)。
 2. D. I. の定義は、日本公庫の中小企業は「余裕」-「窮屈」、小企業は「好転」-「悪化」。
 3. 日本公庫の中小企業の計数は四半期平均値、2011/1Qは1~2月の値(下の(2)も同じ)。

(2) 企業からみた金融機関の貸出態度

<短観>



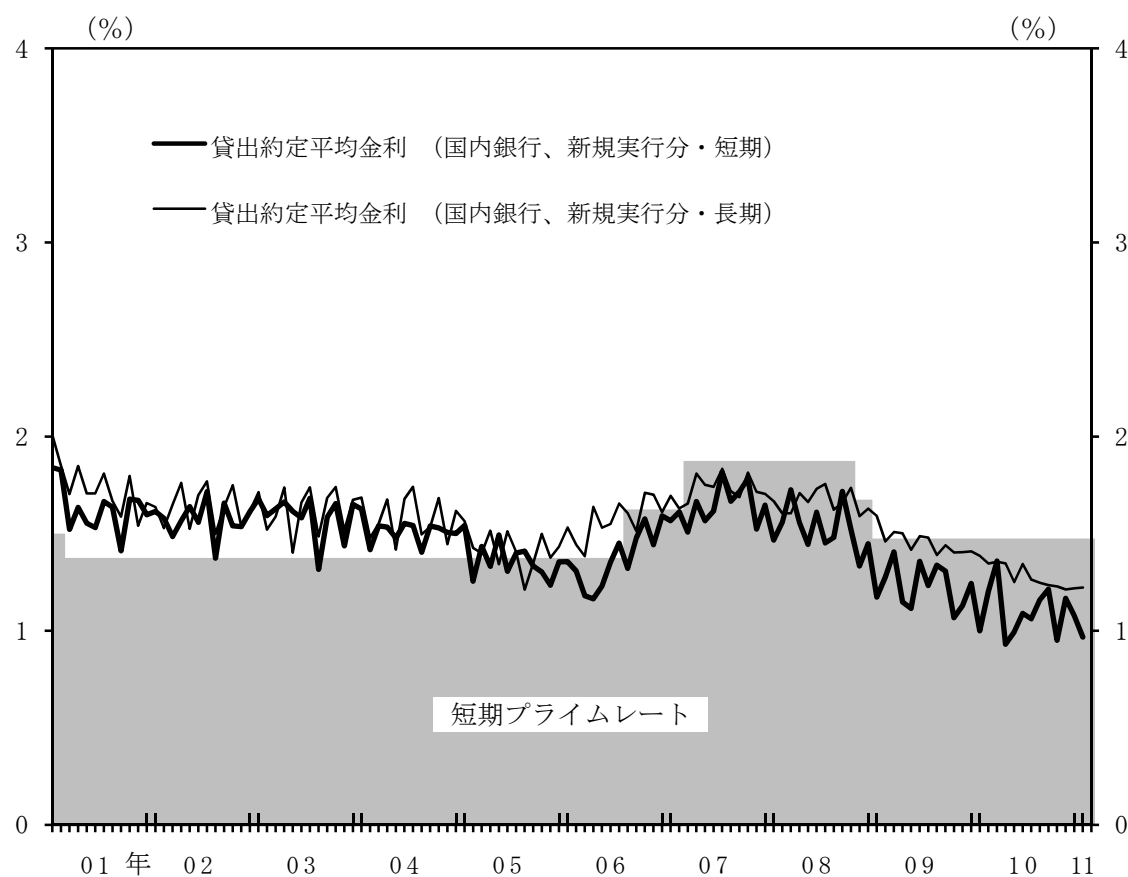
<日本公庫調査>



- (注) D. I. の定義は、日本公庫の中小企業は「緩和」-「厳しい」、小企業は「容易になった」-「難しくなった」。

(資料) 日本銀行「企業短期経済観測調査」、日本政策金融公庫「中小企業景況調査」「全国中小企業動向調査結果(小企業編)」

貸 出 金 利

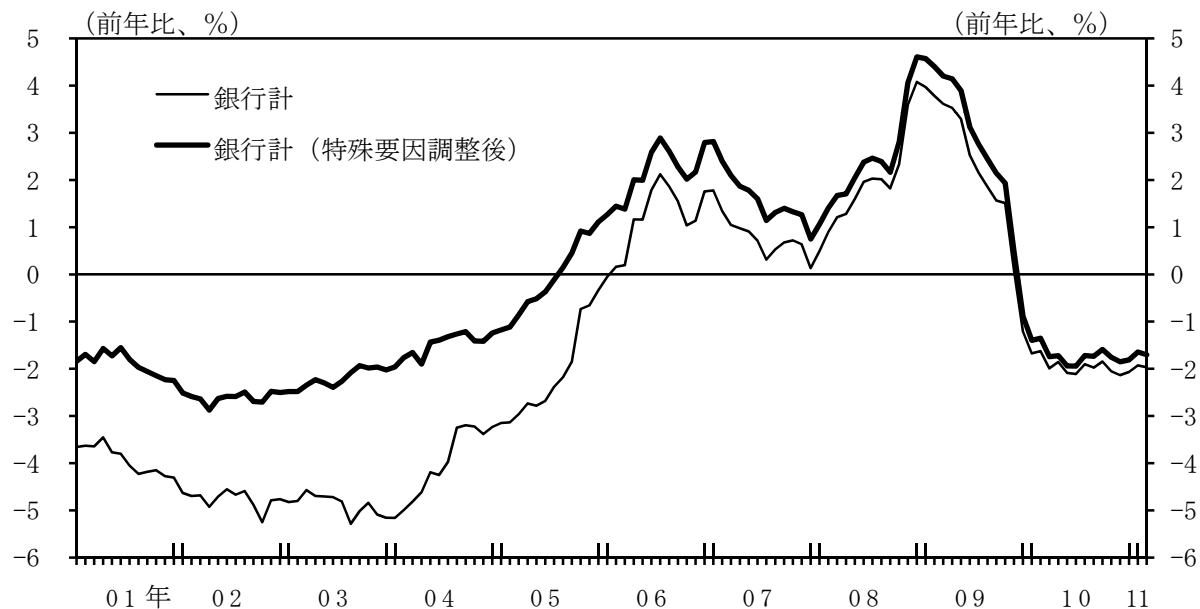


(注) 短期プライムレートは月末時点。

(資料) 日本銀行

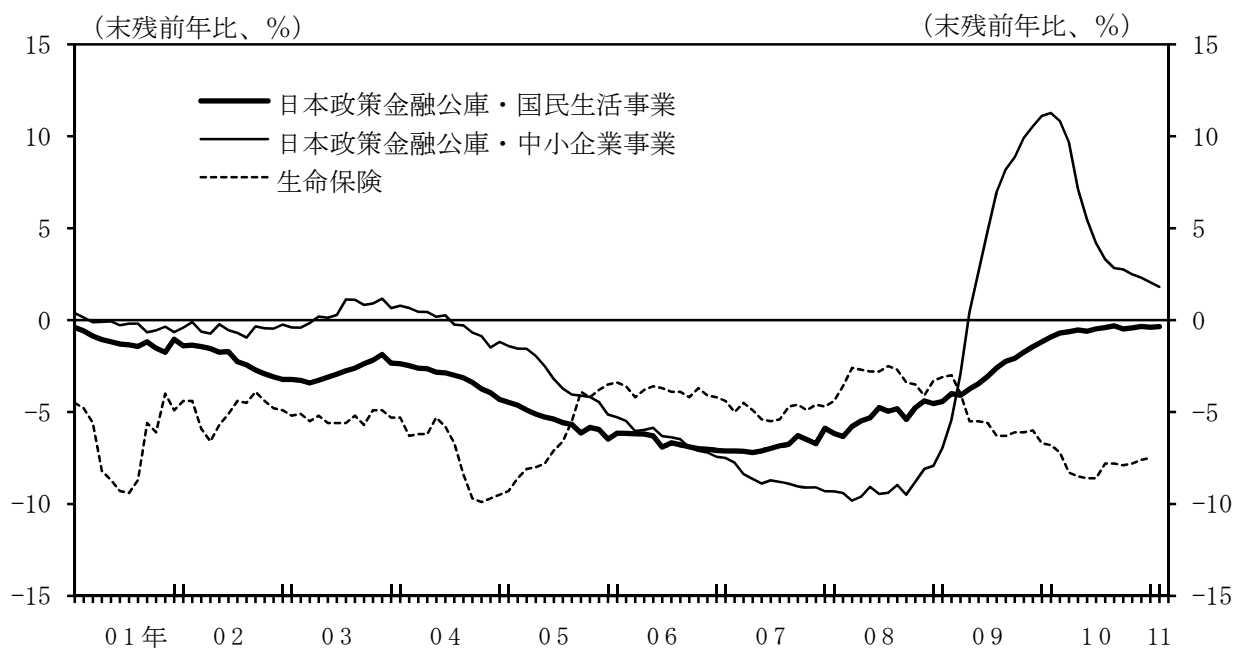
金融機関貸出

(1) 民間銀行貸出



- (注) 1. 総貸出平残ベース。
 2. 銀行計は、都銀等、地方銀行、地方銀行Ⅱの合計。
 3. 特殊要因調整後計数は、貸出の実勢をみるため、①貸出債権の流動化による変動分、②為替相場変動による外貨建貸出の円換算額の変動分、③貸出債権の償却による変動分、④旧国鉄清算事業団向け貸出の一般会計への承継分、および⑤旧住宅金融債権管理機構向け貸出の整理回収機構向け貸出への振り替わり分を調整したもの。あくまでも種々の前提に基づく試算であり、試算結果については幅を持つてみる必要がある。

(2) その他金融機関貸出

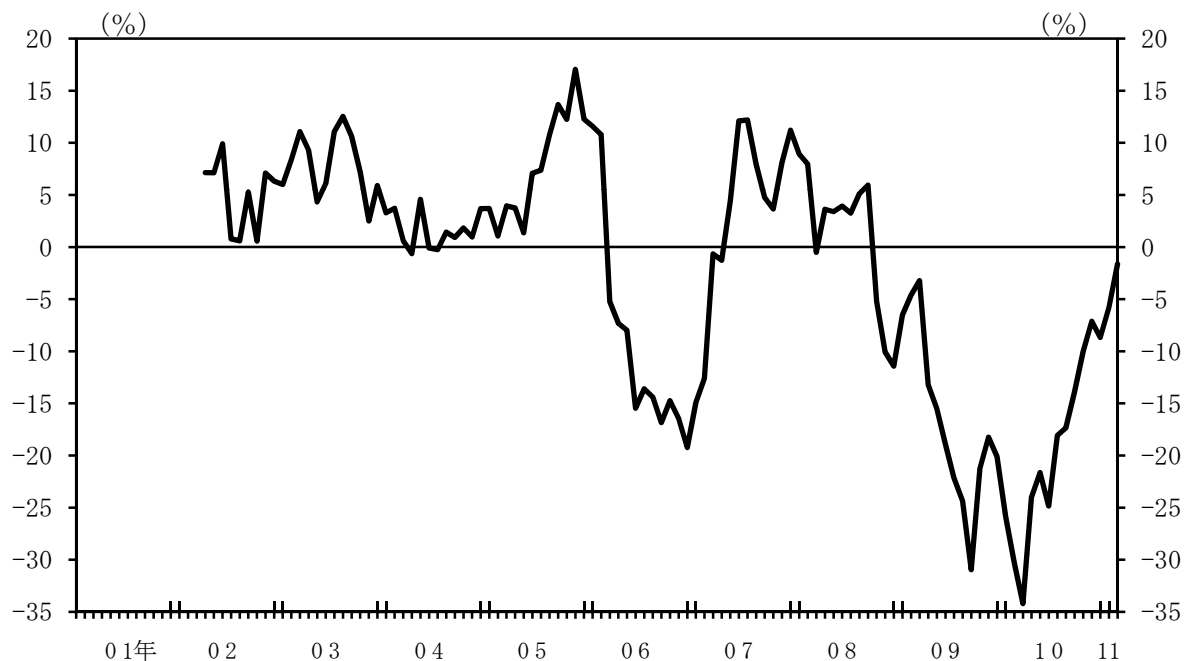


- (注) 日本政策金融公庫・中小企業事業の計数は、信用保証協会向け貸付残高を除くベース。

(資料) 日本銀行、日本政策金融公庫、生命保険協会

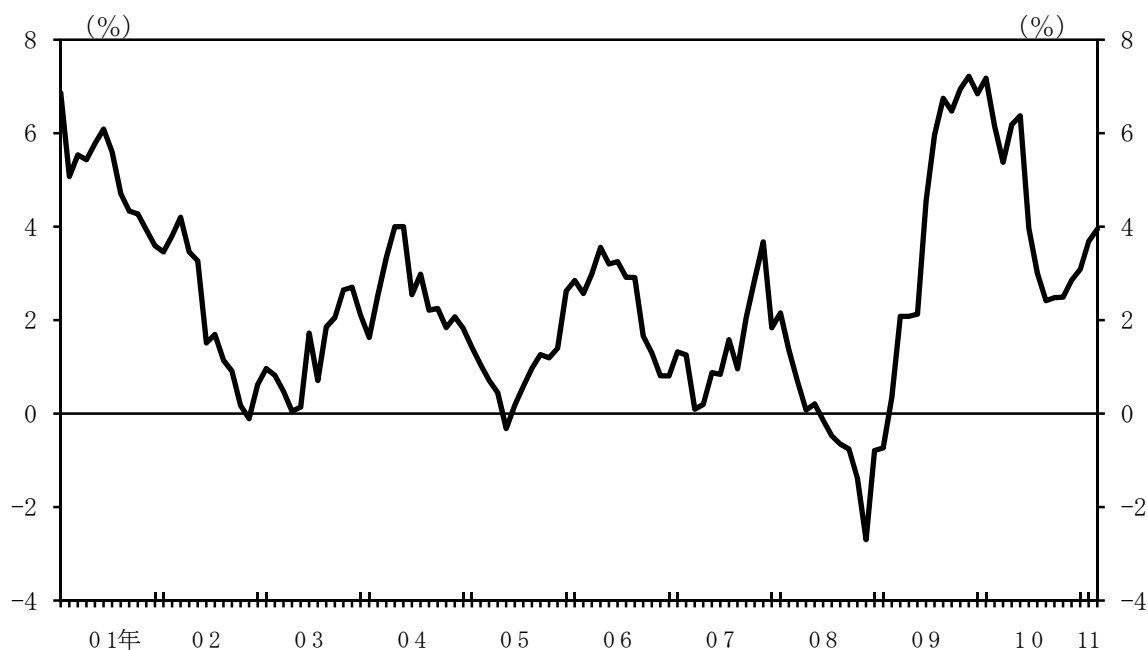
資本市場調達

(1) C P 発行残高 (末残前年比)



(注) 短期社債（電子CP）の残高前年比。銀行、証券会社および外国会社等による発行分を含まず、ABCPを含む。なお、2008/3月以前は、日本銀行と当座勘定取引のある銀行・証券会社の引受によるものの残高前年比。

(2) 社債発行残高 (末残前年比)



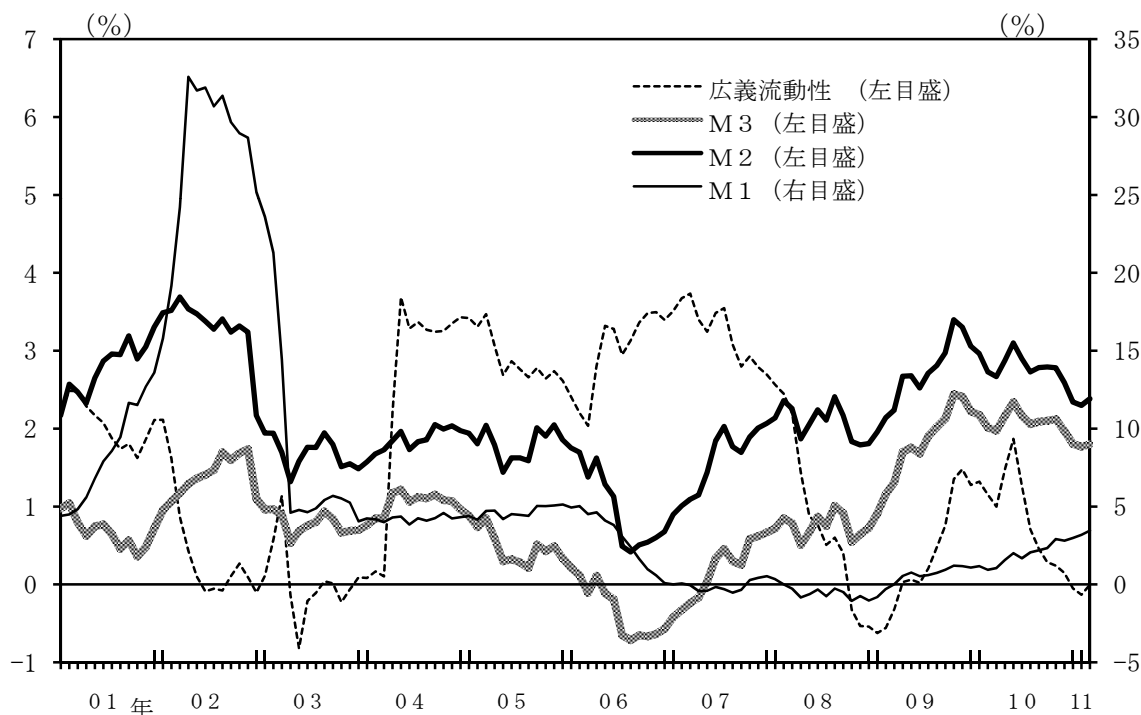
(注) 社債発行残高の前年比は以下の前提のもとで計算している。

- ①国内、海外で発行された普通社債の合計値。
- ②銀行発行分を含む。
- ③国内発行分は、振替債の残高。ただし、2008/4月以前については、振替債以外も含む残高合計値を段差修正して接続。

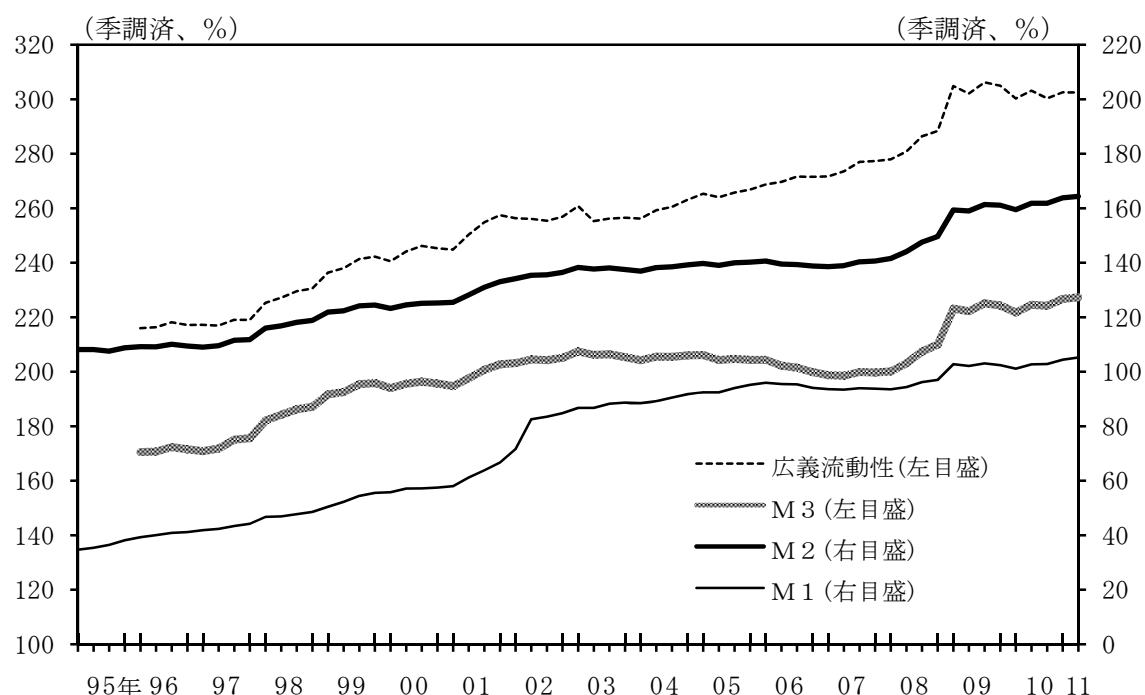
(資料) 証券保管振替機構「短期社債振替制度・発行者区分別残高状況」、「一般債振替制度・債券種類別発行償還状況」、日本銀行「貸出・資金吸収動向等」、日本証券業協会「公社債発行額・償還額」、アイ・エヌ情報センター「Funding Eye」

マネーストック

(1) 前年比



(2) 対名目GDP比率

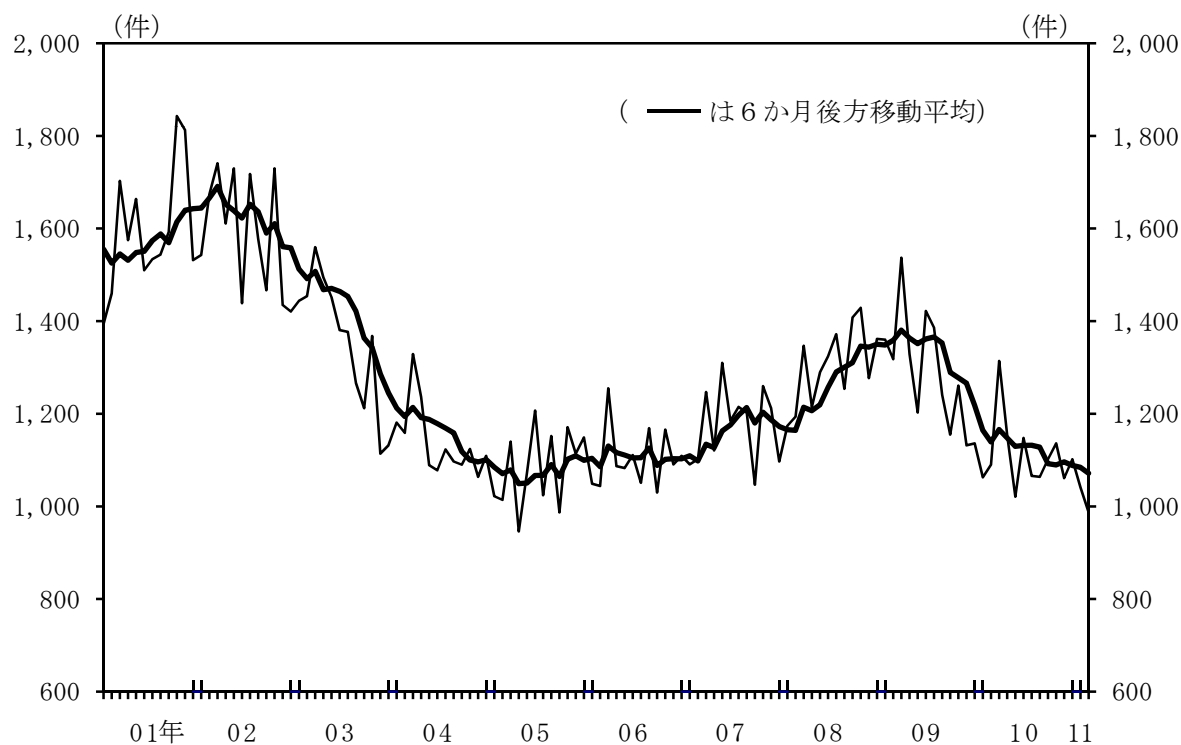


- (注) 1. M1（現金通貨＋預金通貨）、M3（現金通貨＋預金通貨＋準通貨＋CD）の対象金融機関は、M2（現金通貨＋預金通貨＋準通貨＋CD）の対象金融機関のほかに、ゆうちょ銀行等を含む。
 2. (1)の2004/3月以前、(2)の2003/3月以前のM1、M2、M3、広義流動性は、マネーサプライ統計の「M1」、「M2＋CD」、「M3＋CD－金銭信託」、「広義流動性－債券現先・現金担保付債券貸借」による計数。なお、(2)は、これらの季調値を段差修正したうえでマネーストック統計に接続。
 3. 2011/1Qのマネーストックは1～2月の平均値、2011/1Qの名目GDPは2010/4Qから横這いと仮定。

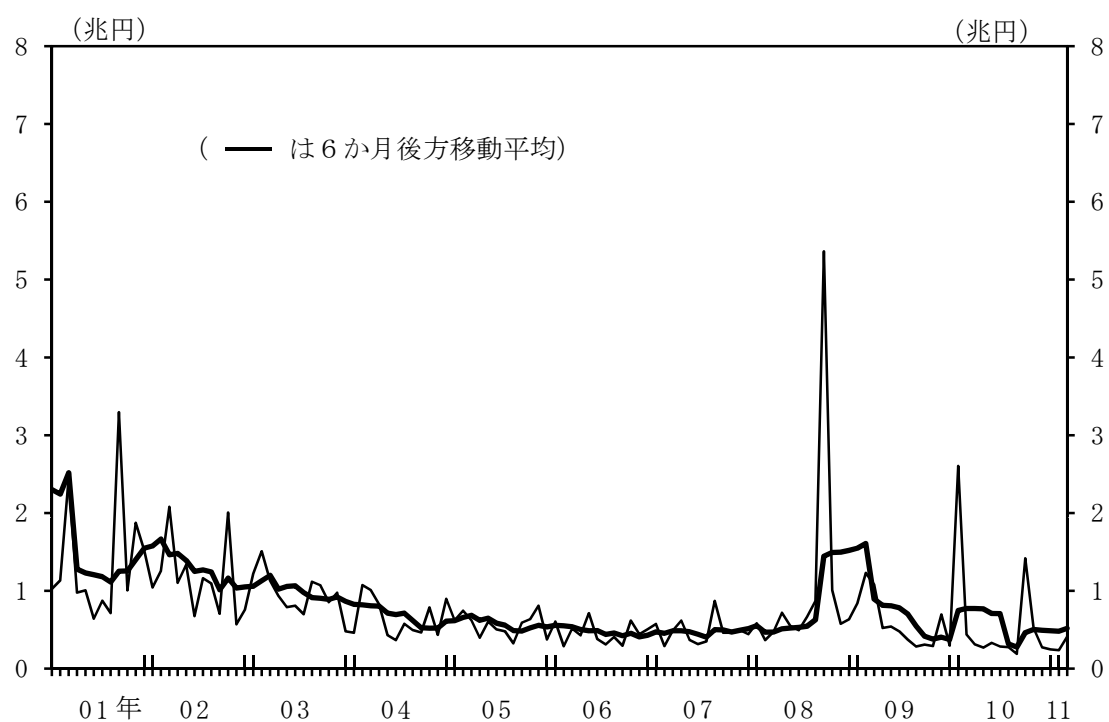
(資料) 内閣府「国民経済計算」、日本銀行

企 業 倒 産

(1) 倒産件数



(2) 倒産企業負債金額



(資料) 東京商工リサーチ「倒産月報」